

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

■主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会

■お問い合わせ: 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル12階

電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225 E-mail: contact2012@inter-bee.com

International Broadcast Equipment Exhibition Inter BEE

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

REVIEW 2011

REVIEW 2011

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

Inter BEE online
www.inter-bee.com

Inter BEE 2011

International Broadcast Equipment Exhibition

音と映像と通信のプロフェッショナル展「Inter BEE 2011」は、日本放送協会と社団法人日本民間放送連盟の後援、多くの関連業界団体の協力のもと、11月16日(水)から11月18日(金)までの3日間、幕張メッセにて開催した。

47回目を迎えた今回、2011年7月には放送史上最大の革新であるアナログ放送停波(東北3県を除く)により、デジタルへの移行がなされ、社会的にも放送・映像メディアの大きな変化を迎える中での開催であった。

Inter BEE 2011では、従来の映像、音響、照明機器の技術動向に加え、ホワイトスペースやV-Low等のデジタル時代の新たな放送事業の最新動向が紹介された他、ラウドネスサミット東京の開催や、CoFesta2011のオフィシャルイベントの認定を受けるなど、デジタル新時代における映像コンテンツ制作技術と配信技術を提案するメディア総合展示会への変貌を遂げようとする開催となった。

Exhibitors

展示領域の拡大により多彩な企業が参加

デジタル化の進展に伴い、年々展示領域が拡大され、幅広い分野からの出展者が参加することによって、新たなビジネスの可能性が高まっている。

出展者：**800**社
海外出展者：**466**社

Trading Visitors

幅広い分野からのビジネスユーザが来場

活発な情報収集を目的とした熱心なビジネスユーザが多数来場し、今まで出会うことのなかった潜在顧客との交流の機会を提供。プレス取材も多く、国内外に広く紹介された。

来場者：**30,752**名
報道関係者：**409**名

International

アジアマーケットへもアプローチ

出展者の国・地域数は過去最多となり、Inter BEE が国際的な技術交流、市場開拓の場として認識されつつある。来場者はアジアのみならず中・南米からも増加。

海外出展者：**34**ヶ国・地域
海外来場者：**39**ヶ国・地域



Professional Audio

心に響く音は テクノロジーで再現される

デジタルサウンド対応のバリエーション豊かな製品、ワークフローの効率を追求したハイエンド製品が一堂に会した。ラウドネスメータゾーンやワークショップも好評。

■プロオーディオ機器

マイクロホン、レコーダ、デジタル オーディオ ワークステーション(DAW)、コンソール、ミキサ、マスタリング機器・システム、音声圧縮・伝送技術、各種コンバータ、エフェクタ(ハード、プラグイン)、アンプ、スピーカ、プレーヤ、音響設計・制御・施工、設備音響製品、インターカム、伝送ケーブル、アクセサリ、電源、ラック、ケース、バッグ、その他周辺機器

Production & Post-Production

創造はさらなる価値を 求めて進化する

次世代映像フォーマット 4K、8K や 3D が注目され、映像制作をサポートする多彩な最先端テクノロジーや製品が並んだ。

■プロダクション関連

撮像装置(HDTVシステム、スタジオカメラ、VTR 一体型カメラ、カムコーダ)、記録装置(ビデオサーバ、ファイルサーバシステム、メモリーデバイス、データ圧縮技術)、表示装置(映像モニター、プロジェクタ、ディスプレイ、プロンプタ)、他

■ポストプロダクション関連

編集・制作装置(編集機、スイッチャ、ノンリニア編集、字幕・タイトル、キャラクタージェネレータ、合成、ペイント、メディアコンバータ)、マルチメディアシステム(CG制作、アニメーション制作、バーチャルスタジオ)、制作管理システム(コンテンツマネジメント、データベース、ストレージ、アーカイブ)、他

Distribution & Delivery

情報は多様な手段で伝えられる

アーカイブ、送出および再送信のソリューションの提案、インターネットライブ配信向け機材の展示が充実。

■送出・送信システム関連

送出システム(自動送出、サーバ、ITソリューション、ファイルシステム、グラフィックライブラリ、フィルム & テレシネ、グラフィックスシステム、外部情報対応システム)、中継システム(基地局設備、FPU、SNG、中継車、車載用関連、連絡用無線機、緊急報道システム)、送信システム(ラジオ放送、FM 放送、地上波テレビ放送、ワンセグ放送、衛星放送、CATV、多重放送、伝送ケーブル、ワイヤレスシステム、光ファイバ)、他

■放送機器関連製品

電源装置(無停電電源装置、定電圧・定電流電源装置、車載用電源、バッテリー、バッテリー充電器)、測定・変換機器(試験信号発生器、測定器、信号変換器)、各種特機・周辺製品(キャビネット、ラック、ベダスタル、三脚、雲台、クレーン、ステディカム、ファンチャ、運搬用ケース)、他

Professional Lighting

光で表現し コミュニケーションする

最先端 LED 照明機器、操作卓等のステージング照明機器や、舞台芸術やエンターテイメントを追求した映像・音響とのコラボレーションを可能にするソリューションが注目を集めた。

■プロライティング機器

スタジオ照明機器、舞台照明機器、調光システム、調光卓、無線遠隔操作装置、舞台・テレビ照明器具、テレビスタジオ用照明パトーン昇降装置、写真スタジオ用照明設備、その他周辺機器

Cross Media

メディアの次世代技術が集まる

2011年より、クロスメディアとデジタルコンテンツを訴求する新部門「クロスメディア部門」を新設し、新しい産業分野におけるコンテンツ制作・管理から配信・購入までを紹介。

■IPTV：映像圧縮技術、映像編集・管理、映像配信、

データ放送、ビデオオンデマンド他

■Mobile TV：モバイル端末向け映像編集・映像配信、

モバイルコンテンツ・アプリケーション、モバイル端末機器他

■Digital Cinema：デジタルシネマ用撮影・編集・配信システム、

デジタルシネマサーバ、映写システム他

■Digital Sinage：サイネージ編集・管理・受像システム、コンテンツ配信、

通信ネットワーク、広告メディア他

■3D Image：3D 映像制作・編集システム、3D 映像受像機・端末・システム、

3D 上映システム、3D コンテンツ他

■Digital Contents：実写、アニメーション、コンピュータグラフィックス、

バーチャルリアリティ他

Forum & Symposium

最新動向を伝え、 多彩なニーズに応える

従来の「創る」、「送る」のみならず、「魅せる」をテーマにした企画で、ステージング映像、プロジェクションマッピング、ライブサウンド等の新たな分野への領域拡大を目指した。

開催概要

- 名 称
（第47回）2011年国際放送機器展
International Broadcast Equipment Exhibition 2011
（略称：Inter BEE 2011）
- 会 期
2011年11月16日（水）～18日（金）3日間
- 開場時間
11月16日（水）10:00～17:30
11月17日（木）10:00～17:30
11月18日（金）10:00～17:00
- 会 場
幕張メッセ/展示ホール4～8・国際会議場
- 入 場
無料（全来場者登録入場制）
- 主 催
一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）
- 後 援
日本放送協会（NHK）
社団法人日本民間放送連盟（NAB-J）
- 協 力
社団法人衛星放送協会
映像産業振興機構
社団法人劇場演出空間技術協会
3D コンソーシアム
全国舞台テレビ照明事業協同組合
超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム
特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム
財団法人デジタルコンテンツ協会
デジタルサイネージコンソーシアム
社団法人デジタルメディア協会
社団法人日本アド・コンテンツ制作社連盟
社団法人日本映画テレビ技術協会
日本映画テレビ照明協会
一般社団法人日本映画テレビプロデューサー協会
社団法人日本音楽スタジオ協会
社団法人日本ケーブルテレビ連盟
社団法人日本CATV技術協会
公益社団法人日本照明家協会
日本舞台音響家協会
日本舞台音響事業協同組合
社団法人日本ポストプロダクション協会
VFX-JAPAN
Pre-vis society Asia（仮称準備中）
一般社団法人モバイルブロードバンド協会（50音順）

■海外パートナー



■運 営

- 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会（JESA）
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル12階
電話：（03）6212-5231 FAX：（03）6212-5225



Table of Contents

Topics

Guest Interview 1	04
全米放送事業者協会（NAB）ゴードン・スミス会長	
Guest Interview 2	10
映画監督 ギャレス・エドワーズ氏	
Guest Interview 3	16
NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」クリエイター	

Exhibition Report

News Center Pick up	24
ソニービジネスソリューション（株）	
キャノンマーケティングジャパン（株）	
ラウドネスサミット東京	
Exhibit Map	36
展示会場図	
Exhibitor List	40
出展者一覧	
Online Magazine Headline	42
Inter BEE online 掲載記事（展示会レポート）サマリー	

Forum Report

News Center Pick up	60
木村太郎氏に聞く新しい放送のあり方	
プロジェクションマッピング	
Programs	76
プログラム一覧	

Results

Visitor Profile	82
来場者アンケート実施結果	
Exhibitor Profile	85
出展者アンケート実施結果	
Publication and Promotion	86
来場誘致プロモーション活動報告	



Inter BEEはコフェスタの
オフラインイベントです。

「日本の放送・映像技術研究機関と 連携して次世代の放送を」 世界最大の放送業界団体NABの トップが語る世界標準規格の夢

NAB (全米放送事業者協会) 会長: ゴードン・スミス氏





日米における先進的な放送技術の交流を図ろう



8,700社を超える地上波テレビ・ラジオ放送局を会員として抱える放送業界の団体NAB。そのNABのトップであるゴードン・スミス会長が来日し、Inter BEE 2011の基調講演に登壇した。1922年に創設され、今年で90周年というNABの歴史の中で、会長が日本の公式の場で講演するのは今回が初となる。訪問が実現したのはスミス会長自身の「米国の放送業界を代表し、東日本大震災で被災された日本の皆様にお見舞いを申し上げますと共に、勇敢に報道活動に従事されたすべての放送人に敬意を表したい」という思いだった。そしてもう一つ、「次世代」の放送へ向け、日米における先進的な放送技術の交流を図ろうというねらいもある。日本の技術力を高く評価するとともに、次世代の放送の標準化のイニシアティブをとろうとする米国放送業界の強い意志が垣間見えた。



2009年11月に会長職に就任し、ちょうど会長在籍2年目(来日時)を迎えたゴードン・スミス氏。96年から2008年の2期12年間務めた上院議員時代には、商務委員会に所属し、産業界に関連した法律の立案や、上院ハイテクタスクフォースの委員長を務めるなど、最先端の情報通信技術に精通した議員として知られる。

今回、来日することにした理由についてスミス氏は、「米国の放送業界を代表し、東日本大震災で被災された日本の同業者にお見舞いを申し上げますと共に、これほどの災害に遭遇しても勇敢に報道活動に従事されたすべての放送人に敬意を表したかった」という。Inter BEEが今回、初めて行った基調講演において登壇した際も、開口一番、東日本大震災の被災者への哀悼の意を表するとともに、「激甚な被害の中で、生存情報や生活情報を提供した日本の放送局・報道陣の勇気を讃えたい」と惜しめない賞賛の意を表明した。基調講演でスミス氏は、「こうした災害・緊急時における放送の役割を考えると、高度で安定した技術力が重要。放送が未来にかけて、よりいっそう役立つものにしていくためには、新しい技術を積極的に取り込んでいくことが必要だ」と述べ、日本の放送の技術力を評価するとともに、今後さらなる技術革新の必要性を強調している。



「日本の放送技術は世界最高。放送業界にとって重要な存在」

スミス氏は言う。「NABは米国のみならず世界の放送業界の利益のために活動している団体だ。私は個人的にも日本の文化や歴史を深く尊敬しているが、NAB会長として、日本が維持している世界最高の放送技術に大きな期待をしている」

「現在、世界において長期的な視野で放送技術を研究・開発している組織は日

本にしか存在しない。HDやデジタル放送の先鞭をつけたのも日本であったが、未来の放送を形作る役割を担うのは、日本の研究開発技術に負うところが大きい」

スミス氏の言葉から、日本の放送技術が高く評価されていることとともに、NABがすでに次世代の放送を視野に入れていることがわかる。

今回の来日の直前、NABの技術担当トップを務めるリン・クラウディ上席副会長が中国・上海を訪問した。11月10、11日に上海で開催されたFOBTV (Future of Broadcast Television Summit 2011) に参加するためだ。FOBTVでは、NABのほか、米国のデジタル放送技術標準化団体のATSC、IEEE、日本からはNHK放送技術研究所も参加している。さらには、英国BBC、欧州の放送団体EBU、そしてブラジルの放送団体SETも参加し、次世代の放送の標準化についての討議が行われた。世界の放送業界では、次の放送が話題に上っている。

「日本の優れた技術を次世代放送の世界標準へ」

「今、中国は世界中からの放送技術を集めようとしている。会議終了の共同宣言では将来的な放送システムの要件定義でイニシアティブを取って行くことが宣言された。NABとしては、米国のみならず、広く世界の放送事業者や視聴者、メーカーそれぞれの利益を考え、特に日本の優秀な技術とともに将来の放送ビジネスを進めて行きたいと考えている」(スミス氏)

その協力関係の一つの方向性としてスミス氏は、NABが推進するFASTRODを用いた連携を上げる。「FASTRODは、NABが実際の研究期間を作るのではなく、ある種の投資の仕組みだ。米国には今、放送技術を専門に研究する機関がない。NABでは、放送に関わる基礎研究を外へ委託している。この研究資金を提供するしくみをFASTRODと呼んでいる。日本のNHK放送技術研究所や情報通信研究機構との連携もFASTRODの対象と



なると考えている。NABはこれまで、デジタル放送における標準化について大きな役割を果たしてきた。次世代のテレビの標準化においても、主導的な役割を果たしたいと考えており、そのときには日本が生み出した数多くの新技術を含めた基準作りを目指していく」

「震災報道には新しい放送のヒントが」

世界の放送団体の頂点に立ち、世界の放送業界を見渡す立場にもあるスミス氏。次世代の放送規格といった技術面とともに「放送業界の重要な課題」として見ているのが、「放送のビジネスモデルだ。」

「世界で放送のデジタル化が進み、同時にブロードバンドインターネットがモバイルにも普及し、どこでも好きなところで映像配信・放送を視聴できるようになった。いよいよ本格的な放送のビジネスモデルの再構築が必要となってきた」



米国でも消費者の好みはモバイルに向いてきており、2012年の初めには米国全世帯の2/3がテレビのモバイルエリアとしてカバーされるという。スマートフォンや携帯端末がテレビスクリーンとしての役割を果たすと同時に、視聴者からの能動的なアプローチが可能になる。「スタイルの異なる視聴者に対して、どのようにサービスを提供をするかが、重要な課題になってきた」という。

最後にスミス氏は、こう付け加えた。「東日本大震災における日本の放送局の

活躍から、緊急時の放送の重要性を再認識した。放送は、ライフラインが途絶しても、多くの人にすばやく情報を提供できる点で極めて価値の高いメディアだ。ネットとの連携も含め、新しい放送のヒントがあるかもしれない」

「しかし、技術の重要性と同時に、放送に携わる人が持つ責任感の大きさが重要であり、それがあ限り、技術の進化・ビジネスの構造変化があろうとも、今後とも放送の重要性は変わらないだろう。今回の日本の震災報道からそれを感じた」

デジタル技術を駆使して 映像制作の革新を追究

ギャレス・エドワーズ氏





最適な映像作品の制作体制はその作品ごとに異なるはず。

映画「モンスターズ/地球外生命体」(2010年)のギャレス・エドワーズ監督が来日した。低予算ながらVFXを駆使したSF映画として世界で話題となり、これがきっかけとなりエドワーズ氏はハリウッド版映画「ゴジラ」の次回作の監督に抜擢されて一躍注目の的となった。デジタルツールを駆使した数々の映像作品を手掛けてきた経験から、デジタルテクノロジーのメリットを「低予算で映画が作れるようになったこと」という。しかし、彼が最も重視しているのは、これまで通りの映画を単に低予算で作ることではない。低予算でつくことで、自由な制作環境を構築し、いかにクリエイティブで面白い映画を作れるか。そのための手段として、デジタル技術进行评估している。「最適な映像作品の制作体制はその作品ごとに異なるはず。本来なら規模の大きさやコストは関係ないんだ」と語るエドワーズ氏。決して一つの方法論に縛られず、常に貪欲に新たな表現手法、制作体制をめざしている点はまさにデジタル的な発想といえるかもしれない。

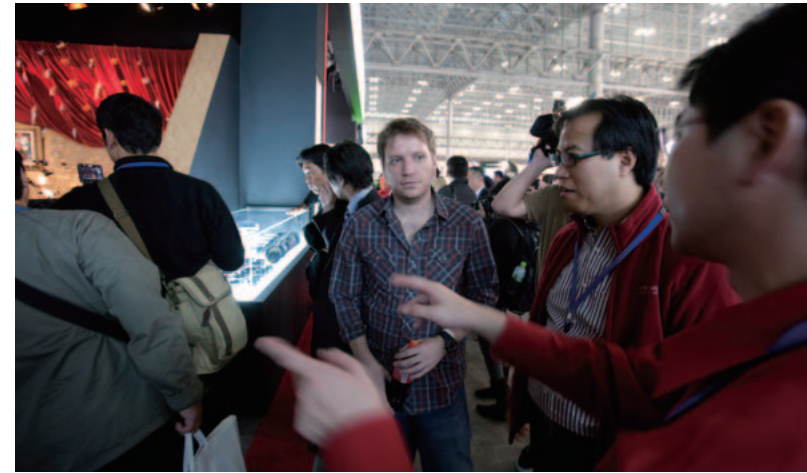


映画「スター・ウォーズ」シリーズで映画監督にあこがれ

2011年11月16日に開催した『Inter BEE Content Forum Special Session ~広がる映像制作の可能性、そして未来~』において、エドワーズ氏は、デジタル技術を導入するメリットとして「低予算で高度なVFX映画を作れるようになったこと」を挙げた。「低予算で制作することは、回収のリスクを減らす。それによって、映画制作の現場で試行錯誤ができ、より面白いスタイルを打ち出せる」と指摘する。そのコメントには、これまでのエドワーズ氏の映像制作の経験に裏打ちされた自信と同時に、新たな映像表現を作り出すための技術への貪欲さがうかがわれる。

75年生まれのエドワーズ氏。子供の頃、映画館で「スター・ウォーズ」シリーズを観たことが映画監督を目指すことになったきっかけだったという。それ以来、映画監督にあこがれ、96年には大学の卒業作品としてCGと実写の合成による映画を2人で制作した。当時は、まだ性能の低かったパソコンを駆使した映画制作はまだ珍しかった。エドワーズ氏によれば、「そのときに、コンピューターが将来の映画制作にかかせないものであると感じた」という。

卒業後は、実家で仕事をしながら、プライベートな時間にCG制作を独学で学ぶ。モンスターのCGと実写のVFX作品をつくったことがきっかけで、BBCからテレビ番組でのVFXの依頼があり、ドラマやドキュメンタリーのVFX制作を手掛けるようになる。「当初、放送業界ではCGが高額なコストがかかると思われており、私のように自宅でCG映像を手掛けることができないということがあまり知られていなかったんだ」



VFX番組監督作品で 自らVFXを担当

「BBCで仕事をしたことで、テレビ番組の制作がいかに大がかりなものであるかがわかった。一つの番組に100人以上の人が携わり、多額の制作費がかかる。そういう大規模な組織で、何か新しい試みをしようとする、大変な労力とコストがかかる。実際、VFXでいろいろな工夫を提案したことがあるが『お金がかかりす

ぎるし、時間的に無理』と言われた。そこで、『僕に監督をやらせてくれるなら、ただでCGを作ってもいいよ』と交渉したところ、その要求を受け入れてくれ、自分の監督によるVFX番組を手掛けることができた。局内で作るためには大変なお金と人が必要なものが、僕なら一人でできてしまった(笑)」

こうして自らも監督をしながらVFXを手掛けた「Attila the Hun」(2008年)など、優れたVFXテレビシリーズを制作して

話題を集める。2008年には、英国のVFX映画祭「Sci-Fi-London」で行われたコンテスト「48 hour film challenge」において、2日間で作った映画が受賞した。その際、その受賞作品が劇場映画としての初監督作品「Monsters」のベースになっている。

俳優も入れてたった6人で 映画制作に挑戦

「Monsters」の制作スタッフは、俳優も



入れてたったの6人。役者が2人、カメラマン担当が2人、プロデューサーが2人。そのほかの脇役は、すべて現地でエキストラを調達したという。中南米を機材やスタッフを乗せたバンに乗り、ロードムービーさながらに移動をしながらの撮影だった。俳優の撮影中の背景もそのまま、日常の通行人や町の風景などを取り入れた。こうした大胆な撮影手法も、「異常な事態が起きていても、それは当事者以外は日常生活の中にある。それがよりリアリティを作り出してくれた」とねらいがあつたことのようにだ。しかし、なによりもCG合成を必要とする撮影がすんなりと実施できたのは、VFXの経験を持った監督ならではのだろう。通常はポストプロにとつともない苦労を強いるか、あるいは現場でのVFX担当者やカメラクルーとの緻密な打ち合わせが必要になる。

「僕も含めて、撮影スタッフがCG合成のことを知っていたことから、撮影時点で合成を想定した画角を構成することができた。そのため、制作効率も良く、無駄な撮影もせずに進めることができた。通常、撮影後に渡されたデータを見て、VFXクリエイターは頭を抱えるのだが、我々はまるで描く前に矢を放ち、そのあとの的を描くような手順で進めることができた」

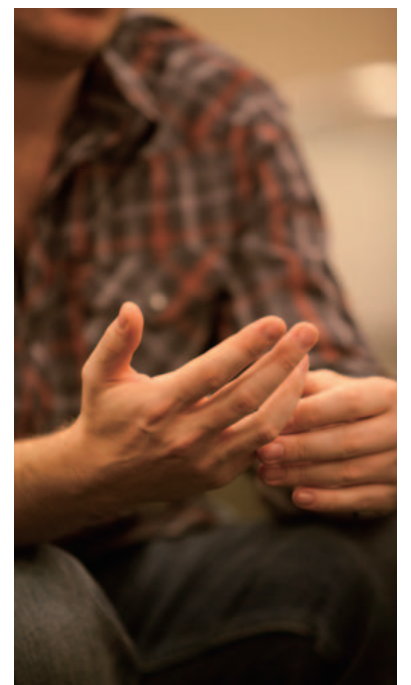
最適な制作スタイルは 映画ごとにあるはず

こうした経験を経て、いよいよハリウッド映画を手掛けることになる。SF映画が好きで監督を目指しただけに、エドワー

ズ氏も「ゴジラ」のことを敬愛しているという。しかし、映画の作り手としては次のように話す。「日本が生んだ『ゴジラ』だけに、日本にも多くのファンがあり、厳しい目があるということも感じている。だが、日本が作り出した世界的なキャラクターであることには敬意を表しながらも、これまでのイメージにしばられずに、僕なりの「ゴジラ映画」をつくっていききたい」

これまで、低予算でクリエイティブな映画を作ることで注目されてきたエドワーズ氏。ハリウッド映画であるからには、これまでと規模も予算も違うことになるのか、それとも低予算のハリウッド映画をつくることになるのかを聞くと、次のように答えてくれた。

「僕自身、映画監督として、低予算の映画を作ることが目的なわけではない。これまでデジタル技術を取り入れることで、低予算な態勢をつくることができ、それがより自由度の高い環境でクリエイティブな映画を作るという目的にかなっていた。今回も、デジタル技術を駆使して自分が目指すスタイリッシュな映画づくりに集中して制作に取り組むつもりだ。映画の制作体制は、それぞれの作品ごとに最適なスタイルが求められて良いのではないと思う。常に新しい技術や表現を取り入れて、それをスムーズに映像制作に反映できる環境を作り出すことが重要だ。やるからには、中身のおもしろさで勝負したいと思う。完成したら日本のゴジラファンにもぜひ見て喜んでもらえるものを作りたい」





これからは、
世界市場をにらんだ人材 育成、
コンテンツ制作が重要。

日本放送協会
放送総局
スペシャルドラマ「坂の上の雲」
第3部 チーフ演出 専任ディレクター
加藤拓氏

スペシャルドラマ「坂の上の雲」
タイトルバックデザイナー
ドローイングアンドマニュアル
ファウンダー／映像作家／
アートディレクター／写真家
菱川勢一氏

スペシャルドラマ「坂の上の雲」
VFX プロデューサー・ラインプロデューサー
結城崇史氏



海外を市場として、仕事のパートナーとして捉えるしなやかさ



日本のテレビ番組において、かつてないほど壮大なスケールで制作されたNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』。この『坂の上の雲』の制作に携わった3人のクリエイターが登場した「Asia Contents Forum 特別セッション」では、これからのコンテンツ制作に対するさまざまな提言が行われた。登壇した加藤、菱川、結城の3氏は、それぞれ異なる経験・実績を経てこのドラマに参加している。ともに溢れんばかりの個性と、仕事に対する確固たる信念を持つ3人の言葉は、プロならではの現実的な重みを感じさせるものがあった。と同時に、3人の間には、まるで命がけて戦ってきた「戦友」のような信頼関係が、「坂の上の雲」というドラマづくりを経て築かれていることを感じさせた。個性や考えのぶつかり合いと、互いを信頼しながら同じゴールを目指すチームワーク。一見して異なるベクトルのように思える力があってこそ、新しい世界が切り開かれるということ、3人の姿が体現しているかのように見えた。

経済的に困難な時期にある日本において、今後コンテンツ制作はどうあるべきか。国際的なフィールドで映像制作に携わってきた経験を持つ3人から出た言葉には、海外を市場として、また仕事のパートナーとして捉えるしなやかさがあった。



高い技術力を持ったプロ同士の信頼関係

結城氏は『坂の上の雲』において、VFXプロデューサー、ラインプロデューサーとして、VFX制作のコーディネーションや撮影ロケのコーディネーションなど映像制作の仕事の流れを作り出す役割を担ってきた。また、菱川氏は、番組を象徴する映像ともいえる印象的なタイトルバックの制作を通じて、加藤氏が手掛ける映像制作のイメージづくりをサポートしてきた。ともに、加藤氏の映像制作を支える重要な存在だ。

結城氏は、制作時の自らの仕事を振り返り、「『坂の上の雲』では、勝負をかけていた」と言う。「ロケ地の選定など、ドラマの内容に関わる重要な部分の選定についても、積極的に提案してきた。ラトビアやマルタのタンクスタジオなどを、ロシアのシーン・旅順閉塞作戦のシーンそして日本海海戦のロケ地として撮影を提案したこともある」

「実際の撮影準備の予算・スケジュール作成から最終的なポストプロダクションの完成まで横断的に関わることができ、実際の撮影とVFXを差配していくプロデュースをできたことはとてもいい経験となった。」それだけに、さまざまなプレッシャーもあったはず。結城氏は、「こういうことができたのも、加藤氏ほか制作のみなさんが私を信じて守ってくれたおかげ」と話す。

加藤氏は、「結城さんは、周りの人が最初は不安を感じるような新規性のある提案でも、それを失敗させないだけのネゴシエーション力や、いっしょに行動してぜったいに失敗させないという技術を持っていた。感性だけの勝負とは違う、技術の裏付けがあるから信用を勝ち取ることができた」と高く評価する。

結城氏とともに、外部の立場としてドラマのイメージ構築に大きく関わったのが、菱川氏だ。菱川氏は、数多くのCM制作、タイトル制作で今、最も注目されるクリエイターの一人。NHKのドラマ「功名が辻」では、絢爛豪華な日本の伝統芸術をふんだんに用いた映像をワンカットで展開した圧巻のオープニングを作り上げ

ている。菱川氏は「日本人の精神性や、伝統的なデザイン、文化は、今でも世界に対しての武器になる」と話す。菱川氏のそうした日本文化に対する視点が今回の「坂上の雲」でも生かされている。

加藤氏はまた、菱川氏にタイトルバックを依頼しながら、「共通する会話軸でコミュニケーションができる人」という役割も持たせたという。加藤氏は次のように話す。

「5年という制作期間の間に、映像の表現方法にもやはりすたりが生まれる。当時からそのはやりすたりに流されない映像づくりを考えてきた。そのためには映像制作の基本的な考え方を明確に持ちながら、常に現場でコミュニケーションを通じて考え方を更新させていくことが必要だ。「功名が辻」で関係を築いた菱川さんにタイトルバックのデザインをお願いして、菱川さんとのコミュニケーションの中から本編の映像についても対話軸を発展させる態勢をとっていた」

海外との連携から 日本ならではの価値観を見いだす

壮大なスケールのドラマづくりで絆を深めた3人に、これからの日本の映像制作、クリエイターについて聞いた。

■日本における映像制作の現場、クリエイターの現状についてどのように考えているか。

菱川：「国際的な舞台で活動しようとしたとき、マーケティングにあわせればあわせるほど、世界では戦えない、と思った方が良さだろう。むしろ、日本ならではの土壌、風土に根ざした、日本人ならではのデザインを生み出すことで、世界は注目する。日本人の精神性や、伝統的なデザイン、文化は、今でも世界に対しての武器になる。日本には北海道から沖縄まで、多彩な文化や芸能がたくさんある。世界で問われるのは、クリエイターがオリジナリティの軸足をどこに置いて活動しているかだ。そうした軸足があれば、自分がイニシアチブをとりながら、国際的な共同制作という可能性もあるだろう」

菱川：「その日本ならではのユニークさを軸足として定め、積極的に外へ出て



菱川勢一氏

行くことが、日本人クリエイターとしてのグローバルズムだろう。例えば「禅」的なものを現代にどう生かすか、といったテーマにおいても、海外の人が捉えた場合と日本人が取り組んだ場合では、あきらかに日本のオリジナルというイメージを生かすことができる」

加藤：「ドラマ『坂上の雲』では、実に多くの海外ロケが行われ、各ロケ現場で、それぞれの現地スタッフがこだわりを持ってやってくれた。海外のインディペンデントのクリエイター、プロダクションを見ていると、どの国も技術力が高く、また、映像制作に自分たちなりのこだわりがあるということ強く感じた。海外ロケは通常、撮影日程の制約が厳しいことから、必要な素材映像をどれだけ効率的に収録するかを念頭に作業をしてしまいがちだ。それが昂じると、現地で新たな工夫をすることなどは考えない。

当然、現地スタッフにあまり説明することもなく、言われたことを黙ってやってもらったほうが都合がいいように考えがちだ。しかしそれは、互いのコミュニケーションの壁を飛び越えないための言い訳のようなもの。ロケ地に入ったら、その地域をおもしろがれない限りは面白いカットにはならない。韓国のVFXプロダクションとの仕事では、言葉として伝えきれなかったこともあったが、彼らとの会話の中からイメージを膨らましていくという作業ができた。ラトビアでもマルタでも、一枚の映像を魅力的にしようとすることは言葉を超えた絶対の価値観だった。各プロダクションの責任者はその価値観を守るためにスタッフを鼓舞してくれた。また、優れたプロダクションがインディペンデントで活躍するところに、映像業界としての可能性があると強く感じた。そうしたこだわりのあるインディペンデントが日本



加藤拓氏

でも、もっとたくさん必要だ」

結城：「例えば、米国の番組制作プロダクションは、日本と比べると放送局や配給会社とより対等な関係にしていると感じる。放送番組市場についても、ネットワーク局だけでなく、シンジケーションやローカルなど複数の市場があり、チャンスは少なくない。しかし、同時に厳しさもあり、成績を出せなかったり失敗をしたりしたら、その場でクビとなる。欧米型の方が日本型スタイルよりもいいとは思わないが、放送業界では放送局と外部スタッフの間により隔りがあり、受注側が発注側の言いなりになってしまっ、こだわりをもたないメンタリティになってしまいがちなシチュエーションにより多く出くわすような気がする。採否の判断は発注側がするにしても、現場で自分たちなりの工夫についての提案をしていかなければ、国内でも海外でもチャンスを広げることはいできない」

コンテンツ制作の 文化的価値と環境作り

■では、そうした海外と日本との違いを修正したり、あるいは生かすという方向性、展望のようなものはあるか。

菱川：「欧州の映像文化に対する認識は高い。監督という職業は、一般的にとっても尊敬される。自分たちがもっと「すごいことをやっている」ということに、まず気づくべきだろう。日本では、社会全体が映像作品、特にエンターテインメントの映像作品を軽んじている雰囲気がある。まずは、『好きだから』ということから初めてもいいと思う。アニメと同様、それがいづれ国際的な市場でも武器になる。結果的にはグローバルに強いものが生まれる。しかし、個人での展開には限界もあり、そうした優れたクリエイターを支え、プロモーションしていくくみが

必要だ。私はまず、これから映像制作のクリエイターを目指す学生がいる教育の現場で、デザインや映像制作の現場のことを教え、また、心構えを伝えている」

加藤：「NHKでは今、多くのフリーランスのアーティストを抱え、彼らに制作する場所を提供している。もともと高い技術力を持ったNHKの映像制作技術の環境の中で、フリーランスのクリエイターが個性を発揮することで、レベルの高い映像制作につながっている。そうした活力が、次の番組企画へとどんどん生かせるのではないかと感じている」

菱川：「今、現場で活躍している30-50代の層が鍵になると思う。映像作品を文化として位置づけて後世に伝え、発展させていけるかどうかは、この世代が次の世代に交代したときに試される。今の「請け仕事慣れ」している若者たちに警鐘を鳴らさなければならない。自分の頭で

考え、自分でつくったものに利用価値を持たせ、それをクライアントがほしい、だからビジネスが成立する、という構造にしていけないといけない。結城さんのようなデザインマネージャーや、デザインコーディネーターがほんとうに今、必要だと思う。そういう存在によって、クリエイターの意識が変わる」

加藤:「クリエイターの意識改革とともに、周辺の多くの人道筋、環境を整える必要がある。NHK内でフリーのクリエイターが仕事ができる環境を提供しているのと同じような状況を、たとえば日本という国の中につくれないのか。我々としても考えていきたいが、日本の文化であり、重要なコンテンツ産業の育成を担う、国や行政の人たちにも考えてもらいたいと思う」

世界市場をにらんだ人材育成、 コンテンツ制作

3人はすでに第一線でもの作りを手掛けながら、すでに次世代をにらんだ次のアクションを進めている。3人の熱い語り口には、新しい世界を切り開くパワーを感じさせるものがあった。

■具体的にみなさんが進めているアクションについて。

結城:「日本ならではのコンテンツをつくり、やはり海外に発信できるものを手掛けたい。クリエイターというよりプロデュースの立場からすると、アジアにハリウッドと対抗する市場、勢力をつくるために、日本から海外へ展開するための道筋、突破口を開いていきたい。私が得意とする海外の人脈を活用することで、アジアのクリエイターとの連携を深め、共同制作を数多く手掛け、アジア市場の活性化に貢献していきたいと思う」

結城:「また、以前、東京工科大学で教鞭をとったこともあり、現在は東京電機大学の研究員をしている。自分自身今回チャンスをいただき素晴らしい経験をさせていただいた。是非若い人にこの経験を共有する機会をより持てればと思っている。インターネットによる放送局を東京工科大学の学生にやらせたことで、調整・交渉の大変さを学ばせた。CEATEC

JAPANといった一般の社会の現場に引き出しリアルに実際の社会人とのコミュニケーションを与える経験を積ませることで、それがその後学生の就職に役だっている。デザインとは異なるが、情報発信のベースを担う人材も重要だ」

菱川:「具体的なアクションとして、武蔵野美術大学で教鞭をとっている。教育だと思っている。業界に入る前に、ある種の「思想」を伝えなければ。現場にいて感じている危機感をいち早く、伝えたいと思っている。彼らが気がつくときが30代。現場に入る前に伝えて、ある種の美学や美意識をできるだけ、大切にするような意識を持ってもらって、クリエイティブの現場に入ってもらいたい。意味もなく迎合するな、とか、そうじゃないと、存在価値がないということを伝えておくべきだと思う」

菱川:「大学で、現場で起きていることをできるだけリアルタイムで伝えることが重要。ある意味で、二足のわらじを履いてやる教育者が必要だ。結城さんがブルドーザーで開いてくれた道ができたときに、ちゃんとその道を進んでいける粒ぞろいの人をそろえておきたい」

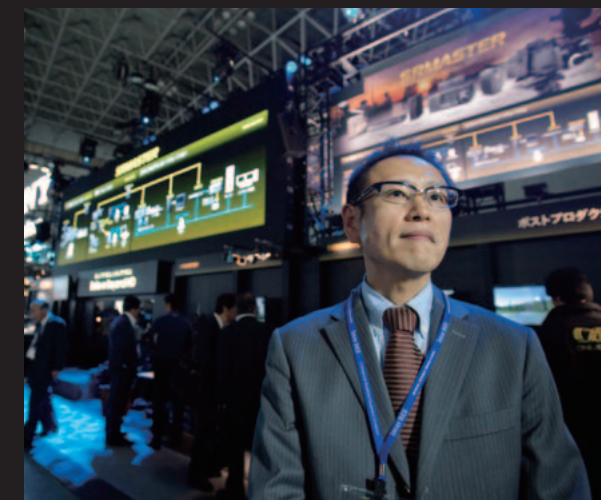
加藤:「私は、2012年から大河ドラマ「八重の桜」の演出を担当する。福島を舞台にしている。どれだけ多くの人に参加してもらえるか、ということがこのドラマの意義と考えている。大河ドラマという確立したフォーマットを社会的な資産として用いて、多くの人力を借りていく。それにより東北の歴史をもう一回見直そうという試みだ。ドラマの枠組みを超えてなにができるのかを考えている。同時に、枠組みを超えるためにはブレない軸足が必要だ。私を含め多くのドラマディレクターはOJTで仕事を覚えてきた。演出技術という、「ゆるがせないドラマの作り方」を多くの人に身につけてほしい。「坂の上の雲」で得たノウハウも共有すべき財産であり、共有することでコンテンツ産業の次の一歩があると思っている」





ソニーは、テーマを「Believe Beyond HD」とし、8K CMOS イメージセンサーを搭載したカメラ「F65」とSRMemoryなどを組み合わせた高画質ファイルベース映像制作環境、XDCAMのファイルベーストータルワークフロー、有機ELマスターモニター、光ディスクをベースにしたアーカイブシステム、3Dショルダーカムコーダー PMW-TD300、マルチフォーマットポータブルカメラHDC-2500などを出展した。

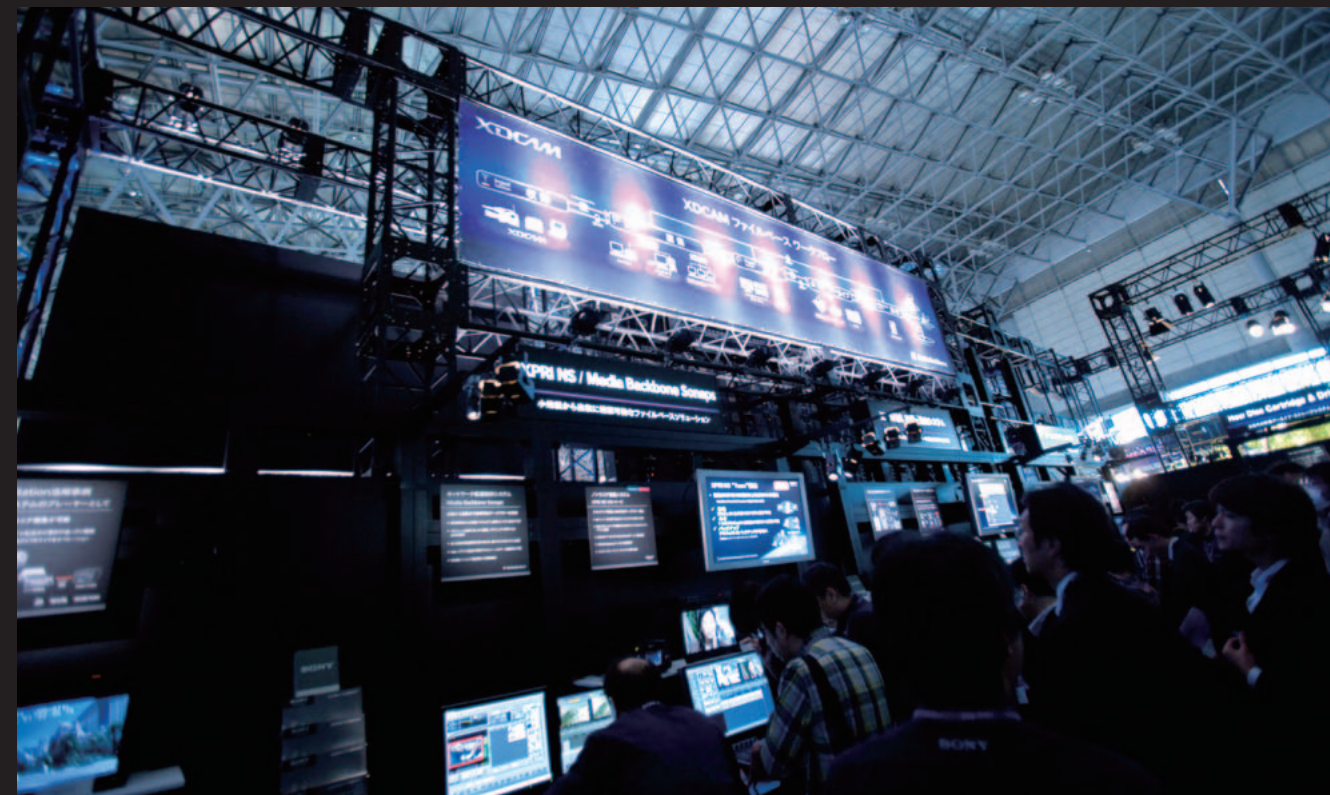
F65と組み合わせて、4Kファイルベースによるオペレーションをも実現するのが、「SRMemory」。その「SRMemory」を採用した、ストレージユニット「SR-R1000」、ポータブルレコーダー「SR-R1」「SR-R4」などのSRMASTERシリーズ。編集、カラーコレクションといった部分では、パートナー企業と連携することも紹介した。ソニーではF65による4K映像が研究や医療分野にも有望と見て、今後市場開拓を進める方針という。ソニービジネスソリューションマーケティング部CCシステムMK課の佐竹章人統括課長に展示の注目製品と、Inter BEEに対する評価や今後、期待することについて聞いた。



ソニービジネスソリューション株式会社
営業・マーケティング部門
マーケティング部 CCシステムMK課
統括課長
佐竹 章人氏



今回は国際的にも 盛況、
商談のタッチは確 実に増加。



オープン環境での利用を想定した 注目の記録装置「SRMASTER」シリーズ

■2011年のソニーの展示で注目すべき製品を教えてください。

「SRMemory(エスアールメモリー)を使ったポータブルレコーダなどを中心とするSRMASTERの商品群だ。これまで主に報道向けであったファイルベースのラインアップを、高画質で大容量の画像データでも扱えるようにするために新たに開発した。例えば最上位のメモリーとポータブルレコーダー SR-R4との組み合わせでは、2012年1月発売のCineAltaカメラF65の120P信号をも記録できる性能を持つ。また、ストレージユニットSR-R1000ではテレビ用カメラの出力信号を同時に3台まで記

録することができる」

「また、ポータブルレコーダSR-R1であれば、様々なカメラ、カムコーダと組み合わせることが出来、本体から3G-SDI信号まで出力できるので現場で直接プレビューが可能となる。更にこのポータブルレコーダは高速データ転送にも対応し、現場でコピー等が可能になる。これらのモデル以外にも、コンピュータ用インターフェースやネットワークインターフェースを持つ製品がラインアップされており、オープンな環境での利用を想定している。そのために、このSRMASTERは、アライアンスパートナーを募ってSDKを提供し一緒になって製品開発を行っている」「現在、世界中でF65の発売に合わせて各種アプリケーションの開発が行われている。様々なアプリケーションが開発されることで4K制作までの環境が整い、最終的にその商品を使った高画質映像でお客様に感動を与えられることを大きな喜びとし、製品の開発、販売を行っている」

「今年は、ファイルベースという考えが定着し、今まではどちらかというと、ファイルベース自体をご説明する事が多かったが、今では、具体的な導入に関する問い合わせが増えている。更に、InterBEE併設で4Kセミナー&シアターを設けたが1000人超の参加があり4K&ファイルベース技術の意識の高まりを実感している」

Inter BEEは、一年のまとめの展示会

■御社ブース訪問されるプロフェッショナルの方の業種は？

放送局関係者が40%、ポストプロ関係者が30%。そしてCATVなどの関係者が30%だ。全体の10%がアジア、特に中国と韓国からの訪問者が多い」

■Inter BEEでブースを設置する効果をどう考えるか？

「Inter BEEは一年を通したトリの展示会という認識だ。一年を通して放送や映像関係の展示会を考えるとNABとBIRTV、IBCそしてInter BEEがある」「NABで新商品がデビューし、それ以降様々な調整プロセスを経て最終系としてInterBEEに臨むことになる」

「また一般的には、お客様の予算確保のプロセスともリンクしており、そういう意味でもInter BEEの位置は、その年のまとめの展示会と位置づけている」



国際展示会として海外からの来訪者の増大に期待

■今後のInter BEEに期待するものはなにか？

「経済的に厳しい時代であるが、実はもっともっと見て欲しい商品やサービスがある。可能かどうかは別として、期間を工夫するなどしてコストアップを避けながら面積を拡げるなどし、お客様に紹介し触れ合う機会を増して行けたらと思っている」

「また、海外からの来訪者がもっと増えたら嬉しいと思っている。当社の場合は現地法人からのコンタクトで来訪されるお客様もいるが、海外向けにInterBEEの認知やアナウンスが増えるとさらに良いのではと思っている。商談のタッチは確実に増加しており、社内的には、今回は国際的にも盛況で、200名を超えるカスタマーがInterBEEを訪れて頂いた。」

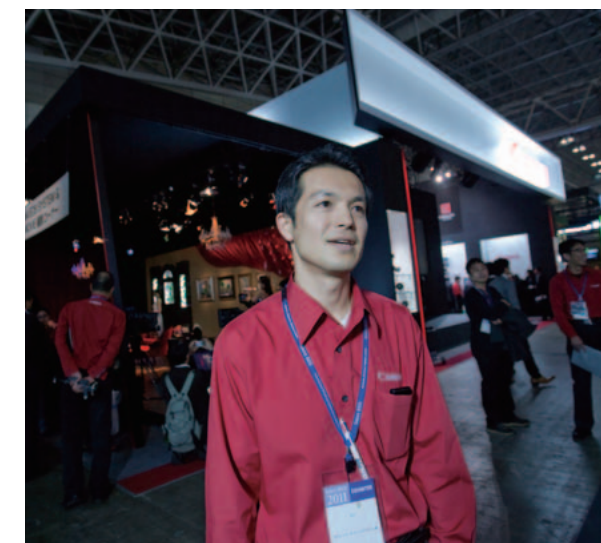




新しい映像作りへの希望も大きい
国内でも新市場を拡大。

キヤノンマーケティングジャパンは、(2011年)11月3日に発表した新製品「CINEMA EOS SYSTEM」の実機 C300 / C300 PLと、同年10月末に発表したEOSの最新フラッグシップカメラ「EOS-1D X」、そして新しいEFシネマレンズ、フィールドズームレンズ DIGISUPER95などを一堂に展示した。

EOS C300 / C300 PLは、EOS 5D Mark II等で世界で好評を博してきたDSLR動画撮影機能「EOS MOVIE」を進化させた、新世代のデジタルシネマカメラシステムだ。キヤノンは今回、過去最大のブーススペースを確保し、実機を操作できる撮影コーナーを設けたほか、セミナーエリアでは、専門家による撮影テクニックの紹介や、「CINEMA EOS SYSTEM」を用いてハリウッドで制作した4本の作品を上映した。撮影コーナー、セミナーエリアともに、終日多くの来場者で賑わった。キヤノンマーケティングジャパン 営業技術サポート課の山根周課長に、CINEMA EOS SYSTEMの反響とInter BEEの位置づけについて聞いた。



キヤノンマーケティングジャパン株式会社
映像システム営業本部 映像システム技術部
営業技術サポート課
課長
山根 周氏



発表以来、国内初の展示で大きな反響

■2011年のキヤノンブースで最も重要な展示を教えてください。

「11月4日に発表したCINEMA EOS SYSTEMだ。以来、大きな反響を呼んでいる。これまで製造してきたEFレンズが全て利用できる上、映画用では利用頻度の高いPLマウントのボディも用意した。キヤノンが長年にわたり培ってきたEFレンズ群、B4マウントレンズ群に加え、今回新たに映画用のEFシネマレンズシリーズをラインナップし、単焦点レンズからズームレンズまで多様な撮影バリエーションに対応できる。またノイズを抑えながらISO20000の明るさが撮れるのも大きな特徴だ。レンズ群とセットで展示したのは今回が国内初なので、とても訪問者が多い」

■来場者の反応は？

「好意的な意味で、従来の映画カメラのイメージとは違う、という声を沢山聞いている。これを使えば、新しい映像が生まれる予感がある、という反応も嬉しい。軽くて小さいので機動性についても高

い評価を頂いている。また、映画カメラらしからぬボディのデザインが斬新との意見もあった」

幅広い映像制作のプロから関心を集める

■ブースを訪れる人はどんなお客様が多いか。

「来場者の大半を占めていた放送局関係者に加え、映像制作関係者も増えている。CMプロダクション、出版社、ビデオ制作者、ポストプロ関係者、など多彩な業種にわたっている。InterBEE全体の来訪者の中で、映画関係者の割合は5%程度と聞いたが、少なくとも弊社のブースでの割合はそれ以上の方がこれらという印象だ。また、従来とは比べられないほどアジアや欧米の国外からの来訪者も多い。国外の映像市場は広がっており、期待も高い」

「今回のCINEMA EOS SYSTEMは、これまでのEOSと比べ、最初から映像市場での利用を想定した製品だ。シネマカメラで用いられるLOGガンマによる収録機能も標準で搭載しており、カメラ製品として本格的な映画・映像市場への参入となる。米ハリウッドでは、発表日の11月3日から5日にかけて、パラマウントスタジオで大規模な発表イベントを開催した。大変多くの映画関係者が参加し、キヤノンの映画市場本格参入を強くアピールした。キヤノンは、レンズでは72年と77年に2回、アカデミー科学技術部門賞を受賞している。会場では映画関係者から、あのキヤノンがハリウッドに再び戻って来た、と歓迎された」

「本格的な機能を備えたデジタルシネマカメラだが、これまでの高級デジタルシネマ機と比べ、とてもリーズナブルな価格で導入できる点がCINEMA EOS SYSTEMの大きな特徴だ。この製品がどのように市場に広がりをもたらすのかを考えると、緊張もするがワクワクもする」



国外からも来訪者。新製品紹介に欠かせない展示会

■御社にとってInterBEEはどういう位置づけか。

「最近では世界でも色々なプロ向けの映像系展示会が生まれてきたが、プロフェッショナル映像機器展示では日本最大であり、NABやIBCと同格に見ている。特に新製品の発表ではNABとInterBEEは欠かせないと考えている。InterBEEは露出の度合いが高いと思うのでカスタマー接触効率が良いと思う」

■今後のInterBEEに期待することはあるか。

「通路が広いので集客やお客様対応オペレーションが楽だ。強いて言えば、会場へのアクセスが良いと嬉しい。また国外からの来訪者のさらなる増加を期待したい」



これまでの音量レベルとは異なり、人が感じる音の大きさを数値化した音量評価指標を「ラウドネス」と呼ぶ。2012年10月から、番組・CM制作においては、この「ラウドネス」を基準にすることが日本民間放送連盟(民放連)で決められた。Inter BEE 2011では、「ラウドネスメータゾーン」が設けられ、各社からラウドネスメータが展示されたほか、ラウドネスサミット東京のシンポジウムとワークショップが開催され、放送をはじめとする各業界へのラウドネスの周知徹底が図られた。

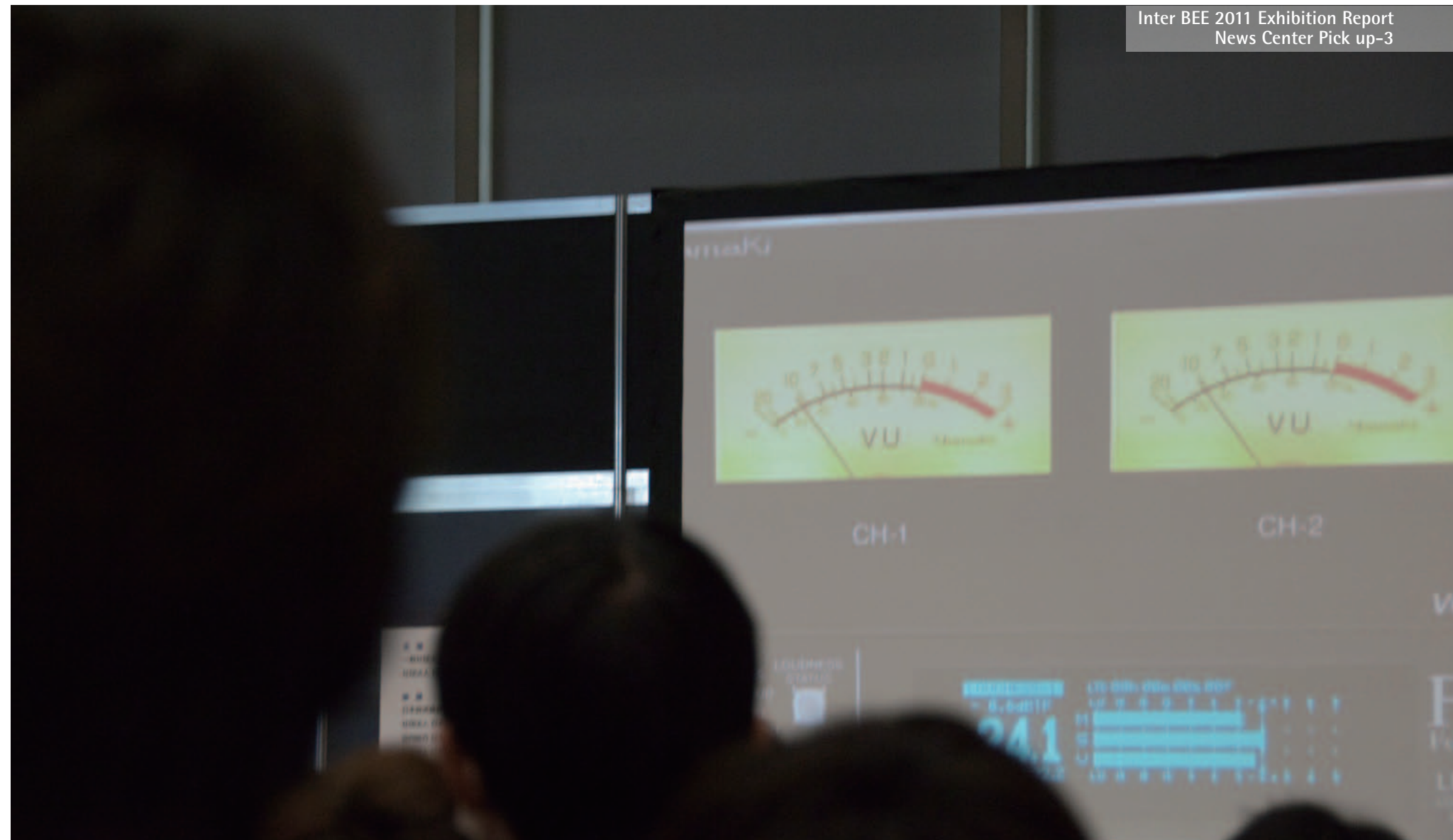
ゾーンには、アストロデザインとフォトロンが映像ホールのブースとは別に展示し、国際標準規格準拠のラウドネスメータを実演。フォービットやヤマキ電気など国内メーカーをはじめ、TCグループ、コンチネンタルファーイースト、東陽テクニカ、メディア・インテグレーション、エス・シー・アライアンスといったラウドネス製品を扱う企業もブースを構えた。映像ホールで展示したコスミックエンジニアリングや東通インターナショナル、リーダー電子、三友、コンドープロードキャストも自社のブースで関連製品を展示した。

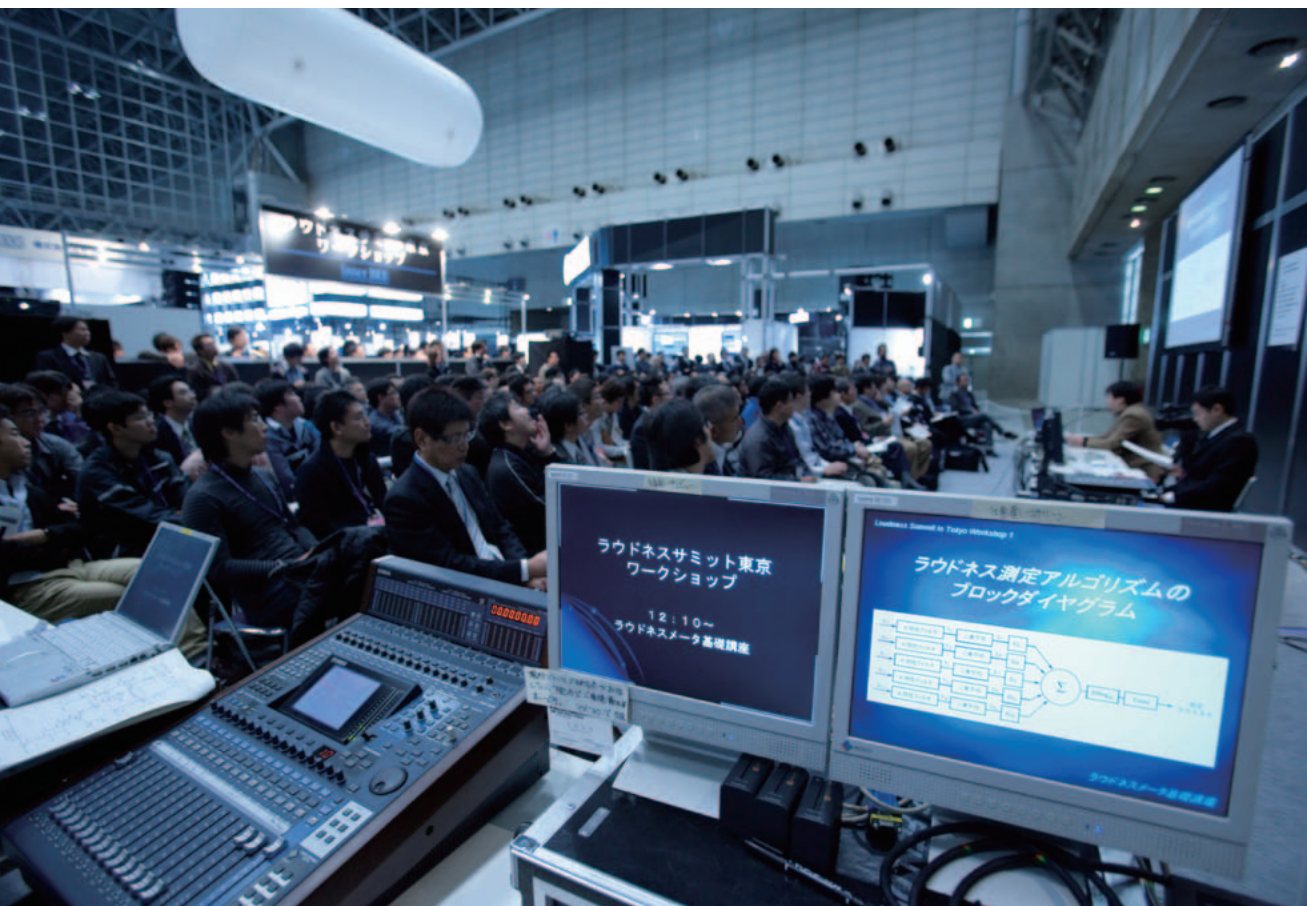
シンポジウム、ワークショップの開催に尽力された毎日放送の放送運営局送出部 入交英雄マネージャに、ラウドネスの浸透状況と、Inter BEEにおける開催の意義などについて聞いた。



国内でこれほど多くの
映像、音響の関係者が
集まれる場は他にない。

株式会社毎日放送
放送運営局送出部
マネージャ
入交 英雄 氏





世界中で問題視されていた音のばらつき

■国際的なレギュレーションの告知をInter BEEで行うことになった経緯について

「映像コンテンツは、一般的に音量が大きい方が目だつ。1998年ころからTV番組でのコマーシャルと番組での音の大きさのばらつきがいろいろな国でも問題になってきた。それでもアナログ放送の場合は信号規格上、音信号のマージンが少なかつたため音量をあげるのにも限界があった。しかしデジタル放送になってこのマージンが10dbくらい拡大され、TV放送での音量のアンバランスがクローズアップされるようになった」

「日本、欧米を含む各国で技術的な裏づけを取った上で、音量のアンバランスを制限するルールを作る動きとなった。最終的に音声、サウンドの音量をラウドネスという単位で表記する規則とその制限ターゲットラウドネス値 -24LKFS/(Loudness Unit Full-Scale) が決められ、ラウドネス運用規定を盛り込んだARIB TR-B32が2011年春に制定された。コンテンツの音量を制限するルールだ。この規定を守られないとペナルティがあるかも知れないとの話が流れたため、放送、映像業界では高い関心が寄せられるようになった」

「2011年の春に大阪で行った勉強会では予想を上回る250人も参加者が集まり、7月の福岡での勉強会でも200人も関係者が参加され、レギュレーションに対する関心の高さがうかがわれた」

視聴者にやさしいテレビ視聴の促進へ

「民放連でのラウドネス規則運用の決定が今年の秋ころと予想されていたため、Inter BEEでのパブリシティは絶好のタイミングであった。このため、ラウドネスサミット東京を準備してInter BEEに臨んだ。Inter BEE開催の直前、民放連は「2012年10月1日よりラウドネス運用規定に基づいた実運用を開始する」ことを決定した。つまり来年の10月1日以降、ラウドネス基準を満たさないコンテンツは局への納品が不能になる。このラウドネス基準を測定するラウドネスメータも各社から発売されるようになった。このルールを守ることで、視聴者にやさしいテレビ視聴が促進される」

「今後はこのルールが欧米での取り組みのように、テレビ放送以外のネット経由での配信やその他のコンテンツに適用されることを望んでいる」



映像、音響の関係者が一堂に集まれる絶好の場

■Inter BEEの役割について

「今回はとてもよいタイミングでの告知の場となった。実際に国内でこれほど多くの映像、音響の関係者が集まれる場がない。放送事業者のみならず機器メーカーや関連サービス事業者までが一堂に会する場になっている。新しいルールや決め事意見交換や技術交換、告知する場としては最適な場と思う。技術のルールから運用のルールに持ち込むためにも、こうした場を通して関心を高める良い機会だった。さらに言えば、今年は運用決定の最後の年だったかもしれない。本当はアナログ放送からデジタル放送に切り替える前の去年が良かったのかもしれないが、今年を逃せば先送りされるような感じもした。InterBEEでのラウドネスサミット東京の開催はまさに絶好のタイミングでの問題意識喚起と告知であった」

「イベントや情報のアーカイブ化を望む」

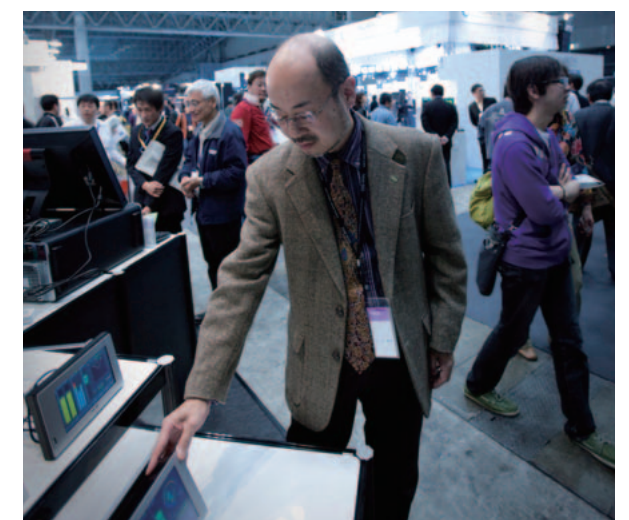
■今後のInter BEEに何を望むか

「放送や映像に絡むような規則・ルールなどの意見交換や運用告知という局面ではInter BEEは国内で最適な場所であると思う。できればこのようなところでは機器の展示と技術やビジネスのカンファレンスも同時開催してくれると嬉しい」

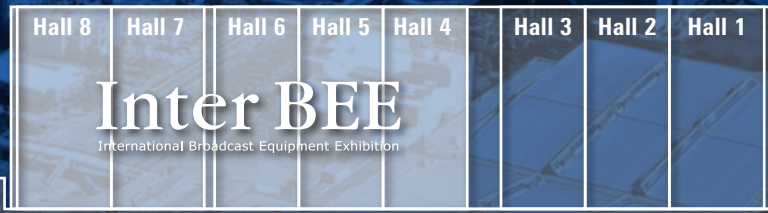
「今回のラウドネスサミット東京でのワークショップはそんなカ

ンファレンスの一つと思っている。少し日時をずらしてもらえれば機器展示会にも両方に参加できる。実際に米国での展示会ではそういう形式で運営しているところが多い」

「また、Inter BEEのサイト、Inter BEE Onlineでは、Inter BEEで実施された各種イベントや情報が参照しやすい形でアーカイブ化していると使いやすい。そこにいろんな技術情報のアーカイブを集めるのなら今在る情報を出せる。そこから関連情報にリンクを張ってメンテナンスしてもらえるととても素晴らしいと思う」

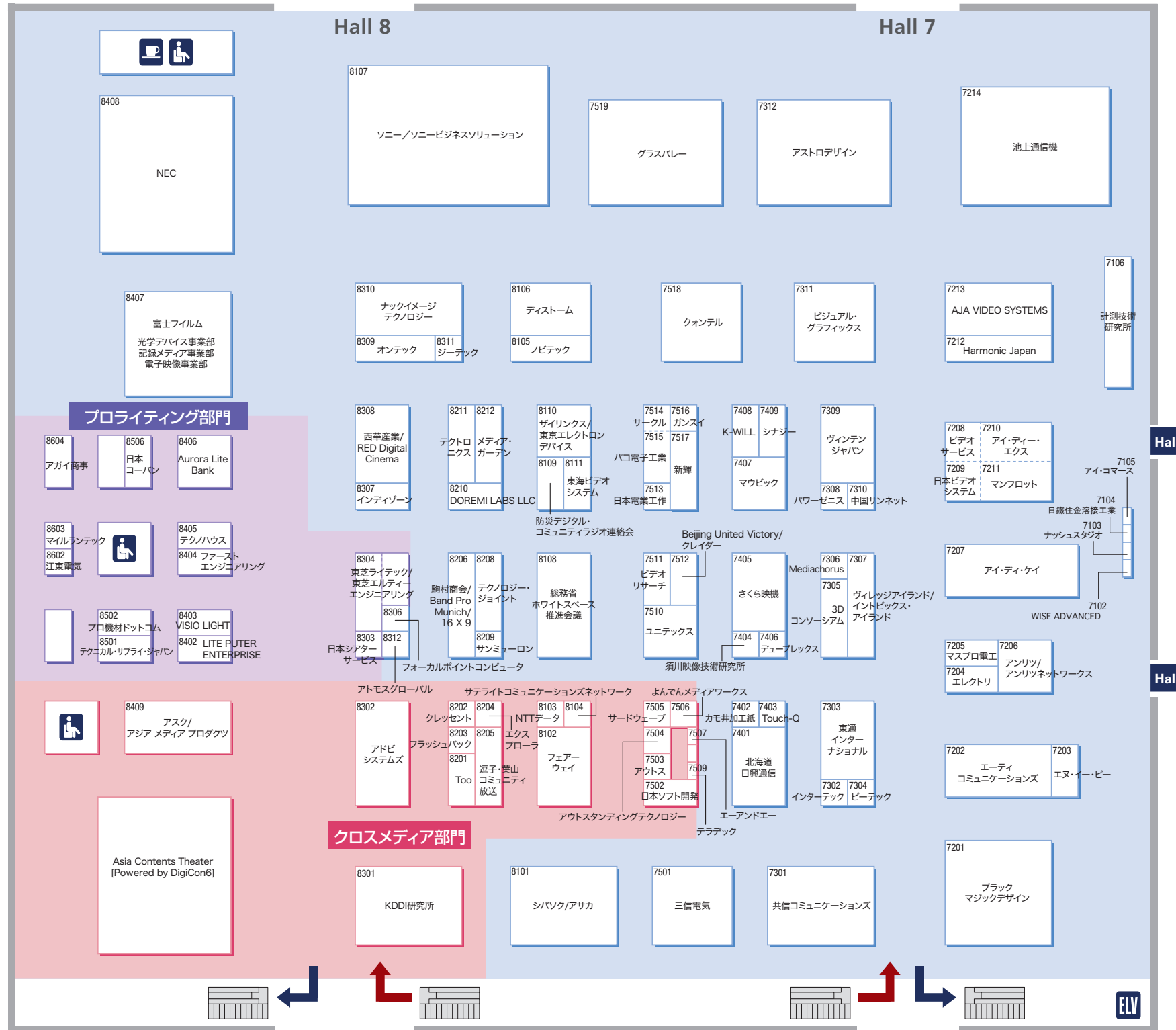


Makuhari Messe



Inter BEE
International Broadcast Equipment Exhibition

映像・放送関連機材部門



映像・放送関連機材部門

プロオーディオ部門

Hall 6

Hall 5

Hall 4



7 Hall

7 Hall



1F



- 4005 (株)アーニス・サウンド・テクノロジーズ
- 4506 (株)アイコニック
- 4608 アツデン(株)
- 4301 (株)イーブイアイ オーディオ ジャパン
- 4209 今井商事(株)
- 4508 ウエタックス(株)
- 4311 (株)エイ・ディー・エル
- 4509 エクセル(株)
- 4409 エタニ電機(株)
- 4407 エヌティーアイジャパン(株)
- 4505 (株)エムアイセブンジャパン
- 4604 エムアイティー(株)
- 4308 (株)エレクトリ
- 4402 (株)オーディオテクニカ
- 4304 (株)オーディオブレインズ
- 4107 (株)オールアクセス
- 4612 オタリテック(株)
- 4403 音響特機(株)
- 4103 (株)カレント
- 4213 グラフィカ(株)
- 4515 グラフィカ(株)
- 4410 (有)グルーヴ ミュージックライブラリー事業部
- 4507 (株)クレセント
- 4602 (株)コスモサウンド
- 4501 コモドマッティナーナ(株)
- 4307 三研マイクロホン(株)
- 4611 (株)サンミュージク
- 4223 シーエルディー(株)
- 4210 (株)ジーベック
- 4514 ジェアールサウンド(株)
- 4201 (株)シグマシステムエンジニアリング
- 4411 シュア・ジャパン(有)
- 4504 (株)シグマシステムエンジニアリング
- 4101 (株)スタジオ イクイブメント
- 4413 スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株)
- 4202 (株)須山歯研
- 4003 (株)セカンドスタッフ
- 4408 ゼンハイザージャパン(株)
- 4406 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)
- 4511 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)
- 4004 タックシステム(株)
- 4305 (株)タムラ製作所
- 4401 ティアック(株)
- 4212 ティーエスピージャパン(株)
- 4210 TOA(株)
- 4502 (株)テクノプランニング
- 4221 (株)デジタル・ラボラトリー
- 4514 トモカ電気(株)
- 4104 (株)トライテック
- 4609 日東紡音響エンジニアリング(株)
- 4606 日本エレクトロ・ハーモニクス(株)
- 4106 日本テックトラスト(株)
- 4306 ノイトリック(株)
- 4302 (株)ハウス119
- 4610 花岡無線電機(株)
- 4206 (株)ハラッド
- 4510 (有)パリス
- 4413 ヒビノ(株)
- 4413 ヒビノインターサウンド(株)
- 4412 (株)フックアップ

- 4512 フラウンホーファーIIS
- 4405 プロ・オーディオ・ジャパン(株)
- 4516 ベステックオーディオ(株)
- 4216 ベン ファブリケーション ジャパン(株)
- 4002 (有)ポルトアンベア
- 4603 松田通商(株)
- 4204 (株)ミウラ
- 4001 (株)宮地商会 M.I.D.
- 4601 (株)メディアプラス
- 4113 ヤマハ(株)
- 4207 ライプギア(株)
- 4205 リアルサウンドラボ・ジャパン(株)
- 4607 ローランド(株)

Loudness Meter Zone
ラウドネスメータゾーン

- 4109 アストロデザイン(株)
- 4311 (株)エス・シー・アライアンス
- 4217 コンチネンタルファーイースト(株)
- 4309 TCグループ・ジャパン(株)
- 4219 (株)東陽テクニカ
- 4111 (株)フォービット
- 4220 (株)フォトリオン
- 4108 (株)メディア・インテグレーション
- 4310 ヤマキ電気(株)



- 5515 ARDIS TECHNOLOGIES BV
- 5105 アイ・エス・エックス(株)
- 7105 アイ・コマース(株)
- 6115 アイティアクセス(株)
- 7210 (株)アイ・ディー・エクス
- 7207 (株)アイ・ディ・ケイ
- 6303 (株)アイデンビデオリオニクス
- 5614 IBC
- 5307 アイベックステクノロジー(株)
- 6103 ACCUSYS
- 8101 (株)アサカ
- 7312 アストロデザイン(株)
- 8312 アトモスグローバル
- 5116 アビッドテクノロジー(株)
- 5310 アミュレット(株)
- 6112 (株)アルティマ
- 5301 アルピクス(株)
- 6304 (株)アルモア
- 7206 アンリツ(株)
- 7206 アンリツネットワークス(株)
- 7214 池上通信機(株)
- 6305 ISRAEL NEW-MEDIA COMPANIES
eyeSight Mobile Technologies Ltd., AMIMON,
ABonAir Ltd. ZRRO Technologies, SAFECOM Ltd,
Valens Semiconductor, PointGrab Ltd, LiveU
- 6306 伊藤忠ケーブルシステム(株)

- (株)イノコス
- 5412 (株)IMAGICAデジックス
- 6404 イメージニクス(株)
- 7302 (株)インターテック
- 8307 (株)インディソーン
- 5606 (株)インテック
- 5205 (株)インテックス
- 6115 インテラシステムズ
- 7307 イントピックス・アイランド(株)
- 7307 (株)ヴィレッジアイランド
- 7309 ヴィンテン ジャパン(株)
- 5114 WELL BUYING INDUSTRIAL CO., LTD.
- 7213 AJA VIDEO SYSTEMS
- 5408 営電(株)
- 6205 ATENジャパン(株)
- 5509 エイム電子(株)
- 7202 エーティ コミュニケーションズ(株)
- 6210 Extron Electronics, Japan
- 5204 エスケイネット(株)
- 5003 (株)エックスライト
- 8408 NEC
- 7203 エヌイー・ピー(株)
- 5612 NAB SHOW
- 5624 (株)エヌジーシー
- 5401 NTTアドバンステクノロジー(株)
- 5401 NTTエレクトロニクス(株)
- 5511 エフソン販売(株)
- 5506 (株)エム・アンド・アイ ネットワーク
- 5304 エル・エス・アイ ジャパン(株)
- 6111 (株)エルグペンチャーズ
- 6112 (株)エルセナ
- 7204 (株)エレクトリ
- 6113 オートデスク(株)
- 5404 オフィス・ソラ静岡(有)
- 5513 (有)オプティカルエキスパート
- 5311 OPHIT CO., LTD.
- 8309 (株)オンテック
- 6114 加賀ソルネット(株)
- 5206 カナレ電気(株)
- 5505 カベラシステムズ
- 5212 加美電子工業(株)
- 7402 カモ井加工紙(株)
- 5505 カリーナシステム(株)
- 7516 (株)ガンズイ
- 6311 キヤノンマーケティングジャパン(株)
- 5605 (株)キャンピングワークス
- 5211 (株)キューベルズシンク
- 7301 共信コミュニケーションズ(株)
- 6202 銀一(株)
- 7518 クォンテル(株)
- 6308 クボテック(株)
- 7519 グラスパレ(株)
- 5602 (株)グラフィン
- 7512 (有)クレイダー
- 7408 (株)K-WILL
- 7106 (株)計測技術研究所
- 6105 (株)ケンコープロフェッショナルイメージング
- 6201 興和(株) 電機光学事業部
- (株)コスミックエンジニアリング
- 6307 (株)コスミックエンジニアリング エビン事業部
- 5503 KONOVA
- 5611 KOBA 2012 (KOREA E&X INC.)
- 8206 (株)駒村商会
- 5503 Korea Digital Convergence Association (KODICA)
- 5210 (株)コンドールブロードキャスト
- 7514 (株)サークル
- 8110 ザイリンクス(株)
- 7405 さくら映機(株)
- 5309 ザハトラ・ジャパン(株)
- 6502 サンインシステム(株)
- 7501 三信電気(株)
- 8209 (株)サンミュエロン
- 6505 (株)CFTEC
- 5610 CCBN
- 8311 (株)ジーテック
- 5208 (株)JVCケンウッド
- 5102 ジェービーシー(株)
- 6301 ジェナム コーポレーション
- 6207 シグマアイティエス(株)

- 8206 16 X 9 INC.
- 7409 (株)シノジー
- 5002 (有)シネマックス
- 5503 Cineroid(Seculine)
- 8101 (株)シンパツ
- 5310 シャイニング テクノロジー
- 5510 ジャパンマテリアル(株)
- 6401 (株)昭特製作所
- 7517 (株)新輝
- 6101 シンクレイヤ(株)
- 5618 信誠商事(株)
- 7404 (株)須川映像技術研究所
- 6503 スターコミュニケーションズ(株)
- 5001 (株)ストロベリーメディアアーツ
- 7305 3Dコンソーシアム
- 6105 スリック(株)
- 8308 西華産業(株)
- 5306 (株)世界堂
- 5108 摂津金属工業(株)
- 8108 総務省 ホワイトスペース推進会議
- 8107 ソニー(株)ノソニービジネスソリューション(株)
- 5517 (株)ソリッドシステムズ
- 5508 ダイキン工業(株)
- 5406 高橋建設(株)
- 7403 Touch-Q
- 5403 田中電気(株)
- 5106 (株)谷沢製作所
- 5503 Darim Vision Co., Ltd.
- 7109 (株)中国サンネット
- 6310 (株)中日電子
- 5601 津幡技研工業(株)
- 6302 DXアンテナ(株)
- 5502 (株)デジタル・ストリームス
- 8106 (株)ディストーム
- 8211 テクトロニクス
- 5305 (株)テクノハウス
- 8208 テクノロジー・ジョイント(株)
- 5205 (株)テックス
- (株)デュープレックス
- 5402 (株)テレビ朝日
- 5112 (株)電波新聞社
- 8111 (株)東海ビデオシステム
- 8110 東京エレクトロン デバイス(株)
- 5625 (株)東芝
- 7303 (株)東通インターナショナル
- 5109 (株)東陽テクニカ
- 6206 (株)トラフィック・シム
- 8210 DOREMI LABS LLC
- 8310 (株)ナックイメージテクノロジー
- 7103 (株)ナックシステム
- 6203 ナモト貿易(株) 計測器事業部
- 5202 (株)ニコシステム
- 6209 ニッキヤビ(株)
- 7104 日鐵住金溶接工業(株)
- 5101 日本アンテナ(株)
- 6112 日本アルテラ(株)
- 5622 日本開閉器工業(株)
- 5111 日本クアナムストレージ(株)
- 6204 日本通信機(株)
- 6106 日本テキサス・インスツルメンツ(株)
- 7513 日本電業工作(株)
- 5214 日本電信電話(株)
- 7209 (株)日本ビデオシステム
- 5621 NextoDi Co., Ltd.
- 5519 (株)ネットマークス
- 5620 ネットワークエレクトロニクスジャパン(株)
- 8105 (株)ノビテック
- 7212 Harmonic Japan 合同会社
- 5512 バイオニア(株)
- 6114 (株)パオックス
- 7515 パコ電子工業(株)
- 5413 パナソニック(株)
- 5413 パナソニックシステムソリューションズジャパン(株)
- 5413 パナソニック電工(株)
- 5503 VARAVON
- 7308 (株)パワーズニス
- 8206 Band Pro Munich GmbH
- 7304 (株)ピーテック
- 7311 ビジュアルグラフィックス(株)

- 5115 (株)日立国際電気
- 6108 (株)日立システムズ
- 6108 (株)日立ソリューションズ
- 5623 日立マクセル(株)
- 7208 (株)ビデオサービス
- 6404 ビデオトロン(株)
- 7511 (株)ビデオリサーチ
- 5501 平河ビューテック(株)
- 5604 ヒロテック(株)
- 8306 フォーカルポイントコンピュータ(株)
- 6405 (株)フォトリオン
- 6501 フォントワークス(株)
- 5603 フジコーワ工業(株)
- 6309 富士通(株)
- 8407 富士フイルム(株)
- 8407 富士フイルム(株) 記録メディア事業部
- 8407 富士フイルム(株) 光学デバイス事業部
- 8407 富士フイルム(株) 電子映像事業部
- 5411 (株)芙蓉ビデオエージェンシー
- 7201 ブラックマジックデザイン(株)
- 6001 (株)ブラットイーズ
- 6209 (有)ブランネット
- 5609 BROADCAST INDIA 2012
- 6310 (株)フローベール
- 5302 (株)プロスパー電子
- 7512 Beijing United Victory Co., Ltd.
- 5407 平和精機工業(株)
- 5516 ヘルツ(株)
- 6406 (株)朋栄
- 5103 報映産業(株)
- 8109 防災デジタル・コミュニティラジオ連絡会
- 5409 ポータブレイス
- 5504 北陸電話工事(株)
- 7401 北海道日興通信(株)
- 5615 香港貿易発展局
- 5003 (株)マイクロコム
- 7407 (株)マウビック
- 7205 マスプロ電工(株)
- 5203 (株)松浦機械製作所
- 5510 Matrox Electronics Systems Ltd.
- 6106 丸文(株)
- 7211 マンフロット(株)
- 6104 三菱電機(株)
- 5410 三友(株)
- 6403 ミハル通信(株)
- 5004 武蔵(株)
- 5404 メタルトイズ
- 8212 (株)メディア・ガーデン
- 5514 (株)メディアキャスト
- 6110 (株)メディアクローバルリンクス
- 7306 Mediachorus Inc.
- 5209 (株)モアソニック
- 6211 ユアサ工機(株)
- 5606 (株)ユニソニックシステムズ
- 7510 (株)ユニテックス
- 5405 横河デジタルコンピュータ(株)
- 5104 (株)ラグナヘルズ
- 6107 (有)ラテック
- 6402 (株)ラムダシステムズ
- 6504 ランサーリンク(株)
- 5312 リーダー電子(株)
- 5214 (株)理経
- 5207 (株)RIP-TIE
- 5110 LUMANTEK
- 6208 RAYS GROUP LTD.
- 8308 RED Digital Cinema
- 6401 (株)レントラクト昭特
- 5213 ローデ・シュワルツ・ジャパン(株)
- 5113 ローランド(株)
- 7102 WISE ADVANCED CO., LTD.
- 5107 (株)ワイドトレード
- 5619 和成(株)



- 7503 (有)アウトス
- 7504 (株)アウトスタンディングテクノロジー
- 8409 アジア メディア プロダクツ LLC
- 8409 (株)アスク
- 8302 アドビシステムズ(株)
- 7507 エーアンドエー(株)
- 8204 (株)エクスプロラ
- 8103 (株)NTTデータ
- 8202 (株)クレセント
- 8301 (株)KDDI研究所
- 7505 (株)サードウェーブ
- 8104 (株)サテライトコミュニケーションズネットワーク
- 8205 逗子・葉山コミュニティ放送(株)
- 7509 テラテック
- 8201 (株)Too
- 7502 日本ソフト開発(株)
- 8102 (株)フェアウェイ
- 8203 (株)フラッシュバック
- 7506 (株)よんでんメディアワークス



- 8604 アガイ商事(株)
- 8406 AURORA LITE BANK
- 8602 江東電気(株)
- 8501 (株)テクノカル・サプライ・ジャパン
- 8405 (株)テクノハウス
- 8304 東芝エルティーエンジニアリング(株)
- 8304 東芝ライテック(株)
- 8506 日本コーバン(株)
- 8303 (株)日本シアタサービ
- 8403 VISIO LIGHT INC.
- 8404 (株)ファーストエンジニアリング
- 8502 (株)プロ機材ドットコム
- 8603 (株)マイルランテック
- 8402 LITE PUTER ENTERPRISE CO., LTD.

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト **Inter BEE online** www.inter-bee.com

Inter BEE では、出展情報や国内外の関連展示会情報を独自に取材するチーム「Inter BEE ニュースセンター」を設置しています。
出展製品、展示会情報は、取材チームにより記事・映像コンテンツとなり、会期前、会期中、会期後と年間を通じて、Inter BEE Online内のOnline MagazineやInter BEE TVによって発信されました。

Inter BEE Online 掲載記事 (一部/抜粋)



Magazine

(株)プロ機材ドットコム

2011.9.4UP

デジタル一眼ムービーの周辺機材を中心に刻々と変化する撮影環境に柔軟に対応

■撮影周辺機器を中心に販売

2009年からInterBEEに出展している、撮影周辺機材のガジェット類を中心に販売を行っている『プロ機材ドットコム』。沖縄・那覇に本社を置き、スチルカメラの撮影周辺機器を中心に、2002年からWebサイトでの撮影機材の周辺機器を販売を開始している。主にライト、三脚、クランプ、商品撮影用のボックススタジオなど、大小さまざまなスチルカメラマン向けのサポートアイテムを中心に販売実績を伸ばしてきた。『プロ機材ドットコム』として販売チャンネルをオープンしたのは2008年4月からで、東京の拠点であり、実際の商品を見ることが出来る東京ショールーム(新宿)もそれに合わせて開設された。



■“沖縄自由貿易区域”を拠点に輸入から配送までを効率化

同社は輸入業者であり会社母体である『有有限会社ア...

Magazine

ライブギア(株)

2011.9.25UP

イタリア製スピーカーブランド K-array を出展

大阪に本拠を置く、舞台用音響・照明装置の専門企業ライブギアは、InterBEE 2011の自社ブースにおいて、イタリア製スピーカーブランド“K-array”を出展する。

K-arrayは、イタリア・フィレンツェで生まれたブランド。教会など歴史のある文化的な建造物での音楽会やコンサートを実施する際、音質を保ちながらも同時に、景観を意識したデザインが求められたことから、ユニークなデザインが生み出されている。コンサート市場、設備市場、ポータブル市場の3つのカテゴリーの製品がある。

★可搬型高性能スピーカー K-array Redline シリーズ

★ステージの美観を意識したユニークな形状

ライブギアは昨年6月、日本での総代理店契約を交わし、同社のK-arrayのポータブルスピーカー『Redline』シリーズの販売を開始した。



Magazine

カーリーナシステム(株)

2011.11.8UP

高画質ライブエンコードシステム「Cambria Live」、ヘッド分離型フルHDビデオカメラ「MEC-2000シリーズ」などを展示

カーリーナシステム株式会社(神戸市中央区、取締役社長 古藤 睦男)はグループのカベラシステムズと共同で、高画質ライブエンコードシステム「Cambria Live」、ヘッド分離型フルHDビデオカメラ「MEC-2000シリーズ」などを展示する。

Cambria Liveはライブ伝送に対応した高画質配信が特徴。ブースではCambria LiveとMEC-2000シリーズを組み合わせ、Ustreamを使ったライブ配信のデモなどを行う。「特徴のひとつは、低ビットレートでも非常に画質が良い点。iPadやiPhoneで実際に配信映像を見て頂いて、高品質映像を体感できます」と企画部 課長の重田 博司氏は意欲を見せる。



■ライブ配信に特化したエンコードシステム「Cambria Live」を展示

カーリーナシステムの展示の目玉はH.264エンコードソ...

Magazine

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)

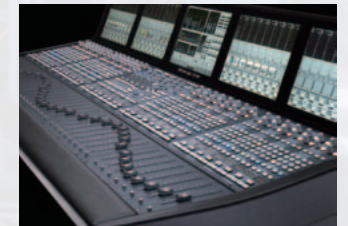
2011.11.11UP

最新の放送用フルデジタル・ミキシング・コンソールなどを展示

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(東京都渋谷区、代表取締役社長:浅野 武夫)は最新の放送用フルデジタル・ミキシング・コンソール、デジタル・インライン・コンソールなどを出展する。Smyth Research社のオーディオ・プロセッサ「SVS(Headphone Surround Monitoring)」を展示し、直接体験することもできる。主な出展製品は以下の通り。

■従来機を進化させ、5.1サラウンド制作を容易に行える「C100 HDS V4」

「C100 HDS V4」は世界中の放送関連施設で実績のある「C100 HDS」をさらに進化させた、最新の放送用フルデジタル・ミキシング・コンソール。よりコンパクトなコントロールサーフェスで、クライアントの要望に合わせた仕様を構成することができる。自由貿易区域)には、2004年に移転。このフリートレードゾーンには“保税地域”と呼ばれる、貨物を輸入...



Magazine

ゼンハイザージャパン(株)

2011.11.15UP

マイクロホン新製品「MK4」などを出展するほか、ヘッドホン製品でミニライブの演奏を「試聴・体験」できるコーナーも

ゼンハイザージャパン(東京都港区、代表取締役社長 久保 省三)はショットガンマイクの新製品「MKH 8060/8070」、スタジオ用マイクロホン新製品「MK4」などを展示する。またメインステージでは著名なミュージシャンを招いてミニライブを実施。HD-25-1 II やイヤーマニターなどで高品質なライブ演奏を「試聴・体験」することもできる。

■ショットガンマイクの新製品「MKH 8060/8070」とスタジオ用マイクロホン新製品「MK4」

展示のメインはショットガンマイクの新製品「MKH 8060/8070」とスタジオ用マイクロホン新製品「MK4」。

MKH8060/8070は映画、テレビ業界で広く利用されているMKH416の後継...



Magazine

InterBEE TV

(株)アイ・ディ・ケイ

2011.11.16UP

最新デジタルマルチスイッチャモデル「MSD-4403」と、最大500mまで延長可能なHDMI信号延長器を出展

アイ・ディ・ケイは、同社のデジタル製品コーナーで、デジタルマルチスイッチャ MSD-4403をデモしている。同製品は、デジタルとアナログのシステムを混在させたシステムの中で利用することを想定している。

同社は、業界初のデジタルマルチスイッチャ『MSD-4401』を発売以来、様々なチャンネル数と、コンセプトの製品を発売し、多くノの入実績を持つ。HDMI・DVIのデジタル信号とアナログ信号(RGB・色差・コンポジットビデオ)を統合した次世代デジタルAVシステムの構築が可能だ。

スムーズな切り替えが可能なのが特徴で、プロジェクタースクリーンなどの外部機器の切り替えも容易になっている。また、ボリューム操作による音声の



Magazine

InterBEE TV

スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株)

2011.11.16UP

日本初披露の音声卓 オンエア1500を出展

ヒビノグループのスチューダー・ジャパンブロードキャストは、9月のIBCで発表したOnAir1500を日本で初披露した。同社のOnAir3000と同じプラットフォームを使い、フェーダー数やDSPを節約することで、ラインアップで最もコンパクト、かつ低価格なラジオ向けの音声卓となっている。また、タッチ・アンド・アクションというスチューダーのコンセプトにもとづいた操作により、モジュールの簡単なボタン操作でより迅速な操作が可能になっている。

新開発の新しいメインフレームのNANO SCOREは、4Uサイズユニットで16chのXLRコネクタによるマイク/ライン入出力(16chライン出力のうち、7chはモニター出力として使用)と4つのXLRコネクタによるAES/EBU入出力。また、基本構成時のディスク/モジュール(オプション)は、カテゴリ 5のケーブルでメインフレームと接続



Magazine

InterBEE TV

ビジュアル・グラフィックス(株)

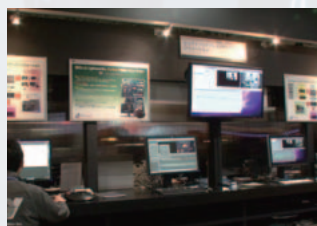
2011.11.16UP

EditShareとthiiDaにおけるファイルベース・ソリューションを展示

ビジュアルグラフィックスは、「デジタルコンテンツ制作を加速するシェアドワークフロー」として各種のシステムを紹介。オートデスクやアドビなどのノンリニアを中心としたハイクオリティな編集システムをはじめ、ファイルベースのワークフローを加速するハイパフォーマンスなネットワークソリューションまで幅広いシステムを展示。

EditShareは、生産性を高める様々な機能を持ったNAS。アビッドユーザー、ファイナルカットユーザーにとって便利なピン・ロッキング機能を持つ。プロジェクトファイルを消してしまった際に、コラボレーションのワークフローを消さないように、特許機能であるピン・ロッキングにより、安心して仕事ができる。

thiiDaは、ファイルベースにより、増えてきたファイルの管理を容易にするアセット管理ツール。ブラウザーからストレージにある映像、静止画ファイルなどを一元的にデータ管理・最適化して、すぐに必要なデータにアクセスできる。



Magazine

InterBEE TV

ヒビノ(株)

2011.11.16UP

JBLラインアレイスピーカー VERTEC コンパクトモデルを出展。軽量化を実現し、多彩な配置・設置方法を提案

ヒビノは、自社ブースにおいて、JBLのラインアレイスピーカー VERTECのコンパクトモデルを出展した。従来の4種類のモデルと比べても最少・最軽量となるモデル。幅600mm、重量は1キャビネットが15kgという軽さを実現している。

これまでは耐荷重の制約で難しかった会場への対応が可能になる。6基のキャビネットと金具で100kg程度。耐荷重が軽くなったことで水平に配列するといったことも可能になる。これまでのアレイスピーカーでは、難しかった配置が可能になる。

さらに、4886専用サブウーファースをベースにしたポールマウントの設置も可能になっている。会場では、さまざまな配置アレンジを紹介している。



Magazine

総務省 ホワイトスペース推進会議

2011.11.16UP

ブースのオープニング式典を開催
総務省総務大臣政務官 森田氏が35特区の制度づくりに意欲

11月16日 InterBee2011の会場で、「総務省 ホワイトスペース推進会議」の共同ブースのオープニングセレモニーが開催された。

最初に挨拶に立った総務省総務大臣政務官 森田氏は、「ホワイトスペースにより、限りに在る電波資源を再利用することができる。これにより街作りや地域の雇用創出を目指したい。現在すでに35の特区で実証実験が始っており、来年度以降は制度作りなどを順次進めたい」と意欲を語った。

続いてホワイトスペース推進会議会長代理の村上輝康氏(野村総合研究所)がホワイトスペースを利用した南相馬チャンネルなどのコミュニティ放送の広がりについての現状を説明。

最後に、来賓による展示ブース前のテープカットが行われ、共同展示ブースの開設を祝った。来賓としてテープカットに臨んだのは、森田氏、村上氏のほか、



Magazine

(株)KDDI 研究所

2011.11.16UP

8Kをリアルタイム蓄積!フル解像度の超高精細映像に対応した「8K UHD TVリアルタイム圧縮伝送システム」を展示 きずな衛星で伝送デモ実演!

KDDI研究所は、昨年のInterBEE2011にて初出展した8K(7680画素×4320ライン)フル解像度のUHD TV(超高精細映像、スーパーハイビジョン)のリアルタイム蓄積コーデックを搭載した蓄積レコーダと新しく開発した放送用リアルタイムコーデックを展示・デモを行っている。この技術は、独立行政法人情報通信研究機構(NICT)の委託研究として研究開発を進めているものである。

■4:4:4 10bit対応8K UHD TV素材蓄積用レコーダを出展 圧縮率1/15以下を実現

KDDI研究所では、新たに4:4:4 10bit符号化に対応し、1/15以下の圧縮率とフレーム内圧縮による1フレーム以内の遅延に対応した8Kフル解像度映像の独自コーデックを開発。従来のコンパクトなリアルタイム素材レコーダを同様のコンパクトなリアルタイム素材レコーダを開発し、



Magazine

NTT エレクトロニクス(株)

2011.11.17UP

字幕に対応したケーブルテレビ事業者向け高画質4:2:2 MPEG-2 HDTV/SDTV エンコーダ「HE5100S」を展示

NTT エレクトロニクスは、字幕に対応したケーブルテレビ事業者向け高画質4:2:2 MPEG-2 HDTV/SDTV エンコーダ「HE5100S」を展示・紹介した。

「HE5100S」は、ARIB STD-B37 デジタル字幕送出および ARIB STD-B39 カレント音声モード制御(音声制御機能)に対応した高画質4:2:2 HDTV/SDTV MPEG-2 エンコーダである。なお、ARIB STD-B37 による字幕対応と ARIB STD-B39 による音声制御機能については、オプションとなっている。



ブースでは、2台の再生機から出力された映像をHD-SDI信号にて2台のHE5100Sに入力して各々18MbpsのMPEG-2へエンコードしDVB-ASIで出力、それらの信号を多重化装置で多重化、OFDM変調してRF出力し、モニタに表示するデモンストレーションが行われていた。

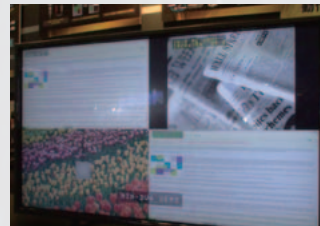
Magazine

イメージニクス(株)

2011.11.17UP

3つの新製品を初披露！ 機能豊富なデジタルマルチスキャンコンバータ「MIX-DV4」12月に発売！

イメージニクスは、Inter BEE 2011の自社ブースにおいて、デジタルマルチスキャンコンバータ「MIX-DV4」、32×32 デジタルRGBマトリックススイッチャー「DVX-3232HC」、8入力2出力 ハイブリッドマトリックススイッチャー「HYB-82」の3つの新製品を出展している。



デジタルマルチスキャンコンバータ「MIX-DV4」は、最大4入力分の多機能アップダウンコンバータを実装、4対1の完全シームレス切換えスイッチャーで、かつ、1つの画面に4つの画面を任意レイアウトで合成できるマルチレイアウトビューアだ。

入出力信号は変換コネクタを用いてHDMI信号(HDCP・エンベデッド音声)も使用可能。各入力部には外部外部のスイッチャーでの切替えにも対応した疑似シームレス切換え機能を持つ。

Magazine

カペラシステムズ

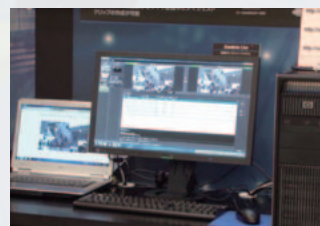
2011.11.17UP

HDMI、HD/SD SDI入力の信号を直接H.264 RTMPに変換する高画質ライブエンコードシステム「Cambria Live」を出展

カペラシステムズは、新製品の画質ライブエンコードシステム「Cambria Live」(カンブリア・ライブ)を出展。HDMI、HD/SD SDI入力の信号を直接、H.264 RTMPに変換することで高画質配信を実現する。

イベント、コンサート、会議上などにおけるライブストリーミングサーバーへのライブ配信を行う。

特徴は、人間の視覚的特徴を高度に利用した「動き探索アルゴリズム」により、ライブ配信に達した低ビットレート、高画質なエンコードを実現する。複数チャンネルの同時配信や、ファイル保存の機能を持ち、再配信も行える。



Magazine

サンインストゥルメント(株)

2011.11.17UP

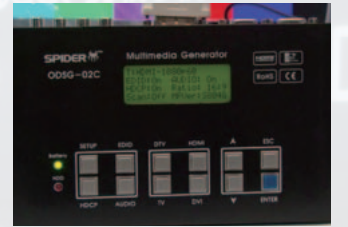
バッテリー内蔵の携帯型デジタル信号発生器「ODSG-02C」を出展

サンインストゥルメントが出展している韓国 Opticis 社製の携帯型デジタル信号発生器「ODSG-02C」は、バッテリー内蔵で携帯が可能なコンパクトサイズ。

カラーバー、音声、映像など各種の信号を発生可能だ。

映像制作の現場におけるエンジニアや、工場製造者向けに開発されており、デジタル/アナログのコンピューターモニター、ビデオプロジェクター、マルチメディアモニターなどに、各種の映像信号や、テストパターン、画像/音声ファイルを用いたテストを簡単に行うことができる。特徴は、携帯型の小型タイプでバッテリー駆動であるために、電気が供給されないところでも2時間使用できる。また、RS-232C を使って遠隔操作できるため、人が入れない位置などの装置の測定も可能だ。

信号は、DVI/HDMI やコンポーネント Y/Pb/Pr のようなデジタル映像信号だけでなく、RGB Video、CVBS のようなアナログ映像信号も出力可能。



Magazine

(株)セカンドスタッフ

2011.11.17UP

BLOSSOMオーディオの新たなフラッグシップ「BLO-3090 Reference Monitor Amplifier」を出展

セカンドスタッフは、BLOSSOM BLO-3090を出展。BLOSSOMオーディオの新たなフラッグシップ「BLO-3090 Reference Monitor Amplifier」はスピーカーモニタリング及びヘッドホンモニタリングの環境において、優れたパフォーマンスを実現するモニターアンプ。

オーディオ機器をコンポーネントするときその音質に大きく影響する各入出力の基準レベルをマッチングする機能を設けることにより、感度よくストレスのない動作レベルと低歪み・高S/Nを実現し、プロフェッショナルの制作環境、オーディオリスニングの環境の分け隔てなく音楽の全てを余すことなく再生する。



Magazine

ビデトロン(株)

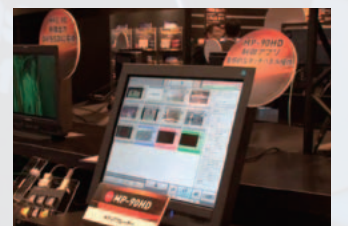
2011.11.17UP

リアルタイムにSDI変換する新メディアプレーヤー「MP-90HD」、3G対応マトリックススイッチャー「MTX-70-168」などを出展

ビデトロンは、新製品のメディアプレーヤー「MP-90HD」、携帯動画、MXF(OP1a)、各種静止画ファイルなど幅広いメディアファイルを、リアルタイムにSDIに変換して出力できる。タッチパネルで簡単な操作。NAS上から直接素材を再生したり、USBメモリー、内蔵DVDプレーヤーで再生が可能。ループ再生やエンドレス再生機能も持つ。コンパクトな1Uラックマウントサイズでありながら、本体にSLCタイプのSSD(50GB)を搭載し、高い信頼性を持つ。

モジュールシリーズの70シリーズの新製品、3G対応マトリックススイッチャー「MTX-70-168」「MTX-70-88」は、3G、HD、SD-SDI、DVB-ASI入力に対応。16×8、16×4、8×8、8×4のラインアップを揃えている。リファレンス入力があり、スイッチ可能。SNMP制御アプリを標準で装備している。操作パネルを漢字(8文字)で表示できる(英数字12文字まで)。

2U筐体の中にマトリックススイッチャー、フレームシンク、



Magazine

InterBEE TV

ブラックマジックデザイン(株)

2011.11.17UP

SSDディスクレコーダー「HyperDeck Shuttle」や
17インチLCDラックマウントモニター「SmartView HD」を出展

ブラックマジックデザインは、今年のNABやIBCで発表した新商品であるSSDディスクレコーダー「HyperDeck Shuttle」や17インチLCDラックマウントモニター「SmartView HD」を展示している。



■ SSDディスクレコーダー「HyperDeck Shuttle」を展示

ブラックマジックデザインは、今年のNAB SHOWで発表したSSDディスクレコーダー「HyperDeck Shuttle」と、2つのSSDスロットを搭載したブロードキャストレコーダー「HyperDeck Studio」を展示している。ブースでは、実際に録画をするデモを行っている。

「HyperDeck Shuttle」は、カメラに専用のマウントプレートを使いカメラに取り付けられる小型のSSDディスクレコーダーで非圧縮10bitのSDビデオを録画できる。

Magazine

InterBEE TV

池上通信機(株)

2011.11.17UP

16-bit フルデジタル 3G HDTV ポータブルカメラシステム「HDK-97A」を出展
映像制作の多彩な製品群を紹介

池上通信機は、16-bit フルデジタル 3G HDTV ポータブルカメラシステム「HDK-97A」を出展した。

新開発230万画素のプロGRESSIVE CCDを採用し、16-bitフルデジタルの3G-SDI 1080p/59.94Hzネイティブ出力を搭載。高性能プロGRESSIVE CCDを採用。また、新開発の40/45nm設計ルールによるFPGAを採用し、先進のデジタルプロセス処理を実現している。

カメラのラインアップも充実。大型からハーフサイズまでのラインアップを揃えている。ナックが開発したハイスピードカメラ「ハイモーション2」もステージで紹介。また、9インチ、2インチのカラービューファインダーをカメラに実装して確認できるようにしている。

池上通信機のブースは、メインのカメラステージ以外にもさまざまな映像制作機器が展示されている。3M/Eビデオスイッチャー HSS-330や、ノンリニア編集機 HSS-330など、



Magazine

InterBEE TV

(株)東通インターナショナル

2011.11.17UP

kaleidoシリーズ マルチビューワを出展 クラスタ機能を用いてS-bus 接続による
プロダクションスイッチャーとの連携操作を紹介

東通インターナショナルは、ブースにおいて、複数台のマルチビューワを1台の大型マルチビューワのように統合・制御するクラスタ機能を用いてS-bus接続によるプロダクションスイッチャーとの連携操作を紹介した。

これは、Miranda社のKaleidoマルチビューワによるもので、クラスタ機能により、複数のマルチビューワを統合させて運用可能。複数のマルチビューワと多くのディスプレイによる多画面表示システムの構成で、全体を統合したレイアウトを作成できる。あるいは、一組の操作パネルとマウスで一つのマルチビューワのように操作することもできる。

いずれも、複数の画面上で切れ目の無い動きでカーソル移動できる。カーソルの位置により自動で対象のマルチビューワを操作することができる。

会場では、マルチビューワの操作によりルーティングスイッチャーとの連携操作が



Magazine

InterBEE TV

(株)IMAGICA デジックス

2011.11.17UP

映像資産の管理・再利用を提案 顧客の立場でシステム構築 スポーツ番組の解説用映像
制作システム「リベロハイライト」をデモ

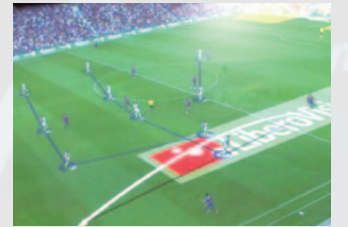
IMAGICA デジックスは、映像管理システムをテーマにブースを構成した。

アビッドの素材管理システム「インタープレイ MAM」は、品質チェックやトランスコード、XML エクスポートなどのファイル処理を独自統合した形で紹介。自動配信管理システムのシグニアントや、LTO テープへのアーカイブを組み合わされる。

同時に「実運用ではメタデータを入力するのが困難。特定の映像や音声を認識・検出するシステムを追加するなどして、顧客が映像資産を再利用しやすい形を構築して提案している」(説明員)という。

スポーツ番組の解説用映像制作システム「リベロハイライト」は、サッカーの試合映像を使って実演した。

任意のフレームから選手の外見やボールをリアルに表示する。



Magazine

InterBEE TV

NEC

2011.11.18UP

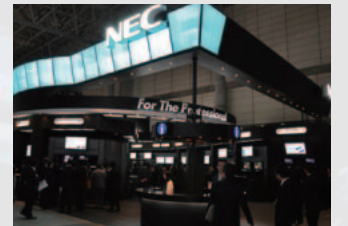
超小型エンコーダー H.264超低遅延 VC-70を出展

NEC は、報道用ファイルベースシステムや初出展となる H.264 超小型超低遅延エンコーダ「VC-70」等の展示と次世代圧縮技術「HEVC」の技術参考展示を行っている。

■ 報道用ファイルベースワークフローをデモ

NEC では、報道用素材をファイルベースで運用することを可能とするファイルベースシステムを展示している。同社が提案する報道用ファイルベースシステムは、素材サーバに次世代グリッドストレージ「iStorage HS シリーズ (HYDRAStor)」, 送出サーバに Armadia ビデオサーバを利用したシステムである。

ブースでは、ベースバンドで収録した映像素材を MXF ファイルへ変換しながら素材サーバへファイル伝送し、Grass Valley 社の編集機「EDIUS」にて編集した後、送出サーバに接続した送出サーバへ送信するまでのワークフローのデモンストラ



Magazine

InterBEE TV

(株)NTT データ

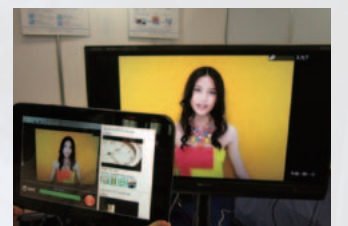
2011.11.18UP

FingerPrint 技術を使った「リアルタイムコンテンツ連動サービス」を展示

NTT データは音楽や映像の情報をもとにコンテンツを特定し、連動した関連情報を提供する「リアルタイムコンテンツ連動サービス」を展示している。販促・広告活動のツール、インターネット上での違法コンテンツ流通対策、著作権処理を効率化するツールなどに活用できるという。

■ コンテンツのマッチングを図り、関連情報をリアルタイムに配信

例えば、テレビやデジタルサイネージの映像をスマートフォンなどでキャッチし、コンテンツの特徴をとらえてマッチングを図ることで、そのスマートフォンに関連情報をリアルタイムに配信することができる。CM映像に活用すれば、特定の映像を見たユーザーだけに特典情報やクーポンを配信することなどが可能になる。映像だけでなく、音声・音楽にも対応する新しい形の広告・購買向上のツールとして利用できるとい



Magazine

Touch-Q

2011.11.18UP

2000カンデラの高輝度を実現したプロンプターシステムを出展

Touch-Qは演説や講演向けのスピーチプロンプター、撮影用途向けのカメラプロンプターを出展している。プロンプターは演説や放送などで使われる原稿表示装置。聴衆や視聴者に見えない形で電子的に原稿を表示し、話者のスピーチを補助する。



■明るい会場でも見やすい高輝度が特徴

スピーチプロンプターは政府首脳の前演説や記者会見、企業の株主総会や新製品発表会などで広く利用されている。演台を使ったスピーチに適したボックス型とプロンプター単体で使える卓上型がある。

カメラプロンプターはテレビカメラの前に設置したハーフミラーに原稿を映し出し、カメラ目線でのアナウンスを補助する。アメリカのニュース番組では一般的に利用されている。今回展示したTouch-Qのプロンプターの特徴は輝度表示を...

Magazine

アストロデザイン(株)

2011.11.18UP

スーパーハイビジョン用機材を出展

アストロデザインは、NHKと共同開発したスーパーハイビジョン(8Kx4K)用SSDレコーダ「SR-8422」、同カラーグレーディング装置「VP-8407」を出展した。リアルタイムに色処理が行えるVP-8407や、クイックリプレイが行えるSR-8422によるコンテンツ制作が加速されるとみられる。両機は、2012年のロンドンオリンピック中継(パブリックビューイング)に使用される予定となっている。



■ロンドンオリンピック中継 パブリックビューイングで採用予定

アストロデザインは、NHKと共同開発したスーパーハイビジョン用SSDレコーダ「SR-8422」と同カラーグレーディング装置「VP-8407」を出展した。従来の4K用レコーダが4台同期運転で記録・再生を行ったのに対して、SR-8422は1台で8Kx4Kを扱える。可動部分のないSSDを記憶装置とし高速アクセスが可能であり、録画を継...

Magazine

アルビクス(株)

2011.11.18UP

マルチビューワ MV-500 映像・音声エラー監視システム VAD-2000SR

アルビクスは、新開発の「マルチビューワ MV-500」など最新映像機器のラインアップを展示した。

「MV-500」は最大120chのSDI入力信号を8系統の高解像度モニターに分割表示することができる。アルビクスの草間康郎取締役営業部長は、「放送局のマスター監視を中心に幅広い用途で利用が可能。当社は大型映像マルチビジョンの拡大装置で実績があり、この基礎技術をもとに開発した。デジタル化で放送局のマスター監視機器も徐々に更新が進められており、今後大きな市場が期待できると思う」と話す。

映像・音声エラー検出装置「VAD-2000SR」は、HD-SDI、SD-SDI信号に対応した。入力信号の直近同時録画に対応し、エラー発生時の状態を迅速に確認することができる。

草間氏は「使い勝手の良さやエラー検出の精度では業界トップクラスと言える。今期から多くの放送技術関係者から、このような機器を探していた」と話す。



Magazine

(株)カレント

2011.11.18UP

AF201 コミュニケーションシステムを出展

レコーディング、放送、ポスプロ、ホールなどで使用する音響及び制御機器の開発、製造、販売を行うカレント。

今回は、ブースにおいて、新開発の製品を中心にコミュニケーションシステム、モニターシステム、メーターシステム等を展示した。特注機器やシステム構築に関するご相談にも応じる。

新製品のAF201コミュニケーションシステムは、デジタルコンソールO2R、O2R96、DM1000/2000、O1V96、O3D、DA7等を使用したスタジオで必要不可欠な機能を付加するために開発されたコミュニケーション統括用スタジオインタフェース。

2系統のカフ制御、トークバック・バックトーク制御、CUE、フェーダースタート・ストップ、2系統のCRモニターの切替等の機能を持つ。



Magazine

さくら映機(株)

2011.11.18UP

放送局共同開発機をデモ 実ステージで各機能披露

さくら映機は、ノンリニア編集システム「プラナス」を中心に、放送局ワークフローに特化したデモを展開した。新製品のリニア編集対応収録機「プラナス・ユニバーサル・レコーダー」のほか、それぞれ放送局と共同開発した3製品を発表した。

同レコーダーは、±0フレーム精度の録画・編集操作を実現。ファイルベース・フォーマットへの変換機能や複数デバイス同時収録、2系統HD-SDI同時収録が可能。

そしてフジテレビジョンとの共同開発製品で、伝送ファイルを受信しながら追っかけ再生ができる「ファイルキャスト・ステーション・プレーヤー」や、テレビ東京と共同開発した回線収録装置「プラナス・ループ・インジェスター」、NHK宮崎放送局と共同開発したノンリニア編集機の新機能など、各種新型機を公開した。

これら新製品は、「A1スタジオ」と名付けた特設ステージで、マルチアングルによる中継収録、編集、送出の実演を通して披露した。



Magazine

(株)シバツク

2011.11.18UP

マルチフォーマットコンバータ VC7を出展

シバツクは、国際的スポーツビックイベントの中継や、国際随意伝送サービスで利用されるフォーマットコンバータの新製品を出展した。変換時に、動きベクトルを活用することで、より高画質にフォーマット変換が行える。

■高度な動きベクトル処理でより高画質化を実現 3DL+Rにも対応

シバツクのブースでは、マルチフォーマットコンバータの新製品VC7がデモされた。フォーマットコンバータは、走査線数、画素数、フレーム数などの変換を行うもので、国際中継などで使用される。同社は、従来よりHD・SD間の変換も行えるマルチフォーマットコンバータVC31シリーズやHDフォーマット間での変換を行うHDTVフォーマットコンバータVC39などの製品がある。

従来のVC31シリーズも動きベクトルを用いているが、VC7は...




Magazine **InterBEE TV**

タックシステム(株) 2011.11.18UP

iZotope社マスタリング用統合ツール最新版「OZONE5」、ADDER社のKVMリモートシステム、自社製サラウンド・アップミックスソフトなどを出展

タックシステムは11月16日に発売を開始したiZotope(アイゾープ)社のマスタリング用統合ツールの最新版「OZONE5」、新たに取り扱いを開始したADDER社のKVMリモートシステム、自社製品のサラウンド・アップミックスソフトウェアの最新バージョン「NML Revcon-RS」などを展示している。ブースではこれらの製品展示のほか、デモによる特徴的な機能や操作性の紹介も行っている。



■3Dスペクトログラムメーター、ラウドネスメーターに対応した「OZONE5」

OZONE5はiZotope社のマスタリング用統合ツールの最新版。「マキシマイザー」「EQ」「マルチバンド・ダイナミクス」「マルチバンド・ステレオイメージング」「ポストEQ」「ポストEQエクサイター」「リバーブ」「ディザリング」

Magazine **InterBEE TV**


ティアック(株) 2011.11.18UP

TSCAMブランドの放送業務用CD/ソリッドステートプレーヤCD-9010CFを参考出展

TEACは、プロ向けブランドTASCAM製品として、放送業務用CD/ソリッドステートプレーヤCD-9010CFを出展した。自社製ドライブを用いた高信頼性メカを基本にCFカードを用いた再生やリッピングにも対応している。

TEACのプロ向けブランドTASCAMは、放送業務用CD/ソリッドステートプレーヤCD-9010CFを出展した。放送用のCD機材は、長時間駆動されることも多く、民生用とは比べものにならない信頼性が要求される。コストダウンに力がかけられている民生用機をプロの世界で使用すると、ごく短期間で故障するという。故障の多くは、メカ(機構部分)に関連するものであるが、最近では高品質メカを民生用で見つけることは難しくなっている。

TEACは、メカ部分を自車で開発、製造することで放送業務用に求められる高い信頼性を確保した。今回出展されたCD-9010CFは、自社製メカを搭載して



Magazine **InterBEE TV**


ディーエスピージャパン(株) 2011.11.18UP

8トラック・デジタル・レコーダ「SX62R」とネットワーク・オーディオ・コンバータ「Horus」を出展

ディーエスピージャパンは、SONOSAX社の8トラック・デジタル・レコーダ「SX62R」とマーケティング社のネットワーク・オーディオ・コンバータ「Horus(ホルス)」を出展した。

■6ch プラスステレオ Mixが可能な8トラック・デジタル・レコーダ「SX62R」を展示

「SX62R」は、SSD(64GB)やCFメディアに最大8トラック録音可能なデジタル・レコーダで、モニタリングや6ch プラスステレオ Mixができる高音質アナログ・ミキサー機能も持っている。レコーダ機能としては、44.1~192kHz@24bitをサポートし、ファイルフォーマットはBWFファイルとiXMLメタデータに対応している。入力は、XLR(バランス)が6チャンネル、出力はXLR(バランス)のMIXのL/Rで、オプションでデジタル出力にも対応する。操作は、前面パネルのスクリーンから操作が可能。



Magazine **InterBEE TV**

(株)ディストーム 2011.11.18UP

米国NewTek社製品『TriCasterシリーズ』の最新機種3製品を国内初披露

株式会社ディストームは、幕張メッセにて開催中のInterBEE 2011において、米国NewTek社製品「TriCasterシリーズの最新機種」と自社開発のLightWave 10対応簡易モーションキャプチャ・プラグイン「Kinect motion Plugin for LightWave」を出展・紹介した。

■米国NewTek社製品『TriCasterシリーズ』の最新機種3製品を国内初披露

米国NewTek社「TriCasterシリーズ」の最新機種3製品である「TriCaster 450 EXTREME」、「TriCaster 850 EXTREME」、「3PLAY 820」、「3Play 425」を国内初展示し、デモンストレーションを行った。

「TriCaster 450 EXTREME」は、「TriCaster 450」と同じ2Uのラックマウント型の筐体で、14チャンネルの素材のスイッチングや映像効果、収録、配信までを1台で行うことができる。映像制作のシステムである。HD/SD入出力に対応し、



Magazine **InterBEE TV**


ヒロテック(株) 2011.11.18UP

4チャンネルHD(MPEG2/H.264)エンコーダ内蔵館内自主放送装置等を参考出展

ヒロテックは、今回初展示となる1U筐体に4チャンネルHD(MPEG2/H.264)エンコーダと変調器を内蔵した館内自主放送装置「DBS8555A」と今回参考展示となる8チャンネルSD(MPEG2/H.264)エンコーダ内蔵放送装置「DBS6038A」を展示している。

■1U筐体にMPEG2とH.264のマルチフォーマットエンコーダと変調器を4枚搭載した館内自主放送装置を参考出展

ヒロテックは、1U筐体にMPEG2とH.264エンコーダと変調器からなるボードを4枚搭載した館内自主放送装置「DBS8555A」をInterBEE 2011で初展示している。ブースでは、ブルーレイディスクプレイヤーから出力されたHDMI信号をHD-SDIへ変換して本装置に入力し、1080iのフルHD映像にエンコードし、OFDM変調したRF信号をデジタルテレビに出力するデモを行っている。



Magazine **InterBEE TV**

フォーカルポイントコンピュータ(株) 2011.11.18UP

台湾ATOMOS社製Apple ProRes ポータブルディスクレコーダーを展示

フォーカルポイントコンピュータ株式会社は、HDMIやHD/SD-SDIからApple ProResコーデックでデータ収録できるATOMOS社のApple ProResポータブルディスクレコーダー「NINJA」と「SAMURAI」、およびバッテリーを搭載したコンバータ「CONNECT」の3製品を出展・紹介した。

■ATOMOS社製Apple ProResポータブルディスクレコーダー「NINJA」と「SAMURAI」を展示

「NINJA」は、HDMIから直接に10bit Apple ProRes形式で収録できるポータブルディスクレコーダーで、「SAMURAI」は、HD/SD-SDIから直接に10bit Apple ProRes形式で収録できるポータブルディスクレコーダーである。この2製品とも2.5インチのハードディスクまたはSSDをメディアに使用し、デュアルバッテリーシフト



Magazine

InterBEE TV

ブラウンホーファー IIS

2011.11.18UP

独最大の応用研究所 ブラウンホーファーのIIS研究所が展覧 MPEGサラウンドをデモ

独エアランゲン市にあるブラウンホーファー IIS は、20 年以上にわたってオーディオ圧縮およびマルチメディア技術の開発に取り組み続けている。ブラウンホーファー IIS は、ドイツにある60のブラウンホーファー研究所の一つ。mp3やAACの発祥の地としても知られ、MPEGサラウンド、SX Pro、オーディオ通信エンジンのような最新のオーディオ/ビデオコーディングや次世代のマルチメディア技術を提供している。

今回出展した新技術「MPEG サラウンド」は、すでに携帯端末や自動車向けマルチメディア放送システムの音声符号技術として採用されており、ISO規格に基づいている。高品質多重チャンネル音声をステレオなみの低ビットレートで可能にしている。また、既存のステレオ放送と完全互換性であるため、通常のステレオ受信機でもサラウンド放送を楽しむことができる。2chとサラウンド用の平行放送は必要ありません。

携帯型端末でも一般のヘッドホンを使用したサラウンド



Magazine

InterBEE TV

ミハル通信(株)

2011.11.18UP

館内デジタル自主放送システム MRシリーズ

ミハル通信は、館内デジタル自主放送システム「MR3000Xシリーズ」、放送局向け緊急バックアップシステム、地デジ信号チャンネルチェッカー「見張るチャン(MR9000X)」を展示した。

■ IPネットワーク配信に対応した新製品の館内デジタル自主放送システム「MR3300X」を展示

同社では既存のアナログ放送共聴設備をそのまま利用しデジタル化を実現する館内デジタル自主放送システムソリューション「MR3000X」シリーズを展示した。「MR3000Xシリーズ」はハーフユニットサイズの筐体で、(1)館内デジタル自主放送を低コストで導入できるHD/SD MPEG2エンコーダを搭載したHD/SD OFDM変調器「MR3000X」、(2)放送局や競技場向け高画質・高機能のハイスpek HD OFDM変調器「MR3100X」、(3)MPEG2 SDエンコーダを4つ搭載したQuad SD OFDM変調器「MR3200X」、(4)ホテル・企業・店舗など



Magazine

InterBEE TV

(株)ラムダシステムズ

2011.11.18UP

汎用テロップシステム「Neo・n」やビデオペン製品「Gタッチ」を展示

ラムダシステムズは、テロップシステム「Neo・n」や映像にリアルタイムに手書きできるビデオペン製品「Gタッチ」と2012年春販売予定のGRID-MF/VMXボード「GRID-VEGA(ベガ)」を参考出展した。

■ ノンリニア編集システム「EDIUS」との連携をデモ

ラムダシステムズは、今回のInterBEE2011において、グラスバレー社と連携して開発したノンリニア編集システム「EDIUS」用テロップシステム「Neo・n」プラグインソフトを展示・紹介した。同プラグインソフトにより、「EDIUS」上で、リニア編集/サブ送付と同一スーパー付けや編集/編集後のスーパー修正の双方を可能にしているという。ブースでは、「Neo・n」で作成したテロップをドラッグ&ドロップで、EDIUSへ取り込むデモンストラ



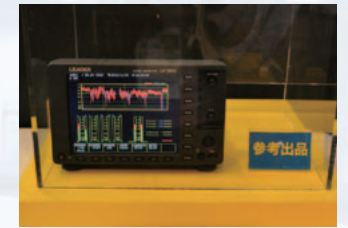
Magazine

リーダー電子(株)

2011.11.18UP

ラウドネス測定に対応マルチモニター「LV 5800」と「LV5770」、ISDB-Tmm方式に対応した信号発生器を展示

リーダー電子は、注目されているラウドネス測定対応のデジタル・オーディオ・ユニット「LV 58SER40A」を搭載したマルチモニター「LV 5800」と「LV5770」、携帯端末向けマルチメディア放送規格ISDB-Tmm方式に対応した信号発生器を展示した。また、ラウドネス対応オーディオモニター「LV 5837」とISDB-Tmmシグナルレベルメーターを参考出展した。



■ ラウドネス対応オーディオモニター「LV 5837」を参考出展

リーダー電子は、デジタル・オーディオ・ユニット「LV 58SER40A」を搭載しラウドネス測定に対応したマルチモニター「LV 5800」と「LV 5770」を展示、また、オーディオ専用モニターであるオーディオモニター「LV5837」を参考出展した。「LV 5770」は、「LV 5800」の廉価型で2入力のSDI信号を同時監視できる。

Magazine

ローランド(株)

2011.11.18UP

6チャンネルの同時録音に対応したポータブルレコーダー「R-26」とデジタル・コンソール「V-Mixer M-480」を出展

ローランドは、9月に発表した6チャンネルの同時録音に対応したポータブルレコーダー「R-26」と4月に発表したデジタルコンソールV-Mixerの次代フラッグシップ・モデルLive Mixing Console「M-480」を展示・紹介していた。

■ 異なる指向性を持った2種類の独立マイクと2系統の外部マイクを加えた6チャンネルの同時録音に対応

ポータブルレコーダー「R-26」は、指向性と無指向性の2種類のマイクを独立して搭載し、さらに2系統の外部マイクを加えた6チャンネルの同時録音に対応したプロ仕様のポータブルレコーダーだ。最大24ビット/96kHzのリニアPCM録音への対応や各入力の手洗を抑制する新開発のアナログ回路「IARC」の採用による高音質設計に



Magazine

加美電子工業(株)

2011.11.18UP

簡易な計測が可能な地デジ/BS用レベルチェッカー「DL250」などを出展

加美電子工業は国内および海外向けレベルチェッカー製品を多数展示している。特に力を入れているのが、新製品の地デジ/BS用レベルチェッカー「DL250」である。

■ BSアンテナ工事を効率化する「DL250」

DL250は地上波デジタル放送(13ch～62ch)およびBS放送(BS1～23ch)の電波強度を測定する装置。レベル確認に加えて、デジタル放送の信号品質を示す「BER」「換算CN」「GI」の測定が可能だ。

これまで上位機種のみ確認ができたマルチパスのうちGIについて、大まかな傾向を知ることができる。アンテナに直接つないで計測することで、アンテナの最適な設置場所、アンテナの方向調整などに役立つ。計測結果を数値として確認できるので、BS工事に熟知している業者でも利用しやすく、作業効率の向上が期待できるという。



Magazine

(株)計測技術研究所

2011.11.18UP

4K対応小型非圧縮レコーダ「UDR-N50」を出展

(株)計測技術研究所(計測技研)は、ハーフサイズで4Kに対応した小型非圧縮レコーダUDR-N50を出展した。これまでのUDRシリーズに比べて横幅は半分となっており、ラックには2台並べて設置できる。連携機能などUDRシリーズの特徴を継承しており、現場の要望に応えるものとなっている。



■19インチからハーフラックサイズに大幅な小型・軽量化を実現

計測技研は、小型4K対応非圧縮レコーダUDR-N50を出展した。UDRシリーズは、非圧縮映像をディスク等に記録、再生する装置として、映像業界はもとより、研究開発現場、更には製造現場でも用いられている。これまでのUDRは19インチのラックに収納される大きさだったが、UDR-N50は半分のハーフラックサイズとなった。19インチラックに2台を並べて収納し運用することも可能となるように熱設計されている。また、

Magazine

報映産業(株)

2011.11.18UP

LTO向けアーカイブシステム CACHE-Aなど
アーカイブシステムソリューション3製品を展示・紹介

報映産業株式会社は、LTOテープに保存するCache-A社アーカイブアプライアンス、Focus Enhancements社のメディアサーバ「ProxSys」、FRONT PORCH DIGITAL社のコンテンツマイグレーションソリューション「SAMMASoloHD」のアーカイブシステムソリューション3製品を展示・紹介していた。



■LTOテープに保存するCache-A社アーカイブアプライアンスを展示

Cache-A社のアーカイブアプライアンスCache-A製品は、Linuxで動作するサーバーで、金融系企業で利用されている高信頼性のLTOテープを使用する。また、RAID0とRAID01に対応したNASとして利用可能な共有HDD、LTOドライブ、MySQLデータベース、コンテンツマイグレーションソリューションが組み込まれている。設置は非常に簡単で、

Magazine

(株)朋栄

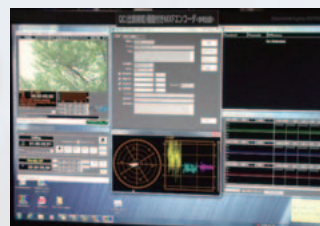
2011.11.18UP

メディアコンシュルジュ/超高速カメラを出展

朋栄は、昨年に引き続き「Continuous Innovation」をテーマとし、次世代のファイルベースソリューションと革新的なベースバンド製品群を数多く展示した。

■ファイルベース関連製品

ファイルベース関連製品では、新機能を追加したメディアマネジメントシステムMediaConcierge、新製品のLTO-5ビデオアーカイブレコーダLTR-120HS、また、NAB Show 2010に出展し、Pick Hit Awardを受賞したLTO-5ビデオアーカイブレコーダLTR-100HS(MPEG-2コーデック対応モデル)、報道支援システム向けMXFクリップサーバMBP-100SX/110SXA/100PD、オンエア映像即時ネット配信システムPrismシステムなどを展示。



Magazine

NTTエレクトロニクス(株)

2011.11.18UP

33msecの超低遅延AVC/H.264 4:2:2対応エンコーダ「HVE9200」とフルHD2系統と3D映像の同期伝送に対応したAVC/H.264エンコーダ「XVE9300」を初出展

NTTエレクトロニクスは、今年米国ラスベガスで開催したNAB SHOW 2011で発表・展示した33msecの超低遅延AVC/H.264 4:2:2対応エンコーダ「HVE9200」とフルHD 2素材同期伝送、3D対応エンコーダ「XVE9300」をInterBEE2011で初公開した。

■遅延時間を1フレームと短縮した超低遅延化したAVC/H.264エンコーダ「HVE9200」を初展示

「HVE9200」は、従来製品の「HV9100シリーズ」の高画質・高性能・高安定性を受け継ぎつつ、低遅延と低ビットレートを強化したAVC/H.264エンコーダである。「HVE9200」の特長は、33msecの超低遅延、低ビットレートでの高画質化、及び低消費電力対応と電源の二重化を実現している。



Magazine

(株)エヌジーシー

2011.11.21UP

「Autodesk Smoke for Mac 2012」を使ったワークフローを紹介

エヌジーシーは、Telestream社のネットワークビデオキャプチャ&エンコーダー「Pipeline」とマルチフォーマットエンコーディングソフトウェア「Episode6」、およびAutodesk社の「Autodesk Smoke for Mac 2012」を出展した。ブースでは、「Pipeline」を使いProRes 422でビデオキャプチャした映像コンテンツをRorke Data社のRAID 6ストレージ「Galaxy Aurora (SAN (Storage Area Network)として利用)」に保存し、「Autodesk Smoke for Mac 2012」にて編集するワークフローを紹介した。



■ビデオキャプチャ中に編集またはトランスコードが可能

Telestream社のネットワークビデオキャプチャ&エンコーダー「Pipeline」は、SD/HDビデオ・オーディオ素材を各種ファイルフォーマットにエンコードするエンコーダ装置で、ネットワークを介してMacまたはPCと接続し、キャプチャ中にメ

Magazine

オタリテック(株)

2011.11.21UP

独り得ル社製「MEDIORNET COMPACT」を出展
リアルタイム光ネットワーク構築用 次世代マルチメディア・ステージボックス

オタリテックは、光ファイバー伝送システム「MediorNet Compact」を出展、また、マルチチャンネル音声/映像信号伝送システム「LWB-16M(監)/LWB-64」用MADIインタフェースモジュールを参考出展した。

■光ファイバー伝送システム「MediorNet Compact」を出展

オタリテックは、RIEDEL(リーデル)社の光ファイバー伝送システム「MediorNet Compact」と次世代ネットワーク規格AVBに準拠したインカム用インタフェースカードを出展した。

「MediorNet」は、映像・音声・インカムを光ファイバーを使い伝送する光伝送システムである。「MediorNet Compact」は、従来のMediorNetに比べ、コストをおさえたシステムとなっている。この機種は「MediorNet Compact Pro」では、2C/H.264



Magazine

InterBEE TV

(株)テクノハウス

2011.11.21UP

プロジェクションマッピングに対応したPandoras Box Media Serverを展覧

テクノハウスは独COOLUX社製メディアサーバー「PANDORAS BOX」を展覧した。プロジェクションマッピングなどで活用され

2005年に愛知万博で用いられている。イベントやデジタルサイネージで幅広く使われている。特徴は1サーバーで最大4outの出力をHD DVIで出力できる。各種の表示デバイスに1つのサーバーから送り出すことができる。それぞればらばらで出力することも可能。出力は1台のPCで管理でき、コントロールしやすい。センサーを利用したインタラクティブな機能も持っており、利用者が自らアプローチして情報を引き出すといったしかけもつることができる。



Magazine

InterBEE TV

逗子・葉山コミュニティ放送

2011.11.21UP

米RCS社製番組自動送出システム「Zetta」を紹介

逗子・葉山コミュニティ放送は湘南地域のコミュニティ放送局「SHONAN BEACH FM」で運用している RCS 社の番組放送自動化システムを展示している。このシステムを使えば、24時間の完全無人運用も可能になるという。ブースの一角では、このシステムを使い、実際に SHONAN BEACH FM の公開生放送を行っている。



■楽曲の選択、編成、配信を自動化

番組放送自動化システムは、楽曲スケジューラ「GSelector」、放送音源自動生成ソフト「Zetta」などで構成される。

あらかじめ楽曲の属性情報やカテゴリを登録しておけば、楽曲の選択、編成、配信までを自動化できる。1時間の音楽番組なら、楽曲の選択から編成までを15秒程度で行えるという。プレイリストトラックを作っておけば、24時間の完全無人運用も可能になるという。

Magazine

InterBEE TV

パナソニック(株)

2011.11.21UP

H.264新コーデックファミリー「AVC ULTRA」を紹介
マスター用高画質からネットワーク用低ビットレートまでカバー

パナソニックグループ(パナソニック株式会社、パナソニック電工株式会社、パナソニックシステムソリューションズジャパン株式会社)は、「Link together Link to the future ~ Evolving AVC-World ~」をコンセプトに出展した。展示ブースでは、放送・プロ映像業界へ向けた新製品のラインナップに加え、ネットワーク対応やシステム連携など新たな「Link(つながり)」を提案。また、新規格のプロ用映像圧縮コーデック新体系「AVC ULTRA」、P2HDシリーズとAVCCAMシリーズ、HDシステム機器の連携で実現する多彩で幅広い活用シーンへの対応などを国内で初披露した。来年開催のロンドンオリンピックで史上初の3D放送をサポート予定の進化した3D映像撮影システムなど、パナソニックの3D HD映像ソリューションも紹介した。



Magazine

InterBEE TV

富士フイルム(株) 光学デバイス事業部

2011.11.21UP

ポータブルタイプのHDTVレンズ「FUJINON HA19×7.4」、
映画用PLマウントレンズ HKシリーズ等を展覧

富士フイルムの光学デバイスコーナーでは高画質化に対応した次世代志向のTVレンズやシネレンズなどを豊富に展示している。なかでも注目はHDTVレンズの新ラインアップ「FUJINON HA19×7.4」。コーナーではこれらのレンズの品質、性能を体感してもらうため、「和」をイメージしたスタジオセットを用意している。



■光学性能が大幅に向上した「FUJINON HA19×7.4」

光学デバイスコーナーの主力展示は、11月下旬より発売を開始するポータブルタイプのHDTVレンズ「FUJINON HA19×7.4」。最先端の光学シミュレーション技術を駆使し、高精度な大口径非球面レンズを採用したレンズ設計とすることで、コンパクトながら高い光学性能を実現した。

Magazine

InterBEE TV

花岡無線電機(株)

2011.11.21UP

残響制御技術を用いたサラウンドエンコーダー「HiFiREVERB ENCODER」を展覧

花岡無線電機は、残響制御技術を用いたサラウンドエンコーダー「HiFiREVERB ENCODER」を展示し、実際のスタジオや放送局での運用イメージを再現したデモンストレーションを行っている。また、仙台放送と共同開発を行っているスポーツ中継などで利用を想定した新感覚ミキシング補助システムも参考出展している。



■実運用を意識したシステム構成で「HiFiREVERB ENCODER」をデモ

花岡無線電機株式会社では、NTT コミュニケーション科学基礎研究所が開発した残響制御技術「Revtrina(レプトリーナ)」をベースに、NTT エレクトロニクスが商品化したオーディオ3D技術「HiFiREVERB(ハイファイリバーブ)」を採用したスタジオ向けの業務用サラウンドエンコーダー「HiFiREVERB ENCODER」を今回 InterBEE にて初展示している。

この「HiFiREVERB ENCODER」は、入力したデジタル/アナログ信号を、

Magazine

InterBEE TV

平和精機工業(株)

2011.11.21UP

無段階カウンターバランスシステムを搭載した三脚「RSシリーズ」などを展覧

平和精機工業は「Libec」ブランドの三脚、ジブアーム、トラッキングレール、アクセサリサポートキットなどを展示している。なかでも注目は、どんなティルト角度でもカメラを静止させることができる三脚の新シリーズ「RSシリーズ」である。



■あらゆるティルト角度に対応し静止状態を保持する「RSシリーズ」

RSシリーズに採用されているのは、無段階カウンターバランスシステム。一定の搭載重量範囲内であれば、撮影時のティルト角度を保ったままカメラを静止させることが可能。上向き、下向きのカメラアングルのまま放置しても、その状態を保持できる(ティルト角度+90度/-70度)。

また新設計のトルクシステムに加え、高品質なシリコングリースを採用。パン、ティルト、ロールの操作性が大幅に向上している。「特にパンの動き出しは非常にスムーズに動作する」と好評だ。



デジタルで変わる放送の枠組み
コミュニティとの連携を強調。

フリージャーナリスト
ニュースキャスター
逗子・葉山コミュニティ放送株式会社 代表
ホワイトスペース推進会議 メンバー
(有)木村太郎事務所 代表

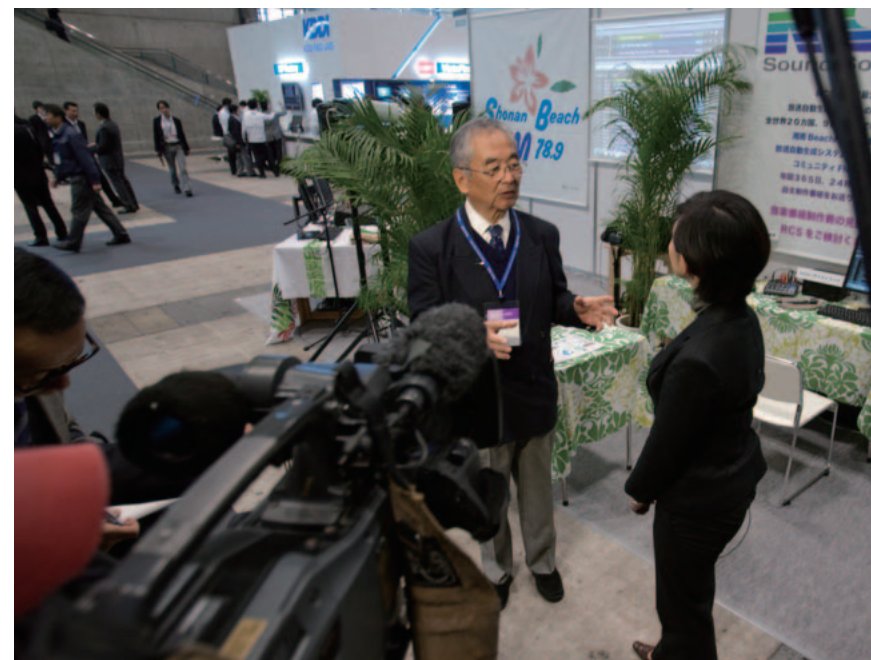
木村 太郎氏



豊富な経験を生かし 新時代の放送の「あり方」を提言

NHKの記者、メインキャスター時代から、報道の現場で活躍し、その後もフリーのジャーナリストとしてメディアの最前線に携わる木村太郎氏。マスメディアでの活動とともに、インターネットや新しい放送への関心も高く、自身でもコミュニティ放送 湘南ビーチFMの代表を務める。また、デジタル放送の新しい枠組みの中で、未使用となっている放送波の周波数の有効活用を検討しているホワイトスペース推進会議のメンバーでもあり、新しい放送のあり方についての提言を行う。

ホワイトスペース推進会議は、デジタル技術の進歩でこれまでよりも狭い帯域でデジタル放送が可能になることにより、空いた電波帯域(=ホワイトスペース)を有効活用するための検討会議。限られた資源である電波を有効に活用するための検討が進められている。ホワイトスペース推進会議のメンバーである木村太郎氏に放送の新しい方向性と、Inter BEEの役割についての考えを聞いた。



爆発的に拡大する電波利用 災害利用も含め新たな枠組み構築へ

■ホワイトスペース推進会議が Inter BEEに出展。

「ホワイトスペースは、隣接する周波数帯の放送波同士の干渉を防ぐために設けた周波数帯、すなわちガードバンドを、新しい技術で干渉しない形で活用しようというもの。ごく狭い地域に限定した放送に活用しようとする試みだ。ホワイトスペース推進会議がInter BEEに出展するのは今年で2回目になる。昨年はまず、ホワイトスペースという言葉を広く知ってもらうためのものであったが、今年は、実証実験を経てさまざまなホワイトスペースの活用方法を具体的に紹介することができた」

「東日本大震災の際には、南相馬市においてホワイトスペースを使った放送が行われ、被災地に有益な情報を発信し、災害時におけるコミュニティ放送の有用性が注目された。ラジオを含めたさまざまなメディアとの組み合わせによって、新しい放送がコミュニティの情報発信の道具として利用される動きが活発化している」

■完全デジタル移行後の 電波利用について。

「2011年7月24日に地上波放送のアナログ放送が東北3県を除いて停波となり、デジタル放送が本格化した。これによって、デジタルテレビ放送がこれまでのUHF放送の帯域に移行し、アナログテレビで用いられていたVHF放送の帯域で新しい放送が試みられようとしている。これは、放送のあり方をがらりと変えるものだ。テレビだけではなく、ラジオも変わる」

「一方では、スマートフォンなど端末の多様化により、様々な新サービス・新ビジネスが普及し、ユーザーの利便性が向

上し、さらにAV機器、ゲーム機などのデジタル家電のワイヤレスネットワーク接続が増加している。また、携帯電話の普及により、誰でも簡単にネットワークにつながる時代が本格的にやってきた」

「今後、ますます携帯電話や無線を利用したリッチコンテンツの流通や利用が増大する中で、2020年までに電波利用の質・量が爆発的に拡大し、トラヒックは200倍以上になるという予測もある。V-High帯およびV-Low帯の活用は、アナログ放送停波による空いた周波数帯をその電波利用の拡大に活用しようとする試みだ。V-Low帯は、コミュニティ放送も行われるようになっており、これによってこれまで考えられなかった新しいラジオの使い方が生まれるだろう」

デジタル・コミュニティ放送の実証実験を実施

■東日本大震災での教訓が新しいコミュニティ放送の形づくりに生かされると期待しているのか。



「まさにそうだ。震災時に用いられた防災行政無線による緊急避難の放送は、多くの人に避難を促し、命を救うことになったが、その放送の拠点までもが被災し、南三陸町の遠藤未希さんのように犠牲になられたかたもいらっしゃる。その勇氣には全国から賞賛の声がよせられたが、新婚早々の若妻が犠牲にならなければならなかったことはあまりにも悲しいことだ」

「また、スピーカーで緊急の情報を伝える防災行政無線は、建物や山などに反響することで声が聞き取りにくい。総務省

は、今回の大災害を機に、防災行政無線を補完する機能を備えた「安心・安全のためのラジオ」という方向性を打ち出している。コミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス(CSRA)は、この方向性に沿う形で、相模湾をモデルにデジタル・コミュニティ放送の可能性を探るため実証実験を行う。有事の際に自動的にスイッチが起動し、情報を伝えるブッシュ型の受信端末を用いて、緊急放送の内容を受信機のパネルに文字で表示することで、耳の不自由な人や、内容を聞き逃した人が情報を確認できるようにする」

「災害の発生時だけでなく、その後の避難指示や避難所への案内、さらには食糧の配布や給水車の案内など、地域に求められる情報を音声と画面で、きめ細かく提供できることを考えている。実験では、デジタル電波の伝わり方や、どのような条件で自動的にラジオが起動するかなど技術的な問題を検証すると同時に、その緊急情報はどのようなチャンネルを通じて伝えられ、誰が主体的に自動起動のスイッチを入れるのかなど運用上の課題も検証し、行政機関と共に制度化を目指す。南海トラフ沿いにおける巨大地震や関東直下型地震はいつ起きてもおかしくないとされる。その被害を最小限に食い止めるためにも、デジタル・コミュニティ放送の完成を急ぎたい」

放送の変革期 Inter BEE への期待も高まる

■今後のInter BEEにはどのような期待をされているか。

「デジタル化はこれからの放送を大きく変えることになる。これまでの放送の枠がなくなり、インターネットやさまざまなメディアとの結びつきが可能になる。こうした新しい動きを支えるための機器が次々と登場し、新しいメーカーも参入している状況が、今回のInter BEEで見られた。また、Inter BEEは、新しいメーカーとどうやって連携していくか、新しい機材をどのように活用していくかを考え、新しい放送のあり方を探る機会となっており、注目している」

「また、セッションなどによって海外からの放送関係者の意見を聞くことで、海外の放送の状況や、日本の放送技術が世界の中で占める位置についても知ることができる重要な機会だと考えている。放送をはじめとしたメディアにおいても、デジタル化によってグローバル化の流れが加速している。Inter BEEは、現状の放送業務を見つめる新たな視点を得る場として、今後も多様な情報を提供してくれることを期待している」





「絆」をテーマに
ダンスと照明、映像システムが共演
初のスペシャルライブステージ

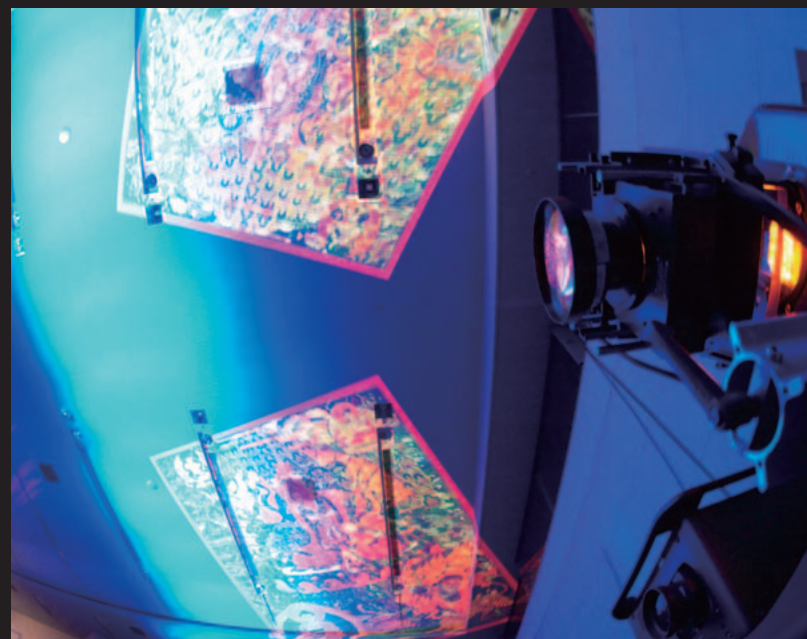
株式会社 NHK アート 取締役

国重 静司 氏



壮麗なジャズダンスと 光の芸術が一体化

Inter BEE 最大の催しの一つ「Inter BEE Content Forum」は、最先端の映像・音響機器がもたらす新しいコンテンツ制作の現状と方向性について、毎年、現場の第一人者を招いて紹介している。大会2日目に開催した「Inter BEE Content Forum 映像シンポジウム」では、初の試みとして、実際のパフォーマンスをステージ上で行う「スペシャルライブステージ」を開催。日本のジャズダンス界の第一人者、宮崎渥巳氏の振り付けによるジャズダンスと、プロジェクションマッピングイメージ、ライティングエフェクトとのコラボレーションにより、東日本大震災の復興を祈念する「絆」をテーマに、ステージ狭しと創造的な空間表現が実演された。



映像機器の進化は、テレビや映画のみならず、舞台やステージなど、観客と同一の空間で展開するライブステージにおいても大きな影響をもたらしている。今回の「スペシャルライブステージ」では、最新技術を駆使した空間表現の効果について、会場内に最新機材を配して実証しようという、これまでにない意欲的な試みがなされた。壮麗なジャズダンスと、光と映像が織りなすパフォーマンスは、ステージパフォーマンスにおける新たな時代の到来を示唆するものであった。まったく新しい空間表現を実現したのは、最先端の機材とともに、熟練のエンジニアと、豊富な機材におぼれることなくステージ上のジャズダンスを生かし、メッセージを伝えるようとした演出家の念力がもたらしたものである。

今回のスペシャルライブステージでは、30社以上の企業の協力により、最先端の照明機器、映像システムが一堂に会した。これによって、一流のジャズダンスと最新照明機器、映像システムとの共演が行われるという、おそらくは世界でも過去に例のない試みを実現した。50台を超えるスポットライトに加え、32台のムービングライト、さらには3台の高性能デジタルプロジェクターと1台のフィルムプロジェクターという、圧倒的ともいえる照明器具、投影機材がメインステージに向けられた。これらをコントロールするための10台近いディマー（調光器）と、4台もの大型コンソールが居並ぶバックステージの威容は、まるでSFに出てくる巨大宇宙船のコックピットを連想させた。

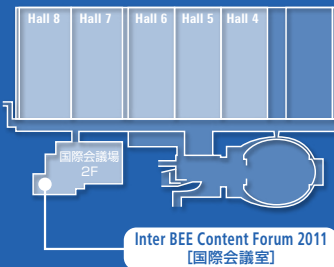
巨大宇宙船のコックピットを思わせるコンソールから繰り出される光と映像が投影されるステージ上では、「絆」をテーマに、東日本大震災からの復興をイメージしたジャズダンスが繰り上げられた。舞台上に投影された照明とNHKアートが制作したCG映像は、天井面を含めたステージ全体に投影され、舞台空間が爆発的に拡大したかと思わせるほどの威力を發揮した。舞台上では、ジャズダンスとテンポのあった照明・映像の効果によって、ステージ上のダンサーが重力から解放されて浮き上がっているような錯覚をおぼえさせた。

映像シンポジウムの企画を担当した、NHKアート取締役の國重静司氏は、今回のねらいについて次のように話す。

「今回、映像シンポジウムとしては初めて、ステージにフォーカスをおいた。そのねらいは、Inter BEEの主な来場者である放送関係者や映像制作会社のアーティストの方々に対して、リアルな舞台やステージの空間の中でも映像や照明を生かした表現が可能であるということを知ってもらいたかった」

また、「映像投影機器や照明機器、ネットワーク機器の進歩により、映像の高いクオリティが生かせる時代が来ている。映像が舞台やステージなどでも活用されるようになる。今回はその試金石となった」と述べ、Inter BEEの「映像シンポジウム」において、新たな映像の可能性を広げる試みに今後も意欲を示した。





Inter BEE Content Forum 2011

会場：国際会議場2階 国際会議室
 企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

次世代のコンテンツ ~信頼と創造~

国内外から映像・音響各分野で活躍する第一人者をプレゼンターに迎え、ユーザー・エクスペリエンスによって変わるコンテンツビジネスの最新動向を議論しました。

11/16 (水) 11:00~12:00 ◆基調講演

『放送の未来を強化する強い協力関係』

ゴードン スミス 氏 全米放送事業者協会 The National Association of Broadcasters (NAB) 会長



『豊かで安心、たしかな未来へ』

永井 研二 氏 日本放送協会 専務理事・技師長

11/16 (水) 13:00~14:30 ◆招待講演①

『地上デジタル放送における日本とブラジルのコラボレーション~現状と将来~』

マルセロ ズッフオ 氏 サンパウロ大学 教授
 アンテノール コレア 氏 ブラジル科学技術省IT担当 ジェネラル コーディネイタ



『ISDT-TB技術のバックグラウンド』

ライザ・カロリニ・コスタ・デ・ビアジ 氏 サンパウロ大学 工学部 博士課程

11/16 (水) 17:00~18:00 ◆招待講演②

『Content Forum Special Session ~拡がる映像制作の可能性、そして未来~』

ギャレス・エドワーズ 氏 映画監督:「Monsters」(2010)そして2012年「Godzilla」を製作開始
 ジム・ジェラルド 氏 アドビスシステムズ社 ダイナミックメディア担当ジェネラルVP
 久保 浩章 氏 株式会社フラッグ 代表取締役
 村上 公一 氏 株式会社ロボット 映画部プロデューサー

●モデレータ
 古田 正剛 氏 アドビスシステムズ株式会社 マーケティング本部



先進的ライブイメージング ライティングとプロジェクションマッピングのコラボレーション

有料

本格的デジタル時代を迎え、放送や映画メディアに加え、伝統的な舞台芸術をはじめとするリアル空間において、照明とのコラボを含めた、新たな臨場感の演出を可能とする環境が整いつつあります。この映像表現の具現化には、映像・照明・プロジェクター、ネットワーク等を連携させた技術が重要な役割を果たします。



11/17 (木) 13:00~17:00 ◆映像シンポジウム

『臨場感あふれるリアル・ライブ空間の創生 ~照明・映像・多視点裸眼立体コンテンツの可能性~』

- プレゼンター
 佐藤 壽晃 氏 株式会社セレブレーション・オブ・ザ・ライツ 劇場コンサルティング / 舞台照明デザイン
 宇佐美 浩一 氏 株式会社マイルランテック 代表取締役
 松本 卓也 氏 T601株式会社 取締役
 岩澤 昭一郎 氏 独立行政法人情報通信研究機構 (NICT) ユニバーサルコミュニケーション研究所 超臨場感映像研究室 専攻研究員 博士(工学)

- 司会・進行
 為ヶ谷 秀一 氏 女子美術大学 大学院 教授
 国重 静司 氏 株式会社NHKアート 取締役

高品質なプロジェクションマッピング・ライティング表現技術による創造的な空間表現

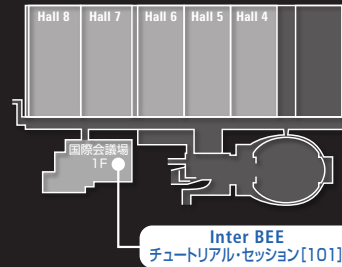
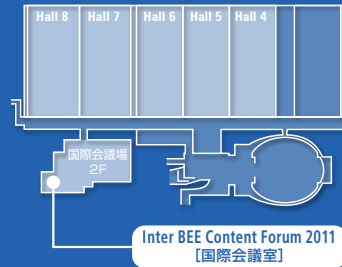


日本のジャズダンス界の第一人者、宮崎渥巳氏の振り付けによる、東日本大震災の復興を祈念する「絆」をテーマにしたジャズダンス・ステージ空間を、高品質なプロジェクションマッピングイメージとライティングエフェクトのコラボレーションにより創生しました。

■スペシャルライブステージ

『Dance Collaboration “絆(Kizuna)”』

- 振付
 宮崎 渥巳 氏 一般社団法人 日本ジャズダンス芸術協会 理事長



コンサート、イベント、クラブ、そして劇場に デジタルで広がる新しいライブサウンドの世界！

有料

音楽や放送、映画産業に比べ普及が遅れていたLIVE SOUND PAにも急速にデジタル技術が導入され始めました。それはデジタル化によって、設備労力の効率化が進み、ミキシングデータの迅速な再現・PA音質の改善・PA音場の科学的な構築等が可能になるからです。つまり、レコーディングや配信、放送といったメディアの融合が大きく変化し、またこれまで会場ごとに経験と勘だけを重視し、人力中心で設営してきたワークフローを大きく変化させることができるのです。本シンポジウムではPAのデジタル技術の最前線を取り上げ、運用の実際や課題等を議論しました。

11/18 (金) 13:00~16:00 ◆音響シンポジウム

『Live Soundのデジタル構築～その運用と実際』

- プレゼンター
 - 日比野 真 氏
ヤマハ株式会社 PA事業部 マーケティング部 CA国内マーケティンググループ プロダクトスペシャリスト
 - 庄 健治 氏
公益財団法人可児市文化芸術振興財団 舞台技術課 音響主任
 - 伊藤 岳雄 氏
株式会社サウンドプロジェクト 代表取締役
 - 足達 仁志 氏
株式会社エムエスアイジャパン東京 大阪支社 サウンドエンジニア
 - 武井 一雄 氏
有限会社パブリックアドレス 代表取締役



- 司会・進行
 - 沢口 真生 氏
沢口音楽工房 サラウンド寺子屋塾 代表 Fellow AES/IBS
 - 亀川 徹 氏
東京芸術大学 音楽学部 音楽環境創造科 教授

シンポジウム終了後、 最新のPAデジタル関連機器を 会場内に展示しました。

最新PAデジタル機器展示

【機材提供】
オタリテック株式会社、音響特機株式会社、
株式会社シンタックスジャパン、OTCグループ・ジャパン株式会社、
ベストックオーディオ株式会社、
ヤマハ株式会社、ローランド株式会社



Inter BEE チュートリアルセッション 有料

会場：国際会議場1階 101会議室
企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

放送業界、映像・音響業界で働く若手、さらにこれらの分野に関心を持っている大学、専門学校の学生などを対象に、第一線で活躍する講師陣が、最先端技術動向、最新機器・システムの活用法、コンテンツ制作手法などを伝授しました。今後の業界の発展に向け、後進人材の育成に寄与しています。

11/17 (木) ◆音響セッション

現場で役立つ音響制作技術者のための基礎知識

■セッションA 13:00~14:30

『ラウドネスメータの使いこなし～ラウドネス・コントロール実践講座』

- 入交 英雄 氏
株式会社毎日放送 放送運営局 送出部 マネージャー
- 南澤 貞巳 氏
株式会社東陽テクニカ マルチメディア計測部 主任

■セッションB 15:00~16:30

『デジタルワイヤレスマイクの原理と応用』

- 宮前 真二 氏
株式会社タムラ製作所 ブロードコム事業部 技術統括部 開発3グループ リーダー



11/18 (金) ◆映像セッション

現場で役立つ映像制作技術者のための基礎知識

■セッションC 13:00~14:30

『舞台照明および映像表現に必要なネットワーク技術の基礎と実践(実演を含む)』

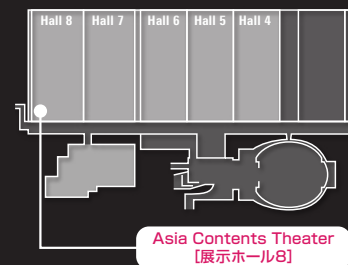
- 宇佐美 浩一 氏
株式会社マイルランテック 代表取締役

■セッションD 15:00~16:30

『ライブ映像配信技術の基礎と具体的事例』

- 田尻 哲男 氏
NTTエレクトロニクス株式会社
デジタル映像事業本部 マルチメディア事業部 商品設計部 部長





Asia Contents Forum Powered by DigiCon6

会場: 展示ホール8 Asia Contents Theater
 特別協力: TBS DigiCon6 協賛: アドビシステムズ(株)

近年成長著しいアジア市場において、コンテンツ市場は新しいフェーズに入り始めています。最新テクノロジーを駆使した、より斬新で魅力的な作品を創造するクリエイターを応援するために、Asia Contents Forumでは、TBS DigiCon6の特別協力、アドビシステムズ(株)から協賛いただき、アジアのトップクリエイターのトークセッションや、アジアクリエイター作品の紹介、各種コンテンツ制作のワークフローをデモンストレーションしました。

11/17(木) DigiCon6 トップクリエイターセッション

TBSが「クリエイターの発掘と育成」を目的として2000年にスタートし、現在、アジア10地域で開催されている「TBS DigiCon6 Awards」とコラボレーション。地域の最優秀賞受賞者に輝いた才能あふれる若手クリエイターによる自身の作品と共に、コンテンツ制作環境について語っていただきました。今回は招待講演として、シンガポール最大手日刊新聞『The Straits Times』に毎週テクノロジー・マガジンを掲載している『Digital Life』の共同設立編集長として活躍するGrace Chng Kooi Eng氏、低予算で製作し興行的に大成功を収めた映画「モンスターズ/地球外生命体」の監督であるGareth Edwards氏、台湾アニメーション業界で長年活躍し、台湾動漫創作協会会長でもある鄧有立氏による講演を「5年後を見据えたアジアのコンテンツ市場」をテーマに行いました。

- 司会 古谷 有美氏 TBSアナウンサー
- モデレーター 結城 崇史氏 Asia Contents Forum ディレクター

11:00~11:45 ◆招待講演① Ms. Grace Chng Kooi Eng

13:30~14:15 ◆招待講演② Mr. Gareth Edwards

16:00~16:45 ◆招待講演③ 鄧有立氏



Ms. Grace Chng Kooi Eng Mr. Gareth Edwards 鄧有立氏

11/17(木) 11:45-12:15 / 14:15-14:45 / 16:45-17:15 第13回TBS DigiCon6 優秀作品紹介 (DigiCon6 Asian Creators' Talk)

リージョナルアワード最優秀賞受賞者または関係者が来日し、作品紹介および現地のコンテンツ制作に関して発表しました。

- | | |
|-------------------------------|--|
| Mr. Gao Siyang(中国) | Mr. Kristan Gabriel Z. Villalon(フィリピン) |
| Mr. Lee Chin(香港) | Mr. Hillary Yeo Tze Ann(シンガポール) |
| Ms. Lavanya Naidu(インド) | Mr. Wu Hua-Lun(台湾) |
| Mr. Tariq Bin Mohd Noh(マレーシア) | Mr. Kutalad Nattaphana(タイ) |



11/16(水) 10:30-12:00

南相馬チャンネルの北陸での映像提供実験と今後の全国展開に関するシンポジウム ~全国に避難している被災者への情報提供モデルの構築に向けて~

主催: 南相馬市、(株)ヨーズマー、(株)TBSテレビ
 後援: 北陸総合通信局、東北総合通信局、「南相馬チャンネル」北陸地域映像提供実験支援協議会、南砺市、西日本電信電話(株)、パナソニックシステムソリューションズジャパン(株)、(株)アクトビラ

福島県南相馬市は、市内にある実験放送局「南相馬チャンネル」の映像をインターネットによりデジタルテレビやパソコンに提供する実験を北陸地域に避難している市民を対象に9月から実施しています。本シンポジウムは、映像提供実験の成果を踏まえ、南相馬チャンネルを全国に展開するための課題の解決策をさぐるとともに、広く支援と協力を呼び掛けることを目的として開催しました。

- 10:30 主催者挨拶 桜井 勝延氏 南相馬市長
- 10:35 来賓挨拶 森田 高 総務大臣政務官
- 10:40 南相馬チャンネル映像提供実験概要説明 野口 高志 (株)ヨーズマー 代表取締役
- 11:00~12:00 パネルディスカッション
 「南相馬チャンネルから東日本復興チャンネルへの全国展開に向けて」

- コーディネーター 三友 仁志氏 早稲田大学 教授
- パネラー 村上 輝康氏 (株)野村総合研究所 シニア・フェロー
 田中 幹夫氏 南砺市長
 佐藤 祐一氏 南相馬市総務企画部情報政策課長
 齊藤 一雅氏 北陸総合通信局長(「南相馬チャンネル」北陸地域映像提供実験支援協議会会長)
 野口 高志氏 (株)ヨーズマー 代表取締役
 本間 康文氏 (株)TBSテレビ 技術局担当局長



11/16(水) 15:30-17:00 Asia Contents Forum 特別セッション 「坂の上の雲」のクリエイターが語るこれからのコンテンツ制作への提言

- スピーカー
- モデレータ



スペシャルドラマ「坂の上の雲」
 第3部 チーフ演出
 加藤 拓氏



スペシャルドラマ「坂の上の雲」
 タイトルバックデザイナー
 ※NTTドコモ Web CM「森の木琴」監督
 ※ドローイングアンドマニュアル株式会社
 ファウンダー・映像作家
 菱川 勢一氏



スペシャルドラマ「坂の上の雲」
 VFXプロデューサー/ラインプロデューサー
 ※Inter BEE Asia Contents Forumディレクター
 結城 崇史氏



11/16(水) 13:30-14:30 Asia Content Forum Adobe CS 5.5 Production Premium ProVideoセッション 「クリエイティブとビジネスの幸せな融合」こそが映像業界の進むべき道

~株式会社フラッグが考えるこれからの映像制作とは?~

2001年、映像業界の経験がないまま2人で創業した株式会社フラッグは、映像制作業界の中ではかなり特異な存在でした。しかし、コンテンツ業界の変革の「旗手」として先頭を走り続け、創業10年で80人余りのスタッフを擁するようになり、JR東日本トレンチャンネルでの番組や、アジアの著名な広告賞Asia Spikes金賞を受賞するCMを制作するなど、目覚ましい成長を遂げています。また、クリエイターの人材流出が少ないことも株式会社フラッグの特徴の一つであり、これも映像制作業界では希少な存在といえます。このセッションでは、代表取締役 久保浩章氏をゲストに迎え、同社の成功の背景にあるものを、Adobe CS5.5 Production Premiumの活用を交えながらお話を伺いました。

11/18(金) 13:30-15:00 Asia Content Forum Adobe CS 5.5 Production Premium ProVideoセッション 「スタジオカラー『メウ pair*』PVメイキング」~3DCG時代のアニメ撮影ワークフロー~

庵野秀明氏が代表を務める株式会社カラーとAdobe Pro Video Reseller 株式会社Tooによるユーザー事例セッションです。株式会社カラーのCG制作、デジタルでの撮影/コンポジット/エフェクト等を担うデジタル部 CGI監督 小林浩康様、撮影監督 福澤瞳様に登壇いただき、先ごろリリースされたフルCGアニメーション作品、ヴァーチャルアイドル「メウ」のシングル「pair*」のPVのメイキングを中心にAdobe CS 5.5での3Dソフトとの連携や実写動画素材を活用した制作エピソードなどをお話いただきました。



特別シンポジウム

11月17日(木) 10:30-12:00

国際会議場2F コンベンションホールA
主催：防災デジタル・コミュニティラジオ連絡会

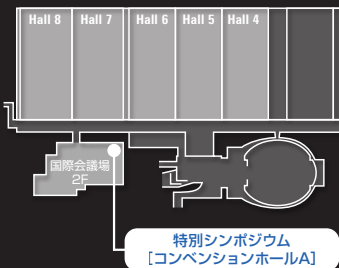
東日本大震災の教訓と新しい防災ラジオの登場

～その時市民は何を求めたか？
そして、V-Lowデジタル・コミュニティラジオへの期待～

- テーマⅠ 発災時を振り返る
- テーマⅡ 臨時災害局の立ち上げと現状
- テーマⅢ 教訓として何が浮かび上がってくるか。
- テーマⅣ V-Lowデジタル・コミュニティラジオの方向性について

コミュニティ放送局がインターネット配信を行っているサイトのコミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス (CSRA) では、東日本大震災発災の1カ月後から臨時災害FM放送局ならびに災害対応局 (甚大な被害がある地域のコミュニティ放送局) にサイマルラジオのシステムを提供してまいりました。その際、当該地では「情報が欲しかった」という声をたくさん聞きました。東日本大震災は、電気、ガス、水道の3大ライフラインに加えて、「情報」の重要性が痛感させられた震災でもありました。一方、地上アナログ放送が、デジタルに移行し、空いた周波数の内、アナログTV1ch～3chをV-Lowと称し、音声を中心とした新しいV-Lowマルチメディア放送の創出ということで、これまで検討がなされて参りました。災害が発生した時に、住民に届けなければならない「情報」はどうであったのか！そして、住民にどのようにしたら「情報」はとどくのか！V-Lowラジオが災害時に対応するということを柱にするのであれば、どのようなラジオである必要があるのか！を模索しました。被災地から、宮城県名取市佐々木一十郎市長・名取臨時災害FM局 統括 若生毅弘氏 (株) いわき市民コミュニティ放送 パーソナリティ 坂本美知子氏を迎え、木村太郎氏とともに3月11日を振り返り、行政と臨時災害局との連携など『声』を届けるために何が必要なかを模索しました。

- パネリスト
 - 木村 太郎 氏
亶子・葉山コミュニティ放送 代表取締役/CSRA 代表
 - 若生 毅弘 氏
名取臨時災害FM 統括
 - 佐々木 一十郎 氏
名取市 市長
 - 坂本 美知子 氏
(株)いわき市民コミュニティ放送 パーソナリティ
- 司会・進行
 - 伊藤 恵 氏
コミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス (CSRA) 事務局局長



第48回 民放技術報告会

11/16(水)		11/18(金)	
◆制作技術部門	第1会場 [301]	◆制作技術部門	第2会場 [302]
10:30	超解像技術を用いた画質向上の解析と検討 日本テレビ放送網 技術統括局制作技術センターコンテンツ技術運用部 鈴木 寿晃 氏	10:30	タッチパネルモニタを用いた 安価での電子フリックへの取り組み TBSテレビ 技術局CG部 安田 英史 氏
10:55	パターン認識を用いたテロップ抽出システムの開発 TBSテレビ 技術局送出部 中村 全希 氏	10:55	低遅延送り返しシステム「Live Back」の開発 TBSテレビ 技術局技術推進部 國分 和輝 氏
11:20	航空機離着陸、自動追尾撮影システム TBSテレビ 技術局技術推進部 山口 彰 氏	11:20	地上デジタル放送用 可搬型小型ACレシーバの開発と検証 日本テレビ放送網 技術統括局放送技術センター回線運用部 高橋 宏和 氏
11:45	テレビ東京 競馬テロップシステムの更新 テレビ東京 技術局映像技術部 鶴岡 秀展 氏	11:45	関西テレビ放送 新型HDヘリコプターの 防振カメラ追尾システム・伝送プロファイル表示システム 関西テレビ放送 制作技術局報道技術部 高島 祥亮 氏
13:00	次世代ウェザーシステム構築と運用 テレビ朝日 技術局制作技術センター兼コーポレートデザインセンター 胡子 裕之 氏	13:00	LEDブロードライトの開発 関西テレビ放送 制作技術局報道技術部 金子 宗央 氏
13:25	気象キャスター端末システム 関西テレビ放送 制作技術局報道技術部 青木 満 氏	13:25	LEDロケーションライト「DOCAST LSA」の開発 テレビ朝日 技術局制作技術センター照明グループ 小松 武久 氏
13:50	「選挙Station 2010」関西ローカル枠における タッチパネル演出とバーチャルCG 朝日放送 技術局制作技術センター報道技術グループ 長谷川 将宏 氏	13:50	制作スタジオ照明設備更新 鹿児島テレビ放送 技術局技術部 川本 隆一郎 氏
◆データ放送・デジタルサービス部門 第1会場 [301]		◆送信部門 第2会場 [302]	
14:40	視聴者参加型データ放送サービス 「近畿のみなでソラをライブ」システムの構築 朝日放送 技術局開発部 渡辺 謙介 氏	14:15	ユニバーサルプレーヤーの開発 日本テレビ放送網 技術統括局技術戦略センター技術開発部 菊地 秀彦 氏
15:05	ドラマ「ピースボート-Piece Vote-」における オーバーレイTVメッセージ 日本テレビ放送網 技術統括局制作技術センターコンテンツ技術運用部 篠田 貴之 氏	14:40	オフライン編集用デジタルシステム構築 テレビ朝日 技術局システム推進部 堀淵 悠一郎 氏
15:30	次世代EPGの開発 ～第一弾 トレンド分析～ 日本テレビ放送網 技術統括局制作技術センターコンテンツ技術運用部 技術戦略センター技術開発部 石島 健一郎 氏	◆制作技術部門 第1会場 [301]	
15:55	PMT追従型データ放送MUXの開発 北日本放送 放送本部技術局技術部 山本 憲一郎 氏	10:30	ヘリコプターにおける地上デジタル放送受信状況の調査 日本テレビ放送網 技術統括局技術戦略センター技術開発部 川上 皓平 氏
16:20	サーバ仮想化技術の放送機器への適用(サーバ編) 日本テレビ放送網 制作技術センターコンテンツ技術運用部 中曾根 貴良 氏	10:55	地上デジタル放送の簡易測定・監視装置の開発 日本テレビ放送網 技術統括局放送技術センター回線運用部 富山 俊一郎 氏
◆制作技術部門 第2会場 [302]		11:20	地デジ放送波監視装置の開発と運用 東北放送 技術局技術管理部 早坂 紀彦 氏
10:15	新報道NVシステム「F-BINUS」の開発～概要・プレビュー編～ フジテレビジョン 技術局制作技術センター報道技術部 西川 寛 氏	11:45	ミニサテ用小型CN監視装置の開発 山口放送 技術局技術部 恵良 勝治 氏
10:40	新報道NVシステム「F-BINUS」の開発～収録・編集編～ フジテレビジョン 技術局制作技術センター報道技術部 日置 健太郎 氏	13:00	Androidプログラミングによる、 現地での電界強度計算値の算出 北陸放送 技術局技術部 穴太 健介 氏
11:05	新報道NVシステム「F-BINUS」の開発～送出・送出支援編～ フジテレビジョン 技術局制作技術センター報道技術部 青木 一浩 氏	13:25	DTV-STL無誤断自動切替器実現への取り組み 朝日放送 技術局技術管理部 津高 仁志 氏
11:30	4FSK連絡無線方式無線機実証実験の報告 フジテレビジョン 技術開発局技術開発室開発推進部 森本 聡 氏	13:50	TTL受信レベルによる入力切替制御装置の開発 中国放送 梶田 清志 氏
◆回線・伝送部門 第3会場 [303]		14:40	山岳折折によるSD長距離スパン放送波中継の検証 サンテレビジョン 技術局 小畑 泰寛 氏
10:15	遠空FPU受信基地局デジタルTTL回線の構築 TBSテレビ 技術局回線部 片山 敦史 氏	15:05	地上デジタルテレビチャンネル設定支援アダプターの開発 北海道放送 技術局技術担当 佐藤 孝文 氏
10:40	TSL回線受信電力(フェージング発生状況) 監視システムの開発 TBSテレビ 技術局回線部 穴澤 毅 氏	◆送信部門 第3会場 [303]	
11:05	高速ファイル転送アプリケーション「STORM」の開発 TBSテレビ 技術局技術推進部 國分 和輝 氏	10:30	ADESS選報システムのHD化 日本テレビ放送網 メディア戦略局IT推進部 内山 博之 氏
11:30	モバイル回線を複数使用した可搬型伝送システムの開発 読売テレビ放送 放送運営局 松田 慎一郎 氏	10:55	映像系ネットワークインフラ構築 「素材共有、マスター納品、セキュリティ維持の三本柱」 WOWOW 技術局送出技術部 坂井 卓広 氏
◆回線・伝送部門 第3会場 [303]		11:20	仮想ファイルサーバによる、ファイルライフサイクルの実現 朝日放送 技術局情報システム部 砂川 保史 氏
10:15	遠空FPU受信基地局デジタルTTL回線の構築 TBSテレビ 技術局回線部 片山 敦史 氏	13:00	世界水泳2011における 競技データ提供システムの構築と運用 テレビ朝日 技術局コーポレートデザインセンター 中村 敦 氏
10:40	TSL回線受信電力(フェージング発生状況) 監視システムの開発 TBSテレビ 技術局回線部 穴澤 毅 氏	13:25	PKI認証基盤の更新とリモートアクセス環境の強化 テレビ朝日 技術局システム推進部 阪田 浩司 氏
11:05	高速ファイル転送アプリケーション「STORM」の開発 TBSテレビ 技術局技術推進部 國分 和輝 氏	13:50	仮想化技術を用いた業務系システム基盤の更新 テレビ朝日 技術局システム推進部 高柳 英晃 氏
11:30	モバイル回線を複数使用した可搬型伝送システムの開発 読売テレビ放送 放送運営局 松田 慎一郎 氏	◆情報・ネットワーク部門 第3会場 [303]	

11/17(木) 13:30-16:00 第1会場 [301]
【特別企画】「検証!! 東日本大震災と放送技術」～地震発生から数日間を検証し、何に備え何をすべきか?～

今年3月11日に発生した東日本大震災は、近年の歴史にはない未曾有の大惨事となった。局舎や放送設備に甚大な被害を受けながらも放送を維持し、取材活動を行った被災地テレビ、ラジオ局は、津波に呑み込まれた町や倒壊した建物、被災した人々の様子を全国に報道し、地元へ災害情報や安否情報を発信し続けた。本特別企画では、地震発生から数日間、放送局の対応を技術的な視点から検証し、その問題点や課題を共有することで、今後我々はどういった備えをし、何をしなければならぬのかを、その間に携わった方々をパネリストに迎え、ディスカッションしました。

- コーディネータ テレビ東京 技術局 次長 不二 俊典 氏
- パネリスト
 - IBC若手放送 放送本部編成局技術部 専任部長 若林 高行 氏
 - 東日本放送 技術局技術部 課長 工藤 浩幸 氏
 - 福岡中央テレビ 技術局長 技術部長 松本 達夫 氏
 - フジテレビジョン 技術局制作技術センター 報道技術部 副部長 西川 寛 氏
 - エフエム東京 編成制作局技術部 高崎 了輔 氏
 - 読売テレビ放送 技術局制作技術部 高田 裕都 氏



ラウドネスサミット東京

会場：【シンポジウム】国際会議場2階 国際会議室
 【ワークショップ】展示ホール4 プロオーディオ部門内 ワークショップ会場
 企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

◆ラウドネス・シンポジウム

ラウドネス・シンポジウムでは、ARIB TR-B32「デジタルテレビ放送番組におけるラウドネス運用規定」策定に向けた経緯と、民放連T032「テレビ放送における音声レベル運用規準」のご紹介を中心にお届けしました。
 ラウドネス・シンポジウムでは、ラウドネス運用規定策定の経緯や、民放連のラウドネス運用、なぜ今ラウドネスなのかなどラウドネス全般の概要について解説されました。
 もっと詳細なラウドネスメータの使い方やノウハウについては併催のワークショップで解説されました。
 ワークショップ会場は、展示会場内のラウドネスゾーンの一部にあり、色々なメーカー展示と合わせて体験することで、より一層の理解を深めていただきました。

●プログラム

11/16(水) 15:00~16:30 国際会議場2F 国際会議室
11/17(木) 10:30~12:00 国際会議場1F 101会議室
11/18(金) 10:30~12:00 国際会議場1F 101会議室

①なぜ、ラウドネス運用規定は必要だったのか

11/16	仁平 成彦 氏	エフエム東京 マルチメディア放送事業本部 副本部長
11/17	寿田 道陽 氏	TBSテレビ 技術局 音声技術部 部長
11/18	仁平 成彦 氏	エフエム東京 マルチメディア放送事業本部 副本部長

②ラウドネス運用規定策定に向けた、これまでの取り組み

11/16	岡本 幹彦 氏	日本放送協会 放送技術局 制作技術センター 番組制作技術部 専任部長
11/17	小野 一穂 氏	NHK放送技術研究所 テレビ方式研究部(高臨場感音響) 主任研究員
11/18	仁平 成彦 氏	エフエム東京 マルチメディア放送事業本部 副本部長

③民放連技術規準T032の概要

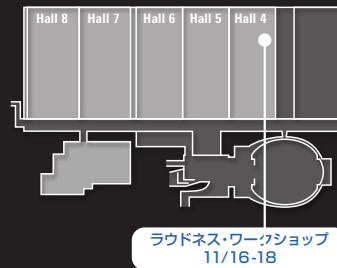
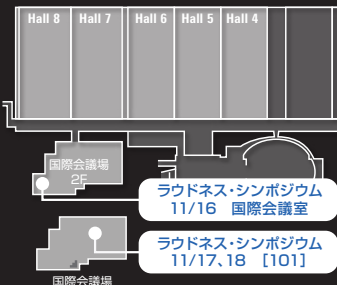
松永 英一 氏 フジテレビジョン 技術局 制作技術センター 制作技術部 エグゼクティブエンジニア

④ラウドネスメータは、どこの誰に必要か？

成松 深 氏 テレビ朝日 技術局 放送技術センター 主査

⑤ラウドネスメータの使いこなし

入交 英雄 氏 毎日放送 放送運営局 送出版 マネージャー



◆ラウドネス・ワークショップ

国際会議場エリアで開催される「ラウドネス・シンポジウム」は、ラウドネス運用の流れを俯瞰的に解説しましたが、それだけで現場での運用をイメージすることは、なかなか難しいため、より実践的な解説を行う「ラウドネス・ワークショップ」と、ラウドネスの未来をディスカッションする「スペシャル・パネルディスカッション」を開催しました。

	11月16日(水)	11月17日(木)	11月18日(金)
レギュラーセッション	セッション 1 10:30 ▶ 11:10 ラウドネスメータ基礎講座	セッション 1 12:10 ▶ 12:50 ラウドネスメータ基礎講座	セッション 1 12:30 ▶ 13:10 ラウドネスメータ基礎講座
	セッション 2 11:30 ▶ 12:10 ポストプロダクションでは？	セッション 2 14:40 ▶ 15:20 ポストプロダクションでは？	セッション 2 13:30 ▶ 14:10 ポストプロダクションでは？
	セッション 3 13:00 ▶ 13:40 放送局での運用	セッション 3 15:40 ▶ 16:20 放送局での運用	セッション 3 14:30 ▶ 15:10 放送局での運用
スペシャルセッション	スペシャルパネルセッション 1 14:00 ▶ 14:40 映画では？	スペシャルパネルセッション 2 16:40 ▶ 17:20 音楽では？	スペシャルパネルセッション 3 15:30 ▶ 16:10 TVと各種メディア

セッション 1 ラウドネスメータ基礎講座

そもそも「ラウドネス」って何？ラウドネスメータってどんな装置？ラウドネスメータの基礎知識について、ARIB TR-B32を基に実機を使って解説を行う。

11/16	岡野 充男 氏	日本放送協会 技術局 番組施設部 専任エンジニア
11/17	小野 良太 氏	日本放送協会 放送技術局 放送技術センター 番組制作技術部 専任エンジニア
11/18	古賀 則行 氏	日本放送協会 放送技術局 報道技術センター 中継部

セッション 2 ポストプロダクションでは？

ラウドネス運用によってポップエンジニアが直面する問題は何か？規準の説明、ミキシング手法について、映像素材を使って実験。「視聴者にとって快適音声とは」ラウドネスに参加する皆さんと共に考える40分。

村越 宏之 氏	(株)IMAGICA デジタルプロダクション部 銀座制作グループ
喜多 真一 氏	ソニーPCL(株) DP事業部 VS部 ポストプロダクション技術1課
永田 秀之 氏	(株)1991 代表 サウンドプロデューサー

セッション 3 放送局での運用(民放編)

ラウドネス運用を行うために、放送局はどのような対応が必要なのでしょうか？NAB技術規準T032の概要、放送局側の納品検査を中心としたワークフローについて、生放送への対応方法の提案などをお話させていただきます。納品側の方にも、何をしていたかなければならぬのかが見えてくると幸いです。

11/16	岩橋 貞成 氏	朝日放送 技術局 制作技術センター 報道技術グループ
11/17	平野 直樹 氏	日本テレビ 技術統括局 放送技術センター 放送実施部
	寿田 道陽 氏	TBSテレビ 技術局 音声技術部 部長
11/18	山田 昭廣 氏	名古屋テレビ放送 技術局 映像技術部

スペシャル・パネルセッション 1 映画では？

1990年初頭、デジタル化された映画音響は本編と予告編との間に激的なレベルジャンプが生じる問題に直面した。その先行解決事例を提示しつつ、映画音響従事者のメディア横断の今後の対応を映画音響の若きプロフェッショナル達と語る。

●モデレータ	高木 創 氏	(株)東京テレビセンター 音響制作技術部
●パネラー	室園 剛 氏	東映(株) デジタルセンター ポスプロ事業部
	大河原 将 氏	(有)アルカブース 音響効果
	中嶋 克 氏	アオイスタジオ(株) スタジオ技術部 録音グループ チーフ サウンドミキサー

スペシャル・パネルセッション 2 音楽では？

音楽制作においてのラウドネスはどうあるべきか？CDなどのパッケージメディアからモバイルプレーヤーへと音楽の聴き方が変化したことに伴って「音量」の捉え方は変化したのか？更にミュージックビデオやコマーシャルなど、映像に付随する音楽における「音量」はどう考えられているのか？レコーディング、マスタリング、MAなど音楽が扱われる様々な場面におけるラウドネスについて検証する。

●モデレータ	亀川 徹 氏	東京藝術大学 音楽学部 音楽環境創造科 教授
●パネラー	川崎 義博 氏	(株)ポニーキャニオン 制作技術部 レコーディングエンジニア
	井筒 康仁 氏	(株)丸二商会 マルニスタジオ MAエンジニア
	河野 洋一 氏	(株)サウンドインスタジオ オペレーショングループ長

スペシャル・パネルセッション 3 TVと各種メディア

リスナーは放送以外のコンテンツもTVやモニターで同時に楽しむが、現在放送以外ではラウドネス基準はこれからの課題である。各コンテンツ業界の方々を招き、業界事情、今後の方向などからリスナーのより良い音の体験について語る。

●モデレータ	由雄 淳一 氏	バイオニア(株) 主幹研究員/JEITA TA11対応標準化G 主査
●パネラー	川崎 義博 氏	(株)ポニーキャニオン 制作技術部 レコーディングエンジニア
	池上 卓也 氏	(株)USEN 番組制作部 番組管理課 課長
	武井 克明 氏	(株)ワフブレイ 代表取締役
	山添 亮介 氏	(株)ジュビターテレコム 上席執行役員 技術部門副部門長
	瀧津丸 勝 氏	(株)セガ 第一CS研究開発部 サウンドクリエイター

Result: Visitor Profile



■日別来場者内訳

	11/16(水)	11/17(木)	11/18(金)	合計
国内登録来場者数	10,043	9,921	9,978	29,942
海外登録来場者数	442	279	89	810
合計	10,485	10,200	10,067	30,752

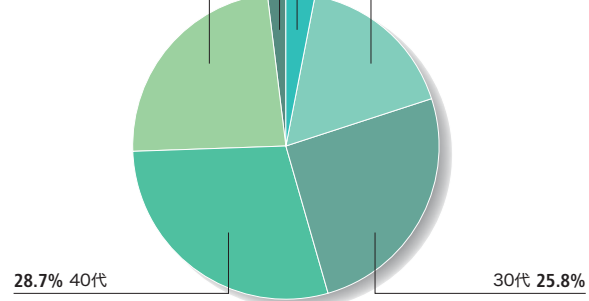
■登録来場者数の内訳

エリア	国・地域数/来場者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/29,942名	日本 29,942名
アジア地域	13カ国・地域/631名	韓国 445名/中国 74名/台湾 38名/香港 16名/シンガポール 15名/タイ 9名/インドネシア 8名/マレーシア 8名/ベトナム 7名/スリランカ 4名/フィリピン 3名/インド 2名/モンゴル 2名
北中米地域	9カ国・地域/61名	アメリカ合衆国 39名/カナダ 2名/メキシコ 7名/ブラジル 7名/エクアドル 2名/パラグアイ 1名/ペルー 1名/チリ 1名/コスタリカ 1名
大洋州地域	2カ国・地域/7名	オーストラリア 6名/ニュージーランド 1名
中東・アフリカ地域	4カ国・地域/9名	アンゴラ 3名/UAE 3名/カタール 2名/イスラエル 1名
ヨーロッパ地域	11カ国・地域/49名	イギリス 22名/フランス 9名/ドイツ 4名/オランダ 3名/イタリア 2名/スペイン 2名/ポルトガル 2名/エストニア 2名/デンマーク 1名/ハンガリー 1名/ポーランド 1名
不明		53名
	40ヶ国・地域	30,752名

◆来場者の属性

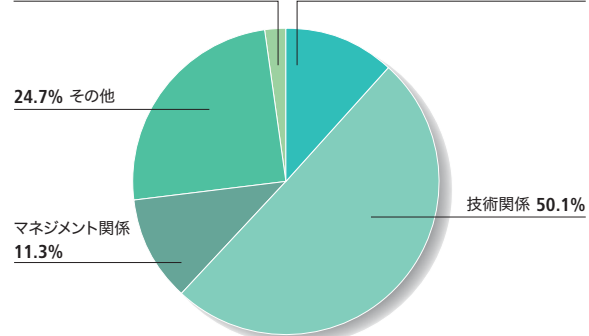
■年代

1.8% 無回答
23.7% 50代以上
10代 3.3%
20代 16.7%



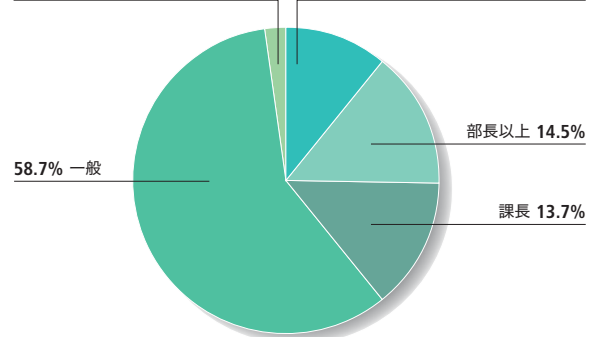
■職階

2.0% 無回答
制作関係 11.9%



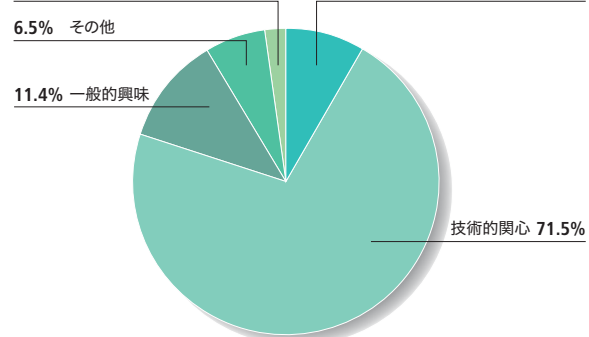
■職種

2.1% 無回答
経営者 11.0%



■目的

2.0% 無回答
購入のため 8.6%



■業種

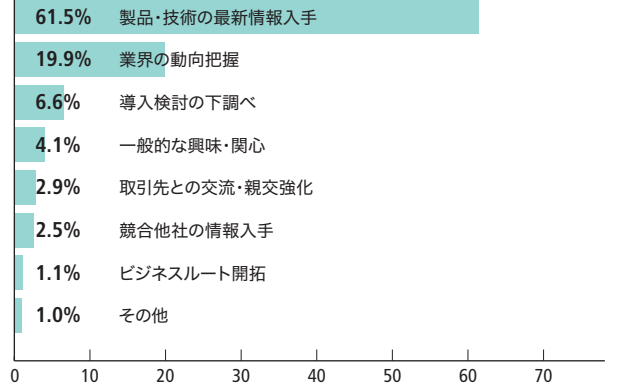
NHK	3.2%	インターネット関連	2.1%
民間放送テレビ局	8.7%	通信事業者	2.7%
民間放送ラジオ局	0.9%	コンテンツ配信事業者	0.9%
ポストプロ	7.6%	施設・店舗関係	1.5%
プロダクション	4.9%	官公庁・団体	1.8%
ビデオソフト制作会社	1.6%	その他ユーザ	9.1%
映画・映像制作会社	4.9%	商社	5.7%
レコード制作会社	0.8%	放送機器メーカ	12.5%
PA関係	4.1%	広告代理店	1.2%
CATV関係	3.1%	学生	6.8%
舞台・演出・美術・照明関連	2.9%	その他ゲスト	8.6%
コンテンツ制作関連	2.4%	無回答	2.0%

■関心(複数回答)

オーディオ機器全般	33.6%	送信システム	8.8%
映像機器全般	53.3%	電源装置	4.4%
マイクロホン	11.6%	測定機器	6.9%
ミキサ	13.8%	各種特機・周辺製品	8.4%
スピーカ	13.0%	ソフトウェア	11.8%
カメラ	26.9%	美術・舞台演出関連	3.5%
VTR・メモリーカード・光ディスク	13.1%	IPTV関連	7.5%
サーバ・ストレージ	10.9%	Mobile TV関連	7.3%
照明機器	9.3%	デジタルサイネージ	10.1%
映像モニタ	14.3%	デジタルシネマ	7.7%
編集・制作装置	20.7%	3D	13.0%
マルチメディアシステム	9.2%	デジタルコンテンツ	7.9%
制作管理システム	4.0%	その他	3.0%
送出システム	9.1%	無回答	1.9%
中継システム	9.6%		

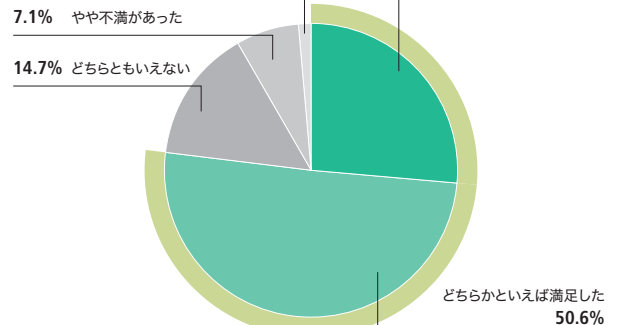
2011年来場者アンケート

◆『Inter BEE 2011』にご来場された目的を教えてください。
[複数回答]



◆今回のご来場の目的はどの程度満足されましたか。

1.2% 不満だった
満足した 26.4%

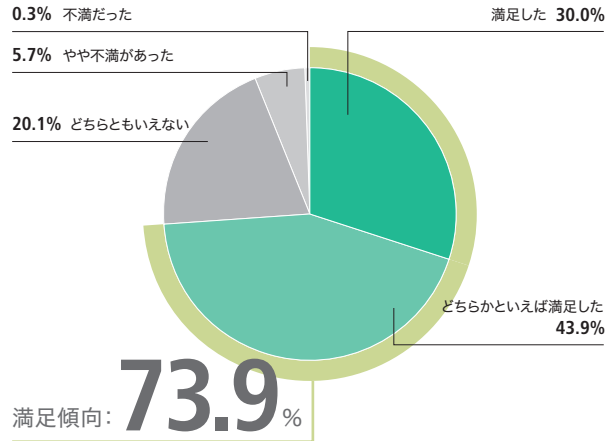


満足傾向: **77.0%**

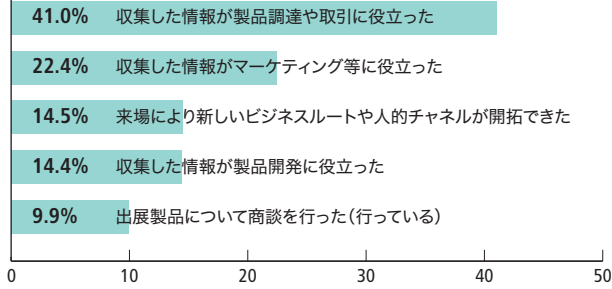


2011年来場者アンケート

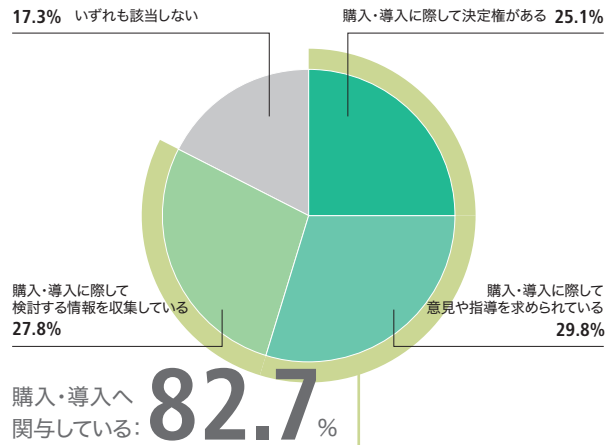
◆コンファレンス、同時開催イベントを聴講・参加されたの満足度を教えてください。



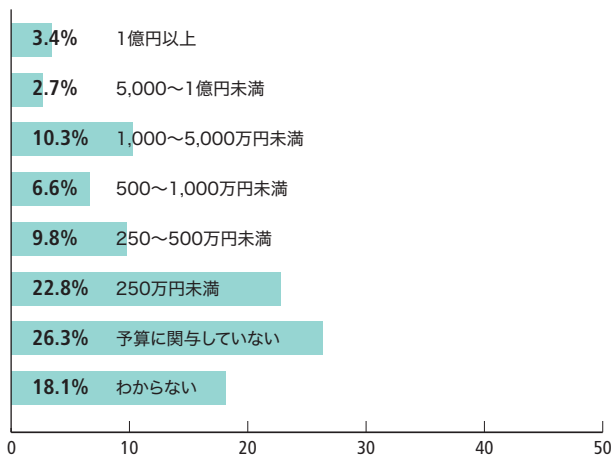
◆『Inter BEE 2011』を見学して、その後ビジネスに役立ちましたか。【複数回答】



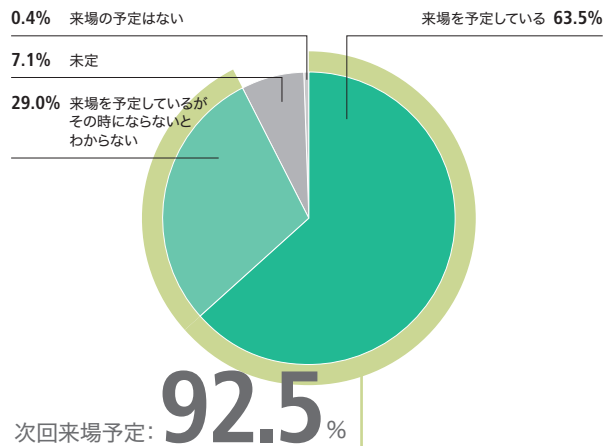
◆御社での製品・サービスの購入・導入にあたって、あなたはどの程度関与されていますか。



◆あなたが関与する製品・サービスの購入・導入に対する予算は、おおよそ年間いくらくらいですか。

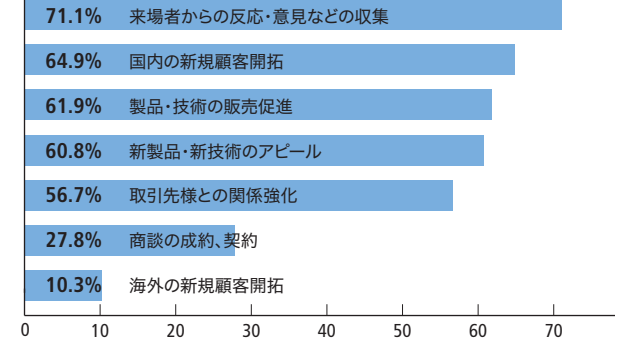


◆次回の『Inter BEE 2012』にご来場いただけますか。

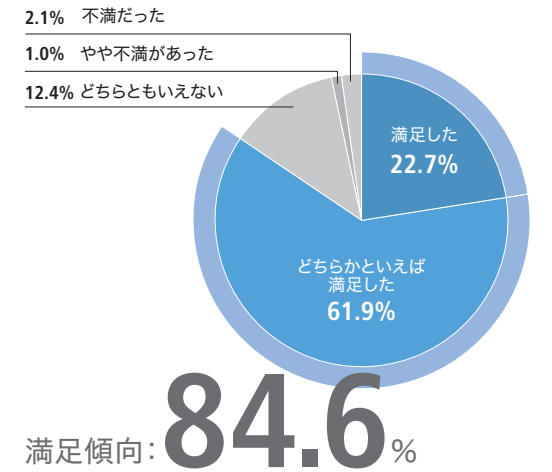


2011年出展者アンケート

◆出展した目的【複数回答】



◆今回の目的達成の満足度



■出展者数

展示部門	出展者数	小間数
プロオーディオ部門	272社	256小間
プロライティング部門	42社	28小間
映像・放送関連機材部門	455社	993小間
クロスメディア部門	31社	52小間
合計	800社	1,329小間

■出展者数の内訳

エリア	国・地域数/出展者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/334社	日本334
アジア地域	7カ国・地域/66社	インド1/韓国18/シンガポール2/台湾17/中国24/香港3/マレーシア1
北中米地域	3カ国・地域/188社	アメリカ173/カナダ14/メキシコ1
大洋州地域	1カ国・地域/10社	オーストラリア10
中東地域	2カ国・地域/15社	イスラエル13/トルコ2
アフリカ地域	1カ国・地域/1社	南アフリカ1
ヨーロッパ地域	20カ国・地域/186社	アイルランド1/イギリス65/イタリア8/ウクライナ1/エストニア2/オーストラリア1/オランダ5/スイス7/スウェーデン8/スペイン3/スロバキア1/チェコ1/デンマーク2/ドイツ53/ノルウェー4/ハンガリー1/フィンランド1/フランス14/ベルギー7/ラトビア1
	35カ国・地域	800社

出展国・地域数: **35**ヶ国・地域(過去最多)
 海外出展者数: **466**社

◆今回ターゲットにした業種【複数回答】

民間放送テレビ局	80.4%	通信事業者	28.9%
NHK	73.2%	PA関係	22.7%
CATV関係	57.7%	コンテンツ配信事業者	22.7%
映画・映像制作会社	46.4%	施設・店舗関係	22.7%
官公庁・団体	41.2%	その他コーザ	21.6%
放送機器メーカー	41.2%	舞台・演出・美術・照明関係	20.6%
ポストプロダクション	40.2%	インターネット関連	20.6%
プロダクション	38.1%	レコード制作会社	14.4%
商社	30.9%	広告代理店	9.3%
民間放送ラジオ局	29.9%	学生	7.2%
ビデオソフト制作会社	29.9%	その他ゲスト	4.1%
コンテンツ制作関連	29.9%		

◆今回ターゲットとした職種【複数回答】

技術関係	83.5%
制作関係	58.8%
マネジメント関係	21.6%
その他	4.1%

Result: Publication and Promotion



1. 広報活動(リリース配信実績)

1. 出展募集開始告知(2/28)
2. 入場事前登録開始告知(8/31)
3. 取材誘致案内(11/10)
4. 開幕告知(11/15)
5. プレスルーム設置(11/16~18 展示会場5ホール内)
6. 終了報告(11/18)

2. プレス登録者数

409名(うち海外11名)

4. 国内記事掲載(主な掲載実績)

掲載日	媒体名	内容
3月 4日	電波新聞	JEITA国際放送機器展の出展企業募集
3月 7日	映像新聞	Inter BEE出展募集を開始 クロスメディア部門を新設
9月19日	映像新聞	Inter BEE 2011入場事前登録受付中
10月17日	映像新聞	NABスミス会長が登場 初日11時から基調講演
10月31日	電波新聞	Inter BEE出展者事前取材記事
	映像新聞	Inter BEE 2011でラウドネスサミット ARIB、民放連が主催
11月号	Full Digital Innovation(FDI)	Inter BEE 2011を前にして/ 期待される衛星通信・衛星放送分野の動向(特別記事)
	School Amenity	Inter BEE開催告知
	B-maga	Inter BEE開幕直前特集
11月 1日	電波新聞	国際放送機器展に期待する 国内とアジアがターゲット
11月 5日	VIDEO JOURNAL	Inter BEE 概要、出展者記事
11月 7日	電波新聞	Inter BEE 出展者記事
	映像新聞	Inter BEE プレビュー、事前取材記事
11月11日	電波新聞	Inter BEE 出展者記事
11月14日	映像新聞	Inter BEE特集、展示&同時開催イベントみどころ
11月15日	電波新聞	Inter BEE出展者事前取材
11月16日	日経産業新聞(東京)	放送にかかわる最新技術が一堂に 国際放送機器展
	日経産業新聞(大阪)	放送にかかわる最新技術が一堂に 国際放送機器展
	日刊工業新聞(東京)	2011国際放送機器展 きょう開幕 国内外から800社超出展
	日刊工業新聞(大阪)	2011国際放送機器展 きょう開幕 国内外から800社超出展
	電波新聞	放送機器「4K」に期待 関連製品の競演、特集(テレビ新時代)
	電波タイムズ	Inter BEE 2011 16日開幕 4K・3D・ファイルベースなど 新たなビジネス展開に注目、特別インタビュー
	PRONNEWS	特集(Inter BEE 2011の歩き方)
11月17日	信濃毎日新聞	Inter BEE出展者記事
	日刊工業新聞(東京)	映像制作機器の4K対応加速、Inter BEE出展者情報
	日刊工業新聞(大阪)	映像制作機器の4K対応加速、Inter BEE出展者情報
	アジアンビジネスアライアンス	インタービー2011が16日開幕 スポーツ撮影あふれる臨場感

3. 印刷媒体掲載記事数

	記事数
開催前	60件
開催中	26件
開催後	51件
合計	137件

※2012.1.20現在

掲載日	媒体名	内容
11月17日	アジアンビジネスアライアンス(大阪)	インタービー2011が16日開幕 スポーツ撮影あふれる臨場感
	電波新聞	国際放送機器展 超高精細映像などを訴求
11月18日	電波新聞	福島県南相馬市 国際放送機器展でシンポジウム開催
	電波タイムズ	Inter BEE 2011 華やかに開幕 最先端技術・機器を一堂に展示
11月21日	映像新聞	Inter BEE 2011 高画質ファイルベースの時代へ、 NABスミス会長が来日 Inter BEEで基調講演、出展者レポート
11月22日	電波新聞	国際放送機器展から(上) 新しい映像メディアに対応
11月23日	電波新聞	国際放送機器展から(中) 各社、ファイルベースに注力
11月24日	電波新聞	国際放送機器展から(下) 新製品で多彩なアプローチ
11月25日	電波タイムズ	出展製品取材記事
11月28日	映像新聞	Inter BEE 2011レポート(出展各社)
12月号	B-maga	放送・映像技術の新時代到来を告げた「Inter BEE 2011」
	NEW MEDIA	Inter BEE出展者紹介記事
12月 5日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート① 新たなビジネス展開に注目
	映像新聞	Inter BEE 2011レポート(出展各社)
12月 7日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート② 新たなビジネス展開に注目
12月 9日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート③ 新たなビジネス展開に注目
12月12日	映像新聞	Inter BEE 2011レポート(出展各社)
12月13日	電波タイムズ	Inter BEE出展者報告記事
12月14日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート④ 新たなビジネス展開に注目
12月15日	VIDEO JOURNAL	Inter BEE概況、出展者取材記事
12月16日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート⑤ 新たなビジネス展開に注目
12月19日	電波タイムズ	2011年国際放送機器展レポート⑥ 新たなビジネス展開に注目
12月19日	映像新聞社	Inter BEE 2011レポート(出展各社)
12月26日	映像新聞社	Inter BEE 2011レポート(出展各社)
1月号	Sound & Recording Magazine	フルデジタル制作時代を感じさせるInter BEE 2011、 プロ・オーティオ新製品を中心にレポート
1月号	月刊映画テレビ技術	～Inter BEE 2011を終えて～ 2011年映画テレビ技術の動向

5. 国内テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月18日(金)	日経CNBC	News Zone
	日経CNBC	News Zone(再放送)
11月19日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評
11月26日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評
2012年1月6日(金)	NHK DE2/023ch	Japan BIZ Cast
2012年1月11日(水)	NHK BS-1	Japan BIZ Cast

6. 海外テレビ放映

放送日	放送局	番組名
全世界		
12月22日(木)	NHK WORLD/jibtv	"Japan Biz Cast"
ヨーロッパ		
11月26日(土)	LCI (La Chaîne Info)	Plein Ecran
11月27日(日)	LCI (La Chaîne Info)	Plein Ecran
11月29日(月)	LCI (La Chaîne Info)	Plein Ecran
11月30日(火)	LCI (La Chaîne Info)	Plein Ecran
12月 1日(水)	LCI (La Chaîne Info)	Plein Ecran
米国		
1月(放映予定)	IFC(Independent Film Channel)	News Report
1月(放映予定)	Current TV	News Report
1月(放映予定)	Wealth TV	News Report
2月(放映予定)	Discovery Channel	Tech 360

7. 広告掲載(国内)

掲載紙誌	発行日
PRO SOUND	9月18日
日経ネットワーク	9月27日
ビデオサロン	9月20日
CG World & Digital Video	9月10日
放送技術	9月28日
FDI	9月28日
テレコミュニケーション	9月25日
ビデオジャーナル	9月15日
日経コミュニケーション	9月30日
サウンド&レコーディングマガジン	9月15日
MJ(無線と実験)	9月10日
月刊放送ジャーナル	10月10日
電波タイムズ	11月10日/16日
通信興業新聞	9月26日/11月7日
映像新聞	10月17日/11月7日
電波新聞	11月15日/11月16日
月刊OPTCOM	11月15日
月刊「B-maga」	11月10日

8. 広告掲載(海外)

掲載紙誌	発行日
VIDEO ART'S(韓国映像)	9月号
Video Plus(韓国映像)	9月号/10月号
Audio(韓国音響)	9月号
PA(Pro Audio韓国音響)	9月号/10月号
Broadcast&Production(中国放送・制作)	9月号
Info AV China(中国映像技術)	9月号
IBI(世界広域電視—International Broadcast Information—)	8月号
BET(中国映像)	8月号
DigiAsia(台湾映像・音響)	8月号
科訊ネット(Online Magazine 中国映像・音響全般)	9月15日～11月15日
AV-Specialist(Online Magazine 世界版 - 映像・音響)	8月20日～11月20日
Asia Pacific Broadcasting(アジア放送)	9月号
Television Asia(アジア放送)	9月号
Asia Image(アジア放送制作)	9・10月号
Broadcast Engineering(米放送—US/Canada edition)	9月号
IBC Daily	9月9日
TV Technology(欧州放送—Europe edition)	9月号
JEI(世界版—放送技術)	9月号

9. Inter BEE Official Mail Magazine

過去の来場者データベース、および今年の事前登録者に向けて
毎週金曜日に「Inter BEE 2011 OFFICIAL MAIL MAGAZINE」を配信。

約 **56,000** 件 **17** 回配信

※情報配信可能なデータ件数

10. Inter BEE Online Magazine

年間を通じてInter BEEの出展者情報、関連展示会や業界最新ニュースなどの
話題性の高い情報をいち早く記事や動画で配信しました。

◆Inter BEE 2011出展者情報

Online Magazine: **34** 本 Inter BEE TV: **165** 本

合計: **199** 本

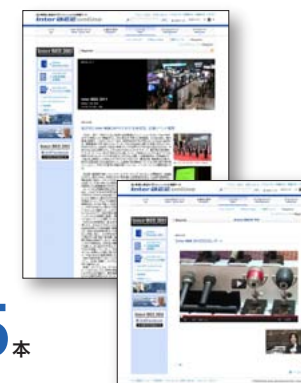
◆関連展示会特集

Online Magazine: **61** 本
(NAB・SIGGRAPH・IBC・CEATEC JAPAN)

Inter BEE TV: **15** 本
(NAB)

◆業界最新ニュース

Online Magazine: **105** 本



11. PRツール(印刷物)の作成

- ポスター: 出展者・関係団体に配布
- 招待券・案内状・封筒セット(和・英): 出展者・関係団体・メディアに配布
- Exhibition Information: 会期中、全来場者に配布



12. メディアパートナー

関連業界紙誌がメディアパートナーとして
Inter BEEをサポートし、
多くの記事を掲載いただいています。





Inter BEE 公式Website



Inter BEE 公式Facebookページ

会期: 2012.11.14 水 » 16 金

会場: 幕張メッセ

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

主催: JEITA 一般社団法人 電子情報技術産業協会

13. Inter BEE 公式 Website

◆公式Websiteページビュー: **5,269,159**

◆ページビュー言語別比率

日本語	73.81%
英語	25.80%
韓国語	0.17%
中国語(簡)	0.17%
中国語(繁)	0.05%

◆サイト内検索キーワードランキング

日本語サイト		英語サイト	
1	sony(ソニー)	1	2011
2	canon(キヤノン)	2	mediasmiths
3	技術報告会	3	2012
4	ラウドネス	4	amberfin
5	NEC	5	sony
6	panasonic(パナソニック)	5	AJA
7	東芝	7	yamaha
8	avid	8	atomos
9	3D	8	safecom
10	朋栄	10	edius

◆ソーシャルネットワーク対応

Inter BEE 2011では、公式Facebookページを作成し、公式Website(Inter BEE Online)に掲載される出展情報や記事を発信しました。また、写真を掲載し、会場内の様子をリアルタイムで伝えました。

■Facebook(日本語版・英語版)

【実施内容】

- 最新Magazineを中心とした展示製品情報の発信
- 展示会場内の写真アップ
- Twitter公式アカウントのつぶやき閲覧が可能

2012年
開催予告

音と映像と通信のプロフェッショナル展

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

Inter BEE online
www.inter-bee.com